真マジンガーZERO 対アルティメットまどか

凡庸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

円環の理に住まう女神と魔法少女と魔神のおはなし

敬愛する絵師様よりいただきました
素晴らしい限りであります

同じく素晴らしいイラストをいただきました！

※真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑤のネタバレとなります

みみずくやしき様（@ｍｏ＿ｍｉ３６）にＳｋｅｂでご依頼させていただきました美しい、夢のような光景…

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１３２８４５／

魔法少女きょうこ☆マギカ　流れ者達の平凡な日常（マギカシリーズ×新ゲッターロボ）の番外編的な内容となります

目次

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか①　―――　1
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか②　―――　10
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか③　―――　23
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか④　―――　37
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか　４・５　―――　47
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑤　―――　58
真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑥　―――　73
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの　82
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの②　―――　92
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの③　―――　101
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの④　―――　110
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの⑤　―――　121
真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの⑥

――― 130
真マジンガーZERO 対 ジャンヌ・タルト プロローグ ――― 142
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達① ――― 147
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達② ――― 153
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達③ ――― 159
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達④ ――― 170
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達⑤ ――― 179
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達⑥ ――― 194
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達⑦ ――― 205
番外編 聖なる女神と福音の守護天使達⑧ ――― 214
特別編 世の果ての宴① ――― 225
特別編 世の果ての宴② ――― 235
特別編 世の果ての宴③ ――― 245
特別編 世の果ての宴④ ――― 256
特別編 世の果ての宴⑤ ――― 265
特別編 世の果ての宴⑥ ――― 276

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか①

無明の闇が何処までも広がる。
全てを吸い込み、そして決して離しはしない。
そんな色彩の闇だった。
だが、万物には例外がある。
この闇の中で、眩い光を放つ存在があった。
その周囲は絶対の闇の中にありながら光に満ちていた。
桃色の、美しい花を思わせる光であった。
激しくも優しい輝きの中には、光よりも美しい姿が存在していた。
白く煌びやかな衣装。
雪のように白い肌。
神々しく輝く薄桃色の翼。
翼と同色に輝く髪は端が存在せず、果てしなく伸びているように見えた。
そして実際、その存在がいる場所を基点に、光が世界を染めていった。
闇の中に光を広げそれは幼い少女の姿をした、白と桃色の女神であった。

裾に翼をあしらえたソックスを纏った白い脚が虚空を蹴り、背中の翼が闇を掴んで飛翔する。
女神が触れた場所は闇が砕かれ、彼女が放つ光と同じもので満たされていった。
自らの領域を増やし、掌握していくかのようだった。
だが、存在するだけで闇さえも打ち砕く女神の顔には、緊張が張り付いていた。
光を拡散させながら飛翔しつつ、女神は自ら光を放った。
伸ばされた左手は蔓のような弓を握っていた。
弓の端には女神が纏う光と同色の力が溜まり、右手が番える矢に光と力を与えている。
放たれたのは、それであった。
輝く矢は闇を切り裂き、闇を光へと変えていく。
光の浸食は留まる所を知らず、闇の果てへと消えていき、そこもまた光で満たした。
だが輝く矢の行きつく先は、闇に覆われていた。
正確には、黒い光というべきか。
桃色の光はその表面で弾け、微細な粒子となって消えた。
既にその黒い光の周囲では、無数の粒子が散乱している。
女神の放った矢には、宇宙を根こそぎ消し去る力があったが、それが事も無げに無力

化されていた。
その結果を、女神は金色に輝く瞳で視認していた。
しかし構わず、次の弓矢を構える。
力の差は分かり切っていた。
そして降参はしたくない。
ならば、戦うのみ。

右ダ

構を取った彼女の傍らに文字が浮かんだ。
光の文字だった。
色はなく、純粋な光の輝きで作られた文字。
それに従うように、女神は細い身体を、水面から跳ねた美しい魚のように捩じった。
翻った身体のほんの近くを、何かが飛翔していった。
女神はそれを眼と気配で追った。
現行の宇宙と過去と未来を掌握する女神の眼と感覚を以てしても何も見えず、何も感じられなかった。

下

再び文字が去来する。
自然な動きだったが、華麗なステップで女神は飛翔物を回避した。
その際に彼女は視認した。
弓のように伸びた、黒く長大な刃。
そのサイズは、女神とは比較にすらならなかった。
例えるなら、女神をその顔つきや体格から見て第二次性徴期の中学生程度の子供とすれば、刃は首が痛くなるほどに見上げるばかりの巨大建造物に匹敵した。
そしてそれが装着された鉄の剛腕を。
腕の形状、拳の形を取った五指の握られ方から、それが右腕であると分かった。
となると。

上

下方から上へ飛翔する刃を備えた右腕と入れ違いに、それと対になる左腕が飛来した。
刃が接触する瞬間に、女神は自ら刃に繊手を添えた。
一瞬遅くても早くても、女神の姿は両断されていたに違いない。

ホウ　ヤルデはナイカ

シカシ　無茶ヲスル

その傍らに文字が浮かぶ。それは意志の主の感心と、些かの諌めを表していた。
長いスカートを優雅に翻しながら、女神は巨大な刃の上を、虚空を飛ぶ蝶のように舞った。
過ぎ去っていく刃。
しかし今度は存在を捉えた。
闇を切り裂く鋼鉄の刃が、その主の元へと戻る様を女神は認識できた。
戻るといいつつも、タイムラグはゼロに等しかった。

消失し、再び出現する。そんな感じだった。
黒い剛腕が、白い装甲を纏った白い肘に接続される。
長大に過ぎる刃は、縮小されても尚巨大であった。
女神から見て遥か彼方であり限りなく近い場所にそれはいた。
黒い装甲は闇よりも黒く、白の装甲は氷の如き冷え冷えとした輝きを放っていた。
四肢を有した姿は、人間に似ていた。
しかし人間よりも遥かに逞しく、そして非現実じみた存在感と気配を放っていた。
まるで、この世界の存在では無いような。例えるなら、物語の中の存在のような。
女神の数十倍以上の身長を有した、機械の神がそこにいた。
背面には、無である零と無限大。
そして最終である事を示す、異形の環を描いた真紅の翼が背負われていた。
逞しい身体を束ねるのは、兜か王冠のような装甲を施された頭部。
そしてその貌にあたる部分は、獰悪にして凶悪極まりない造形で構築されていた。
髑髏の形を刻み込んだ、重厚な鉄仮面。
遭遇した、または認識した存在に絶対の死と破滅を与えるような、死神や悪魔でさえも恐れ慄くであろう姿。
魔なる神。

魔神。

暗黒の中で、それは輝いて見えた。
闇の中で輝く獣の瞳のように。
それに対し眼を逸らさず、女神は真っ向から姿を見据えていた。
可憐ながら、凛とした強い表情を見せる彼女の元に、光の文字が並んだ。

イイ面構エだ

流石ハ究極を冠スル女神

獰悪な表情は変わらず。
しかし魔神は、賛美の言葉を女神へと送った。

魔法少女ノ背負ッタ　全ノ因果を受ケ止メ

時間ト空間サエモ越えて　救世ヲ為すトイウノナラ

究極ノ女神　ソシテ円環の理よ

私如キに怯ムで無イ

私ヲ

魔神タるこの私ヲ

マジンガーＺＥＲＯ　ヲ

塵一ツ残サズ　無ニ還ス気デ来るガイイ

泰然と構えたまま、不動の姿勢で魔神は女神に告げた。
女神はそれに、細く秀麗な顎を引いて頷いた。
そして、先のものよりも遥かに力を増した光の弓矢の斉射で応えた。
魔神ーーーＺＥＲＯの装甲の上で無数の光が炸裂し、宇宙から闇が駆逐されていく。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか②

光が溢れていた。
全ては煌々と照らし出され、その中で二つの存在が、光の中の影のように浮かび上がっていた。
一つは桃と白の輝きを放ちながら飛翔する女神。
神々しい翼を広げて光の中を舞うように飛びながら、矢を番えた弓を放つ。
女神と同じ白桃の如き輝きの矢は放たれた直後に、太さはそのままに複数に別れた。
そこからまた更に枝分かれし、光の中に無数の美しい線が描かれる。
上下左右、あらゆる角度に別れて光は奔る。
光の鏃の切っ先は、ある一点へと向かっていた。
そこにもまた光があった。
白と黒と、そして紅蓮の赤を背負った光の神がそこにいた。
ただしそれは、神は神でも魔神であった。
迫る光を前に、重厚な装甲が施された右腕が掲げられた。
腕の先にある指もまた太く、腕の側面には剛腕を挟み込むように二枚の斧状の巨大な

刃が備えられている。

悪クハナイガ　マダ甘イ

それが上方から下方へと無造作に振られた。

迫る光の一つ一つには宇宙さえも破壊する威力が込められていたが、それらは冷たい輝きを放つ装甲の上で虚しく弾けた。

そして、それだけに留まらなかった。

振り払われた光は矛先を変えられ、後続の光の矢へと向かった。或いは背後上空下方へと流れ、それらと噛み合わされていた。

魔神が跳ね返した光の矢は、女神が放った光の矢を貫き、挙句の果てに角度さえ変えて女神へと向かって行った。

女神の視界は、己が放った光と同じ、そして全く別物の破壊の力を備えた光で埋め尽くされた。

そして光が炸裂する。

煙のように拡散する光の粒子。

それを、ＺＥＲＯの名を持つ魔神は髑髏の貌に刻まれた鋭い眼で見ている。

眼の中には、非生物とは思えない禍々しく生々しい渦巻く瞳が描かれていた。

ソウダ

ソレデイイ

広がる光の粒子を前に、魔神が光の文字で意思を表す。
そして光の粒が、風に巻かれた霧のように晴れていく。
光の霧の奥に、巨大な障壁が聳えていた。
全体の形で見れば、六角形に近い。
物体の大きさで表せば、一辺が数百メートルからキロ単位の線で構成されていた。
それぞれの線の頂点と中間は、光が二重となった円で出来ていた。
円の数は九つあった。円の中には、複雑な模様と奇妙な文字と思しきものが書き連ねられている。

旧約聖書に記された生命の樹。
障壁は形状によく似ていた。
そしてその中央に、光の翼を広げた巨大な人型がいた。
細く長い手には、二重螺旋を描いて伸びた二又の長槍が握られている。
曖昧な形状ではあったが、それは天使の姿に見えた。
目も鼻も無く、その中で唯一、生物である事を思わせる巨大な口が鰻を思わせる頭部に開いていた。
数は円の数と同じく9体。異形の天使達であった。
障壁の中央には女神の姿があった。
幼き女神は、何かを堪えているような痛切な表情を浮かべていた。
肉体的な苦痛ではなく、心理的な痛みを女神は感じていた。
金色の瞳は、障壁を展開した異形の天使達に向けられていた。
表情の伺えない顔に姿であったが、その体表からは光が散っていた。
あまりにも苛烈な攻撃は、障壁を展開しても防ぎきれるものではなく、また障壁自体も天使達の力を大きく吸い取り存在を希薄化させていた。

異形デハアルガ

オ前達モ　救済ノ天使

元ト同ジク　女神ニ使エルノハ運命か

ダガ

意思を告げたＺＥＲＯの眼が煌々とした輝きを放った。

守護天使ヲ名乗ルニハ　まだ力が足リヌ

天使たちは消えゆく姿を力に変え、障壁の上に更なる障壁を重ねた。
天使たちの前に、多重線が描かれた八角形が連なり、生命の樹を埋め尽くす勢いで広がっていく。

女神も力を発しようとするも、その姿の周囲にも八角形の障壁が生じた。
女神はその中に囚われる様にして隔離された。檻であり、守護の結界の表面を女神は叩いたがびくともしなかった。
そこに、光の文字が浮かんだ。

光子力ビーム

魔なる神、マジンガーＺＥＲＯの双眸が輝き、眩い光が放たれた。
左右の眼から放出された光が合わって二重螺旋となり、更には無数の光弾に拡散し、雨やあられどころか大海の大津波の勢いで生命の樹へと迫る。
九体の天使が持てる力の全てを用いて障壁を強化し、光を迎え撃つ。
堅牢な光の大樹となった生命の樹は、無数の光弾を弾いた。
しかし最初の接触を終えた時には、既に力の大半を喪っていた。
光弾は弾かれても障壁の表面に残滓を残し、それは障壁を蕩かせて光を内部に届けていた。

光の壁の内側で、破壊の光が舞い踊る。
破壊の乱流の中、女神は自らの力で障壁を纏いつつ外を見た。
身体の大半を破壊されてもなお、異形の天使たちは女神の前に聳え立ち、破壊光を受けていった。
光の前に天使の頭が消し飛び、胴体が削り取られる。
それでもそれらは女神を護り続けた。
消えゆく寸前、横長の顔を横断するように長く伸びた口は、どこか微笑んでいるようにさえ見えた。
そこに無数の光が注がれ、光の大樹が砕け散った。
それもまた光へ還り、光が拡散していく。
微細な光の粒がさざ波のように連なって拡がる光に、魔神は眼を細ませた。
その光の波紋に、何かを見出したように。
やがてそれは大瀑布のような波濤と化してＺＥＲＯへと向かって行った。

ソウカ

ソレガ　オ前達ノ新シイ姿カ

自らより遥かに巨大な、大山脈に等しい光の波濤を前にＺＥＲＯはそう告げた。
縦横に広がる波濤は、中心部分に形が収斂し逆さまの大渦となっていた。
ＺＥＲＯへと先端を受けたそれは、複数の刃のような突起を備えたドリルの形を成していた。
自然現象にはあり得ない、何かの意思を宿した存在であった。

シャラクサイ　トハイワヌ

そう告げて、ＺＥＲＯが右腕を前へと伸ばした。
そして巨大な手を広げた。
しかし二つのサイズ差は、比較するも馬鹿々々しいほどの差があった。
巨大とはいえ、マジンガーＺＥＲＯの身長は女神の数十倍、６０メートル程度と云った処である。
対してドリルは連なる大山脈に等しかった。

女神と魔神の対比どころではない。

クルガイイ

当然とでも言うように、魔神は言った。

言われるまでも無い、と言わんばかりに超巨大な光のドリルは漆黒の掌へと直撃した。

光で満ちた宇宙が、接触の衝撃で大きく震えた。そしてその激突の決着は、次の瞬間であった。

超巨大なドリルの直撃に、魔神は微動だにしなかった。

そして激しく回転するドリルと魔神の手の間で、激しい光が飛散する。

それは、ドリルが先端から砕かれる事で生じる光であった。

しかしドリルは回転を緩めず、むしろ加速させて魔神へと迫る。

欠損した部分を次々と埋め、また砕かれては再生する。

破壊されてゆく光は、奇妙な形を取っていた。

細い腕と手足、人間によく似た構造をしていたのである。

やがて、全てが砕かれた。

莫大にも程がある力の掘削を正面から受けた魔神の掌には全くの損傷が見られず、熱さえも有さぬ絶対零度の冷たい光を放っていた。
そして魔神は開いていた五指を握った。
五指はドリルの最後の欠片を掴んでいた。
光で出来た細首の上に、輝く骸骨の貌があった。
不気味な姿ではあったが、その頭の上には天使を思わせる輪が浮かんでいた。
それは首から下を喪失しつつも、上下の顎を激しく動かし、魔神を噛み砕かんと決死の反撃を試みていた。

良クヤッタ

オ前達ハ時間ヲ稼ギ　光ノ呼ビ水トナッテ目的ヲ果タシタ

その様子に、魔神は満足げな意思を伝えた。

伝えると同時に首を強く握り締めた。
尋常ではない膂力に、首の身ならず頭部までもが完全に破壊されて光へと還る。
拡散する光の奥に、魔神は無数の光を見た。
海や砂漠のように広がる光ではなく、それらは明確な形を有していた。
神秘的な光を放つ古代の戦士。
似た趣を持ち、体表から電磁の輝きを放つ二体の巨体。
複数の獣を束ね、一体の人型とした超獣機神。
空手と思しき武術の構えを取った、闘将とでも呼ぶべき姿。
無敵を思わせるほどの日輪の輝きと、月光の煌きを額に宿した鋼人と超人。
それらと比べ遥かに小さな、小銃を肩に担いだ軍人を思わせる姿、装甲の騎兵。
それよりも更に小さな、人間と大して変わらない姿の、ほぼフレームそのままといった単眼の機械兵。
背中のバッテリー・コードを外し、卵を思わせる拘束具から泰然と立ち上がる。
その他にも無数の、人に似た姿をした装甲された者達が連なっていた。

それらの中央に、輝く翼を広げた女神がいた。
無数の軍勢は、女神の元に馳せ参じたかのようだった。

素晴ラシイ

私カラ学ンダ因果ノ力を　ココマデ使いコナストハ

多種多様の大きさと無数の形を持ち、眩い輝きを放つ可能性の戦士たちを前にＺＥＲＯが放った光の文字には、感嘆の響きが込められていた。
そして魔神は更に続けた。

フム

私ガ呼ビ出ス時ヨリモ多イヨウダ

当然か

呼ビ出サレル立場トシタラ

モチベーションがマルデ違ウ

逆の立場ナラ　私モソウスルダロウ

かつて自らを滅ぼした可能性の光の大軍勢を前に、魔神は率直な、そして長い感想を告げた。

それは、子供じみた言い訳に思えなくも無かった。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか③

無限無窮の光が砲撃となって迸る。
円環の女神の導きにより無数に顕現した光の戦士たちが、手に携えた武具から光を放ち、または自らが光となって飛翔していった。
輝く神鳥の姿となった古代の戦士が、全身に超電磁を纏い刃を備えた竜巻となった鋼の巨体が。
そしてそれらを遥かに凌ぐ巨体を誇る単眼の巨体が、太い右足に稲妻のような輝きを帯びた蹴りを放って突撃していく。
それらの終着点に聳える、鉄の魔神を目指して。

来イ

無数の攻撃を、魔神は真っ向から受け切っていた。

放たれる光の弾丸と熱線は全て魔神に直撃するも、容易く弾かれるか水のように滑り抜けていく。
超高熱による物質の変性さえも見られず、分子単位で変化が無い。
それどころか、装甲の温度さえも変化していないかもしれない。
そこに殺到する神鳥の嘴、超電磁の竜巻、そして稲妻のキック。
光速を上回る速度を有したそれらに、ＺＥＲＯは動いた。
数憶分の一秒程度の時間の後に、それらは光へと還っていた。
魔神が薙いだ左腕の刃には嘴の一部と電磁の残滓が絡みつき、髑髏のような口には稲妻を宿した装甲の一部が咥えられていた。
ただの薙ぎ払いと噛み付きからの投擲で、ＺＥＲＯは三体の鋼の勇者たちを光に還した。
そしてＺＥＲＯは上空を見た。
先程の三体はこれを通すための布石でもあったのだろうか。
そこには二体の刺々しい造形をした重厚な姿があった。
二体がそれぞれの胸の前で両手を合わした時、『天』と『烈』の文字が浮かんだ。

是非モ無シ

浮かんだ光の文字を、複数の巨大な炸裂が覆い隠した。
荒れ狂う光の奔流はまるで、異次元の門が開き、冥府と繋いだかのような光景だった。
それを為した二体、冥府の王とでもすべき存在達は二つに裂けていた。
破壊の奔流もまた真っ二つに割れている。
消えゆく光のを更に切り裂き、巨大な二つの刃が飛翔していた。

アイアンカッター

光の文字でＺＥＲＯは呟く。そして二体の冥王と、顕現した冥府の世界を切り刻んだ両腕が主の元へと舞い戻る。
腕が接続されるよりも前に、ＺＥＲＯの左右から二体の機影が迫った。
それらもまた、似た姿をしていた。
細身の身体に、鬼を思わせる一本角。

光のシルエットは曖昧模糊としていたが、右のものは四ツ目。左のものは人間に似た二ツ目であるように見えた。
両者が携えたのは、右は異形の天使たちが持っていたものとよく似た螺旋を描いた二又の槍。
左は螺旋を描きつつ、斧のような趣となった槍を持っていた。
似てはいるが、相反する存在。
それぞれが絶望を希望を冠された機体であった。
それらが左右から急襲し、二種の槍をＺＥＲＯへと突き立てに掛かる。
その寸前、両者の前に文字が浮かんだ。
文字の奥で、魔神が両腕を両者に向けていた。
魔神の腕の断面が展開し、複数の射出口が生成される。
孔から覗くのは、牙のような鋭い刃。

ドリルミサイル

文字の意味を理解した瞬間、二ツ目が八角形の障壁を展開した。
それを紙のように引き裂き、回転する刃の弾丸が二体を弾き飛ばした。

障壁と槍の旋回により全壊は免れていたが、身体の各部が大きく抉れていた。
その間にＺＥＲＯは両腕を接続。追撃は不要とみたか、四ツ目に抱えられて撤退していく様子を横目で見送っていた。

苦労ノ多イ一家ダ

忌憚のない意見とでも言うように、ＺＥＲＯは光でそう呟いた。
自分が苦労を与えた加害者である自覚があるかは、定かではない。
その顔面へと巨大な光線が激突した。
微動だにせずに、その根源を魔神は見つめる。
遥か彼方、長大な火砲を両手で握る機体の姿が見えた。
体型は先の二体と似ていたが、それは単眼であった。

遺伝子的ニハ夫ト息子、ソシテ自分自身ノ撤退ノ支援トナルカ

母トイウノハ大変だ

感慨深いものを感じているのか、どことなくしみじみといった語感でＺＥＲＯは呟く。

その時ふと、渦巻く眼がギョロリと動いた。

マァ　ソレダケデハナイノハ分カッテイル

渦巻く眼が見た先には、巨体ではなく等身大の機影があった。

数は二体。

一体は丸い眼の単眼をした、フレームが剥き出しの身長２メートル程度のもの。

どこか古典的でレトロな姿が印象的だった。

もう一体は、幼い子供の姿をしていた。

マントを羽織った裸に近い上半身に長ズボンといった出で立ちは、両腕がフレキシブル構造をしていなければ人間としか思えなかった。

例によって曖昧な姿だが、魔神には姿の詳細が見えていた。

獰悪な口が、音を立てて歪む。
嗤っているらしい。
その様子に怯むことなく、二体は行動を開始した。
古典的な姿のものは魔神をかく乱する為か高速で飛翔し、少年姿のものは魔神に向けて右手を掲げた。
手の中央には、煌々とした光が宿り始めた。
全てを熱で葬り、弔うかのような光であった。

「や、お勤めご苦労」

背後から生じた声に少年は振り返った。
その腹に、黒い長シャツで覆われた腕が減り込んだ。
へそに相当する部分に肘鉄砲を放たれ、機械の少年は悶絶していた。
そこにいたのは長い黒シャツと青いジーンズを纏った、二十代半ばほどの赤い長髪の美女だった。
少年を右肘で撃ち抜いた女の左手には、既に単眼のロボットの首が握られていた。
首から下はなく、首の断面からは生き物のようにのたうつコードが下げられていた。

最後の抵抗か、リカバリーをしようとしているのか。
外見に違わず、オーバー・テクノロジーが施された存在のようだった。
少年は気絶し、もう一体も行動不能。

「はい、後はごゆっくり。深淵（アビス）と米軍に還るがいい」

女は両者を軽く投げた。
缶入りの飲料水を渡すかのような手付きだったが、離れた瞬間に二体は消滅した。
女が告げた場所へと還った、というか還らされたのだろう。

「それにしてもその場のノリで姿を変えたが、やはり良い。推しの姿はモチベが上がる」

人の言葉を語るが、宇宙空間で生身を晒して活動可能なものがまともである筈も無い。
女は瞬きすらせず、心音も放っていない。
その元へ、無数の光が殺到した。
光の中、女は硬質の笑顔で微笑んだ。機械が笑うとしたら、恐らくこうなるだろう。

そしてこう告げた。

「ルストハリケーン」

女の言葉に合わせ、宇宙を埋め尽くす光の大竜巻が生まれ出ていた。
それは迫る光とそれらの紡ぎ手達を飲み込み、際限なく拡散していく。
光は上下に開かれた魔神の口より放たれていた。
全長数十メートルの存在が放っているのは、一つの宇宙や世界に相当する巨大さをもった破壊の力だった。

「客観的に見ると理不尽な光景だな。流石は私」

魔神の貌の横に立ち、女はそう評した。
長い赤髪を頭頂のリボンで束ねた女は、魔神の意思の化身であった。
魔神としてのＺＥＲＯも、女の姿を取ったＺＥＲＯも完全な同一存在。
ＺＥＲＯは個であり全てである。
それは嘗て宇宙の全てに適用されていたが、今はＺＥＲＯという存在だけに施されて

いる。
真紅の女の姿で魔神は自らの破壊の光景を見る。
全てが破壊の大渦に包まれていたが、魔神にはその先も見透かせていた。
渦の奥で、光という光が集まり形を成していく様子が見えた。
その光の中央には、翼を広げた桃色の女神がいた。
女神もまた渦の先にいるＺＥＲＯの姿を見据えている。

「さてアニメや漫画で云えば、そろそろ主人公側の切り札に相当するものが来る頃か。
勿論主人公は貴女で、私が悪である」

硬質の笑みを浮かべながら女は語る。
馬鹿にしている訳では無く、こういう形を好んでいるようだ。
その時、真紅の瞳が何かを捉えた。
大渦の奥で、光が天に吸い込まれていく様だった。
そして彼方で蠢くものを見た。
女の口角が大きく吊り上がる。

「やるではないか！女神よ！」

女は、化身とは言えその姿を取ったＺＥＲＯは叫んでいた。

叫びに含まれるのは、掛け値なしの称賛。言い終えると、女の姿は光となって消えた。

そして宇宙を埋め尽くさんばかりの大渦を、巨大何かが貫いた。

それもまた、渦であった。

光で出来た、途方も無く巨大な円錐。ドリル。

激烈な回転が、ＺＥＲＯが放った大渦、ルストハリケーンを跡形も無く吹き飛ばしていた。

光の晴れた先には、巨大な、途轍もなく巨大な存在が聳えていた。

ドリルは巨大な腕へと続き、筋肉が隆起した逞しい人間の身体へと繋がっていた。

体表には常に光が渦巻き、身体全体を渦で構築しているかのようだった。

それは宇宙よりも遥かに巨大な、全長１５００億光年を超えるサイズの人間の姿だった。

そしてその出現に合わせ、宇宙自体が拡大していた。まるでこの超人が、宇宙の支配者と化したかのように。

逞しい身体の背後では、これもまた巨大な外套が炎のように靡いている。

立ち昇る噴火の如き揺らめきを持つ頭部に、刺々しい形のグラサンがトレードマークのように据え付けられていた。
魔神の知覚能力を以て、ＺＥＲＯはその存在を認識していた。
更にその背後でも、気配を察知した。
そこにもまた光があった。
だが聳える巨体とは異なり、くすんだ輝きの光、闇に近い光だった。
それもまた巨大な姿に変貌していく。
超巨大な人型と同サイズの、刺々しい造形の骨で出来た怨念じみた姿だった。
湾曲した二本の角は、鬼か悪魔を思わせる。
しかし禍々しい姿の周囲には、白く輝く無数の小さな影があった。
それは平和の象徴である、鳩の姿を思わせる光であった。
顕現した二つの超存在の中央に立つ魔神は、その光景を感慨深く眺めていた。

螺旋の戦士ト

反螺旋の守護者カ

超銀河マデナラ可能ダロウト予測シテイタガ

マサカ　その上ヲ呼び出ストハ

女神よ

其方は誇ッテイイぞ

光の文字で賛美を送る魔神。
そして二体の超存在達は、示し合わせたように腕を掲げた。
超人の姿をした者は右腕。鬼の姿をした者は左腕を。
超人は振り上げざま、背に羽織ったマントを掴んでいた。
それは力強く右向きに渦巻き、その姿さえも遥かに上回る超弩級に巨大な螺旋と化し

た。

魔神の計測では、その大きさは1兆と５０００億光年を超えていた。

対する鬼もまた、左腕を同サイズの、更に鋭利で禍々しいドリルへと変貌させていた。

対になる存在である事を示す為か、左向きの回転であった。

そして両者は高々と掲げたドリルを前へと突き出し、体を光そのものと変えて飛翔した。

轟々と回転する超弩級の巨大ドリルを前に、魔神はそれぞれの切っ先に向けて両腕を伸ばして漆黒の五指を開いた。

来イ

最早言葉は無意味、不要とばかりにＺＥＲＯはそう短く告げた。最初の時と寸分違わぬ言葉であった。

そして直後に、宇宙全体に激震が轟き眩い光が炸裂した。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか④

全長１兆５０００億光年。
天も次元も突破し、更なる進化を遂げた螺旋の戦士。
それを上回るべく、更に変異を成した反螺旋の守護者。
先の数字は、その二体が繰り出した超超超巨大なドリルであった。
右回転と左回転。異なる向きに回るドリルは、一つの存在を目指していた。
最終にして原初の魔神。
マジンガーＺＥＲＯと呼ばれる絶対者へと。
視界を埋め尽くすどころではないそれに応じ、魔神は五指を広げた両腕を伸ばした。

来イ

魔神はただそれだけを告げた。

直後か同時か、魔神の両手にドリルの切っ先が激突した。
宇宙全体が號と震えた。
ＺＥＲＯの掌と二種のドリルの切っ先の間で、眩い光の火花が上がる。
そして、物体が砕け散った。
それは、漆黒の刃であった。
ＺＥＲＯの伸ばした剛腕に付随する刃、アイアンカッターが砕けていた。
並ぶ両者の実力が拮抗している事を表すように、その破壊は同時だった。

その破壊は、刃の先端。僅かに歯が欠けた程度に留まっていた。

ヤルデハナイカ

魔神は二体の前に光を送った。
それは嘲りなどでは無く、心からの称賛だった。
そして魔神は両手を軽く曲げた。
指先が触れた瞬間、二つのドリルは完全に停止した。急制動による摩擦すら一切発生しなかった。
まるで最初から止まっていたかのようだった。
握るのではなく、ただ添えられているだけの手によって、それは為されていた。
そして動きを止められたドリルの切っ先は、溶かした飴の様に歪んでいた。
対するＺＥＲＯの掌は全くの無傷。理不尽に過ぎていた。
しかし理不尽さは更に続いた。
曲げられていた五指に力が入った。
薄氷を押したかのように、指先でドリルが爆ぜ割れた。
ドリルの罅は時の概念さえも無視して、二体の巨体の全身を覆った。
それでもなお倒れずに、戦士と守護者は残った腕をドリルに変えて魔神へと突き出した。
その全身を、真紅の光が叩いた。

ブレストファイヤー

二体の全長・直径さえも遥かに凌駕する熱線が放たれる。
全てを貪欲に飲み込み、真紅の光は何処までも伸びていく。
その光の大波濤がふっと消え失せた。まるで蝋燭の灯が絶えたかのように。
そしてその代わりに、果てしなく巨大な存在が顕現していた。
白と黒の装甲。禍々しい真紅の放熱板。背後に背負った異形の翼。
そして髑髏のような貌。
二体の螺旋の者どもを喰らった真紅の光は、そのサイズに等しい大きさのマジンガーＺＥＲＯへと変わっていた。
大きさの比較は最早無意味だった。

宇宙よりも何よりも、比類しうる存在が何も無く、全てはＺＥＲＯという存在だけの世界となっていた。

サテ

次ハドウ来る？

その中で魔神は問うた。
嘲りや恫喝でもなく、ただ尋ねとしての問いだった。
女神からは降参の意思は届いていない。
となれば何かをする気であると、魔神は確信していた。
よほど信頼があるらしい。
この存在が行ってきたことを鑑みれば、奇跡という言葉すら適用に値するかどうか。
それこそ、新しい言葉や概念が必要かもしれない。
そして今、それに値する一つの現象が起き始めた。

奇跡を超えた奇跡が。
並ぶもの無き絶対者と化したＺＥＲＯの眼が、一面に広がる光の中で何かを見た。
その瞬間、地獄の如き黒渦の眼は収斂し、黒点と化した。

!!!

この魔神が、これほどの驚愕をしたのは何時以来だろうか。
恐らくは過去に一度だけ。
閉ざされた世界、自らの内から放たれた可能性の光に、自身の繰り出す全ての技が無効であると見たときか。
そして今、魔神が認識したその姿は。
巨大な刃を付けた剛腕。分厚い装甲で覆われた全身。

それでいてしなやかさを帯びた造形。背中で広がるＺと無限、そしてゼロを意味する翼。
獰悪な顔付と、王冠のような頭部。
輝く光で出来ていたが、その姿は正に。

……マジンガーＺＥＲＯ……ツマリ……私……カ

他の誰でもない、本人がそれを認めていた。
文字から発露する感情は怒りなどではなく、湧き上がる歓喜。

ソシテ

見開かれた眼が映していたのは、それだけではなかった。
そして風防を展開した頭部に立つ、神々しくも可憐で美しいその姿は、正に女神の威容。
凛々しき表情には、恐怖も絶望も浮かんでいない。
ただ救済の女神であろうとする、凛とした表情が浮かんでいた。
そして女神は右手を掲げた。
それが合図であった。
ＺＥＲＯを取り囲み、光が顕れる。
その全ては、マジンガーＺＥＲＯと同じ形をしていた。
形ではなく、完全な同一存在だった。
ＺＥＲＯは個であり全てである。
魔法少女と対峙する、宇宙さえも軽々と上回る巨体となったＺＥＲＯと魔法少女の側に立つＺＥＲＯは同じ存在だった。
ただ立場が違うだけであると、ＺＥＲＯはそれらを見た瞬間に認識した。
両者の意識に差異は無く、全てが等しい存在であった。
異なるのは、頭部に頂いた少女達の姿のみ。

花嫁衣裳のような姿の者。黒い暗殺者を思わせる者。
聖女の如き鎧を纏った者。軽装で、カッターナイフのような刃を携えた者。
小柄な体躯に猫の耳を思わせる髪留めをした、白衣の者。
長いツインテールの、小悪魔風の衣装の者。
チアガールを思わせる青い衣装の者。
薄い金髪のサイドツインの髪型をした、魔法少女という見本ともなり得そうな者、そして魔法使いと称するにぴったりの姿をした、ローブ風の衣装を持った銀髪の者。
その他無数の、数えきれないほどの数の、煌びやかな衣装を纏った少女達がいた。
当然その下には、光で出来た最終にして原初の魔神の姿があった。
無限に等しい大きさのＺＥＲＯの周囲を埋め尽くすのに、時間はそう掛からなかった。
しかし無数のＺＥＲＯは、そして魔法少女は更に次々と増えていく。
女神が搭乗するＺＥＲＯの左手には、小さな欠片が置かれていた。
それは螺旋の戦士と守護者によって砕かれたＺＥＲＯの刃、アイアンカッターの破片。
破片は、出現するＺＥＲＯと同じ輝きを纏っていた。

ソウカ

ソレヲ元ニ

私ヲ呼び出シタカ

その言葉に応える様に、女神は細い腕と繊手を前へと伸ばした。
動きに合わせ、魔法少女達もまた動いた。
美しい手に持つ様々な武具が、巨大な魔神へと向けられる。
そして一斉に、それらは光を放った。
召喚した魔神の力を乗せた無窮無限の必殺技(マギア)が、マジンガーＺＥＲＯへと向けて放たれる。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか
４．５

ロンドン、パリ、ニューヨーク、そして東京。
それら全てが、英知をかけて作り上げられた文明が跡形も無く消え去っていた。
街は根こそぎ抉られ、酸で溶かされ、溶岩の様に蕩けていた。
街だけではなく、大陸は砕け海は深淵の底まで干上がっていた。
その破壊はなおも休みなく続き、母なる地球は滅亡の最中にあった。
それを為したのは、神。
鉄の装甲で全身を覆った、人が創りし機械神であった。
胸の放熱板が真紅の光を発し、また一つの大陸を横一文字に切り裂いた。
圧倒的な破壊力。そして無慈悲さ。
燃え盛る地球には、最早人類の姿は無かった。
その様子を、人造の神は無慈悲な視線で眺めていた。
満足しているとも、ただ虚無を感じているともとれる、正に機械の視線であった。
そこに向けて飛来する、破壊された大空を羽搏く紅の翼。

それを背負うは、これもまた人造の神。
雄々しく荘厳な姿をした、機械の神。
魔神。
対峙する二体の魔神。
ここに、共にZを冠した魔神達の最期のデスマッチが開かれようとしていた。

その動きが、不意に停止した。
終え盛る炎も、砕ける大地も、地表を蹂躙し尽くす大渦も。
魔神の一体も、拳を掲げたまま動きを止めていた。
人類に終焉を齎した魔神のみが、その異変を知覚していた。
その魔神の前に、輝く小さな影が映った。
それは桃色をした、幼い少女の幻影だった。

貴様ノアラユル死ニ様ヲ
予測シタゾ
マガイモノ

光の文字が浮かぶ。
紅蓮に燃え盛る火球となった地表の上で、二体の魔神が争っていた。
一体は皇帝の名を冠し、もう一体はＺＥＲＯという名を持っていた。
そして、勝負は決していた。
片方の魔神、皇帝が放った渾身の斬撃は、終焉の魔神を深々と切り裂いた。
しかし長大な刃は魔神の体内に吸収され、傷も完全に塞がっている。
そしてその剛腕は鋭い鋭角を有した皇帝の頭部を掴み、ベキベキと圧壊させていった。
皇帝を駆る勇者の、悲鳴に非ずの苦鳴が上がる。

無様ニ這イズレ

ノタウチ回レ

百ノ残骸スラ残サン

光の文字にて死を告げた魔神の胸部が真紅に輝く。
破滅に抗う勇者が叫ぶ。
最後の抵抗を踏み潰すように、真紅が全てを染め上げる。
その中で、紅とは別の光が煌いた。
それは真紅の中でも鮮やかな、輝くばかりの桃色をしていた。

ヘルカッター

輝く文字が浮かぶ。
青い空。
青い海。
青々とした木々を生え揃わせた大地。
地球に寄り添い、夜の輝きを与える月。
その全てが、文字の出現と共に切断された。
腕に漆黒の禍々しい刃を携えた魔神が、側転の様に回転しつつ放った手刀によって。
斬線は地球を軽々と一蹴し、海を底まで断ち割り大地を地殻ごと切り刻み、軸線上のあらゆる生命を殺戮した。
挙句に衝撃を宇宙まで届かせ、月までもを両断していた。
地獄の名を持つ者の意思を宿した魔神は、現世に顕現した地獄以外の何物でもなかっ

た。
地獄の魔神は、ただでさえ禍々しさに満ちた外見を、より邪悪なものへと変貌させた。
そして破壊が始まった。
世界を思うままに破壊し、好き勝手に新たな世界を創り出すために。
無数の命が無意味且つ無慈悲に奪われていく。
大地が唸り、山は悲鳴を上げ、海は天高く舞い上がる巨大な竜さながらの姿となった。
顕現した地獄の中、その光景にそぐわぬ一つの光が輝いた。
それは、少女の姿をした桃色の光。

「何をしようが変わらない」

黒いシャツに青いジーンズを履いた、黒髪の青年は語る。
凛々しい顔付の男らしい美青年であったが、その表情にはどこか人のぬくもりというものが欠けていた。
まるで、機械が人の真似事をしているかのようだった。

「世界はもう、確定したんだ」

断言する青年。その前には、拘束具で身を包んだ男の姿があった。
幾分か歳を経ていたが、その顔と姿は青年と同じであった。
男はその結末を否定し、叫んだ。
その表情が、凍りついたかのように停止した。
叫びの表情を浮かべた男の傍らに、彼よりもかなり小さな、背丈にして１５２センチ程度の少女の姿をした光がいた。
それを前に、青年は一切の表情の変化をしなかった。
まるで、来ることが分かっていたかのように。
そして彼は口を開いた。

それは複数の、そして無数の場所と時間で同時に発生していた。

これは、最強最悪の魔神の記憶と意識の中の出来事であった。
それらはすでに失われた、消え去った時間であったが厳然とした事実。
宇宙開闢の前に繰り広げられた、無限に続く地獄の連鎖。
魔神の意識の中には、あくまで記憶という形ではあるが全てが残っていた。
ＺＥＲＯは個であり世界である。
過去を追憶するＺＥＲＯは同時にあらゆる時間の記憶の中で存在し、別個であり個であった。
紛い物でもコピーでもなく、全てが同一ながら別に存在する。
人間の知覚機能と概念では理解しえぬ意識の集合体。集合体にして確固たる個体。
それがマジンガーＺＥＲＯである。
その一つ一つに、女神は意識を飛ばしていた。
波の一つ一つが無数の刃であるかのような激流、猛毒の大河、炎の坩堝。
形容できる地獄の全てを合わせて濃縮してもまだ足りぬ、異形の思考をした魔神の意

識。
一度入れば千々と乱れて消え失せる破壊の波濤に、女神は分身を放っていた。
そしてそれは奇跡を生んだ。
嘗て人としての最後の活動をした時と同じく、あらゆる時間と世界を繋いだように、記憶の中の魔神へと自分の意思を伝えた。
それは困難に屈した者の放つ哀願ではなく、共に戦おうという強い意思だった。
強がりではあったが、彼女にはそれを為すべき義務と、そして実行できる強さがあった。
そしてその意思に、魔神は応えた。

了解シタ

光の文字はそう告げる。

「了解した」

青年もまた言葉で告げる。

貴女ト共ニ

「貴女と共に」

悪ヲ討ツ

「悪を討つ」

全ての場所で、光が迸る。
走った光は、魔神の砕けた刃を媒介に実体を形成した。
そして女神がそこに、希望の戦士たちを導いた。

こうして誕生したのは、それぞれが全長６０メートルのマジンガーＺＥＲＯの大軍団。

宇宙さえも遥かに凌駕する巨体となった、これもまたマジンガーＺＥＲＯを十重二十重に取り囲む。
そこに搭乗するは、無数の魔法少女達。
名付けて『魔法少女軍団　ｉｎ　マジンガーＺＥＲＯ、ｓ（ゼロス）』。
そう意味深且つ得意気に呟いたのは、ＺＥＲＯの一体の中に搭乗した、銀髪の少女であった。
銀髪で覆われた左目は、赤々とした輝きを放っていた。
その言葉が契機となったかのように、無数の光が巨大なＺＥＲＯに向けて放たれた。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑤

大きさにして、１兆５０００億の１兆５０００億乗光年。
他は、ただそれを内包する空間のみといった、常識などとうに超えて理不尽さえも匙を投げたであろう超巨大となった機械の神。
嘗て無数のセカイを滅ぼし、そしてそれを遥かに上回る世界を開闢した最終にして原初の魔神。
巨大な意思の集合体。
マジンガーＺＥＲＯという名の、並ぶもの無き絶対的な神。
真紅の翼を背負い、漆黒に輝く巨体の周囲には光が満ちていた。
それは無数に、無限無窮の数で存在していた。
大きさにして、いや、大きさは既に無意味だろう。
仮に定義するとして、約６０メートル。
輝く光によって構築されたのは、最終にして原初の魔神。
同じ、全く同じ存在であった。
超巨大なマジンガーＺＥＲＯの周囲を、光で構成された身体を持つ無数のマジンガー

ＺＥＲＯが十重二十重に包囲していた。
無数の輝くＺＥＲＯの頭部には、例外なく煌びやかな衣装の少女達がいた。
座席に立つか、或いは席に座り操縦桿を握っている。
そして無数のＺＥＲＯの中で一際強く輝き、ＺＥＲＯを見る存在があった。
桃色の髪に純白の衣装。輝く瞳には強い意思。
円環の理の名を持つ女神。
嘗ての名は鹿目まどか。
今の名前はアルティメットまどか。
魔神の記憶の中に存在する無数の意思、個であり世界。
過去も現在の如く、記憶の中に存在するＺＥＲＯの意思に呼びかけ、彼女はこの奇跡を発現させていた。
全身にみなぎるのは、魔神の力。
嘗ての様に魔神は搭乗者を侵食しなかった。
ただ彼女らに、自身の力を与え操り方を伝えていた。
もう何も怖くない。
嘗てどこかの世界で生じた言葉を、女神は想った。
それは魔法少女達へと伝わり、次の行動を促した。

女神は細い腕と繊手を前へと伸ばした。

魔神の頭部に座す魔法少女達。
その美しい手に持つ様々な武具が、巨大な魔神へと向けられる。
そして一斉に、それらは光を放った。
召喚した魔神の力を乗せた無窮無限の必殺技(マギア)が、マジンガーＺＥＲＯへと向けて放たれる。

素晴ラシイ

魔法少女達の願いと魂の色が、それぞれが背負った色が放たれる。
一つとして同じ色の無い眩い光を浴びながら、ＺＥＲＯは光の文字で呟いた。

獰悪な顔はそのままだが、どこか微笑んでいるように見えた。
嘗て自分を打ち破ったその光景の、同種にして別物の光景に満足しているかのように。
その姿を、着弾した無数の光が塗り潰した。
サイズ差など無いかのように、一筋の光の炸裂は広大且つ巨大であった。
光は形状を伴っているものもあった。
闇色の拷問具の刃がＺＥＲＯの体表を掠め、青い光が変じた赤黒い無数の斧がＺＥＲＯを刻む。
輝く光球。信託者の宝球が巨体を殴打し、白銀の輝きを放つ。
その光を縫うように、連結された無数の斧。吸血鬼の牙が黒鉄の装甲の上を駆け巡る。
その他無数。
薬品が入れられたビーカー、魔法少女が手に持った可愛らしいコンパクトから発せられる赤の光、重ねられた扇から発せられる炎の乱舞。
海神のそれを思わせる槍の投擲、杖から発せられる緑光がＺＥＲＯを絡めとり光の炸裂を見舞う。
そこに流星の如き速度で垂直落下していく巨体。ＺＥＲＯの頭部に立つ少女の手に

は湾曲した大剣。
無限に等しい距離である魔神の体表を一薙ぎし、炎の斬撃を見舞う。
炎を覆い隠すように、白い雷撃が放たれた。それは、九つの緑色の箱から生じていた。
それを放った者の嬌声が、破壊の最中に鳴り響いた。

そして炸裂するのは魔法少女の光だけではなかった。
数え切れぬ数の、飛翔する鉄拳。ロケットパンチ、またはアイアンカッター。
無数に重ねられた大渦、ルストハリケーン。
鋭い両眼から放たれる熱線と光弾、光子力ビーム。
胸の装甲板から放たれるブレストファイヤー。

それらも無数に放たれていた。
光の中、それらを受けるＺＥＲＯは身を大きく仰け反らせていた。
その姿に異変が生じていた。
極僅かな、腕の刃の先端の欠落だけで全てを受け切っていたＺＥＲＯの体表の装甲が、僅かに剥離しているのが見えた。
勝機。

その瞬間、魔法少女を頂く全てのＺＥＲＯが輝いた。

魔神パワー

高次予測

発動

あらゆる可能性を見出し、勝利への活路を開く超超超級の状況シュミレーション。
それは未来を予知する事と同義。
その力に、白銀の魔法少女は己の力を乗せた。
開いていた眼が開かれ、深緑の瞳がきらめく。
そして彼女はそのビジョンを女神へ托した。
嘗てどこかの世界で、自分が殺さざるを得なかった相手へと、そして自分を殺した相手から。
託された力に、女神は力強く頷いた。怨恨など既にそこには無い。ただ今があるだけだ。

その光景を女神は伝える。無数の魔法少女と無数のＺＥＲＯへと。
それに魔法少女達は魔力の解放で以て、魔神は更なる力の発動で応えた。

因果律兵器

発動

垣間見た勝利の光景。
巨大なマジンガーＺＥＲＯが砕け崩壊するビジョンを、因果の力が紡ぐ。
それを為す力が女神に与えられ、そして全ての魔法少女達も女神に全ての力を託した。
未来（勝利）に向け、女神は弓矢を放った。
飛翔する桃色の輝きが、魔神の前面に展開された広大な魔法陣へと激突する。
魔神さえも覆い尽くす光が生じ、全てが光に包まれる。
そしてそれは、果てしなく続いた。
その果てに、美しい白い手が見えた。
女神が広げた両手の間には、桃色の光球があった。

その中は光で満ちていた。光の中央には、浄化の光に曝されるＺＥＲＯの姿があった。
光はＺＥＲＯの装甲さえ破壊し、全身を傷で覆わせていた。
女神の、そして無数の魔法少女とＺＥＲＯの前からは巨大なＺＥＲＯの姿が消えていた。
少女と魔神達が巨大化したわけではない。ただ、奇跡が起きたのだった。
奇跡も魔法もある。女神の持つ光球の中に閉ざされた魔神の姿、つまりは魔法少女達の勝利がそれを顕していた。
女神が手に持つ光の中に閉ざされた、身を砕かれて無力化されたＺＥＲＯ。
予知魔法と高次予測、そして因果律兵器を用いて現出させた勝利。
ここに、勝敗は決したのだった。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか

気ガ早イぞ
女神よ　ソシテ魔法少女達よ

光の文字が浮かぶ。
光を手に持つ女神の前で。
女神は光球の中を見た。
破壊されてゆくＺＥＲＯがいた。
装甲が割れ、腕は砕けて無惨な姿に……いや、違う。
女神はそう判断した。
割れてはいるが、質量が変化していない。
女神は理解した。この変貌は、魔神自らが行っていると。
そして女神は、魔神の割れた装甲の内へ。女神と魔法少女の、そしてＺＥＲＯが放った破壊の力が吸い込まれていくのを見た。
異常な事態に、魔法少女も女神も、そして魔神すらも動けない。

これは完全に予測の外、自分たちが勝利した後の光景であった。
まるで完結した物語が、勝手に動き出したかのようだった。

魔神パワー

吸収

その現象を、魔神は自らそう伝えた。
瞬間、光は弾けた。
光は弾けて何処までも拡散した。
そして山から流れる水の流れが河となりやがて大海へと変わる様に、複数の光は流れ流れて交わると、一つへと変わった。
眩い光は、一気に形を濃縮させて凝固した。
この場の全ての力を集約させ、形を成していく。
細い腕が見えた。

美しいドレスが見えた。そこから伸びた脚も見えた。
そして可憐な顔と、無限に伸びた美麗な髪を。
形成された姿を前に、全ての魔法少女は息を呑んだ。
この姿は、見覚えにあり過ぎていた。
特に、女神に至っては絶句していた。
それは魔法少女にとっての究極の姿。
女神。
白と桃色を基調とし、煌びやかな衣装を纏った姿は、正に女神…だが。
詳細が少し、少しだけだが異なっていた。
しかしそれは、決定的な違いであった。
顕現したその女神は、美しいが、全体的にデフォルメが施された姿をしていた。

「この手に」

それは声を放った。
それは確かに女神の声…だった。
但し、魅惑的なだみ声だった。

「希望を挟み取る」

言葉と共に、それは手を掲げた。
繊手の先で光が生じ、それは黒い鋏となった。
切断のための鋏ではなく、デフォルメされた蟹の鋏だった。
異常すぎる光景、そして予測を超えた事象に誰もが動けない。
だが、誰もがその正体を感じていた。
魔法少女の力を受け、それを吸収して変異したものが、この姿を取っているのだと。

「いやぁ…ぜろぜろ様はルール無用すぎるっしょー」

無数の魔法少女の中の一人、小悪魔風の衣装をした金髪少女は呆れつつも笑いながらそう呟いた。忌憚のない意見だった。
そして正体を示すように、いや、そもそも隠してすらいないのだろう。
その存在の背には、巨大な真紅の翼があった。Zと無限、最終と原初を意味する魔神の翼。

71　真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑤

!!!

一度聴いたら因果の果てでも忘れ無さそうな、魅惑的なだみ声が無音の筈の宇宙空間に木霊する。

前を向いた蟹の鋏の中には、煌々とした輝きが秘められていた。

それはこれまでに受けた、如何なる攻撃よりも苛烈な破壊の光。

「あっつ、ってあっつ、あっづー!!」というだみ声の叫びと共に放たれた真紅の破壊光は全方位へと拡散し、無数の魔法少女とＺＥＲＯを包む。

その最中で、女神は弓矢を放った。

二体の女神が放った二種の破壊の激突は、更なる炸裂を生んだ。

そして全てが、その中へと飲み込まれていく。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　アルティメットまどか⑥

青い空が広がっていた。
空の下には日に照らされる街並みがあり、遠くには山々の連なりが見えた。
逆に近くでは木製の垣根が見え、その手前には土で覆われた庭があった。
庭の一部には家庭菜園が設けられ、プチトマトやキュウリが植えられ、青々とした輝きを放ちつつ収穫の時を待っている。
その手前には木製の縁側が連なっていた。
一杯のお茶と茶菓子が良く似合いそうな、程よくくたびれた縁側だった。
そもそもここ自体、一戸建ての平屋自体も長年の経年劣化を示す痕跡がいくつもあった。
天井に至っては、穴が開いているのか屋根の上に古箪笥が置かれている。
しかしながら住人は上手く付き合っているのか、こまめに手入れが入れられている様子も見受けられた。
縁側の上に埃や汚れはなく、柱にも漆が塗られている。
屋根上の古箪笥は何かの間違いか、冗談だろう。

公園の一角を思わせる庭の隅に、異様な物体が目立たないように置かれていた。
真っ赤な色の、直径にして3メートルに達する巨大な輪。
縁は刃のようにエッジが利き、上部と下部の二か所には槍穂のように尖った部分があった。
それは、異形ではあるが翼であった。
Zと0、そして無限を意味する、魔神の翼だった。

「お疲れ様っ。じゃあ、今回の模擬戦。題して『もしも私が闇落ちしたら円環の理はどうするか』、の感想戦と行こうか♪」

六畳一間の和室の中。
ピンク色の長い長い髪を伸ばし、白いドレスに身を包んだ少女はそう言った。
弾んだような口調、そして魅惑のだみ声。
彼女が座しているのは年季の入ったちゃぶ台。
背後に行くに連れて長く伸びていく前に寄せ、スカートを掛け布団の要領で膝の上に掛けている。
行儀が悪そうだが座り方は正座である。

その正面にも少女がいた。同じ服装、且つ同じ姿であるが遥かに威厳が、というよりも現実感があった。
幻想的な美しさを持つ存在、女神であるが、その正面に座るそれは美しいが戯画のような姿をしていた。
確たる存在として実態を持っているのだが、どこか平面的にも見える。
それは女神たる彼女をして、理解を超えた存在だった。
しかしそれを、女神はさして不思議とは思わなかった。
この存在と遭遇してそれなりの時間が経っているが、不思議さの度合いに限度が無いので慣れたのである。
奇跡と魔法もある世界なのだから、不思議な事もあると納得している。
懐が深く大きすぎる女神であった。
ちゃぶ台に座す二人の女神の前に、湯気を立てる丼が静かに置かれた。どんぶりが置かれた皿は、黒い手袋で覆われた繊手によって置かれていた。
屈められていた身が伸ばされる。
身長１７０センチほどの、ボディペイントもかくやといった姿の美女がそこにいた。
肉の質感を十分に出しながら、硬質な趣きも感じられた。
美しい銀髪の中央、顔には黒い布が掛けられていた。

それは舞台の黒子か、喪に服している貴婦人を思わせた。
表情は一切伺えないが、黒布の向こう側にあるであろう眼は、女神の一体を睨んでいるようだった。
睨まれているのは、デフォルメがかった方の女神であった。
そして、その者の名は。

「ミネルバX。いつもながら多忙なところ、感謝する」

そうだみ声で言って、女神は深々と頭を垂れた。
それと同じく、もう一人の女神も頭を下げる。その様子に彼女は、ミネルバと呼ばれた者は困惑したようだった。
相手は高次元存在である女神であるから、という気負いがあるのだろう。

「いつもありがとうっ☆」

その雰囲気を過る様に、だみ声が掠める。
その瞬間に緊張感が消え失せ、ミネルバはもう一人の女神に軽く頷き、もう一人の女

神を睨んだ。
余程この存在を嫌っているのと、この現状に呆れているようだった。
そして彼女はスタスタと和室を横断して庭に降り、隅まで歩いていった。
壁に立て掛けられている翼を二度三度と蹴る。

「ああっ！私の本体っ」

そう叫んだ女神を黒布の奥できっと睨み、そのまま何処かへと消えていった。

「酷い扱いだな。まぁ仕方ないけど」

本人としては至って真面目なのだろうが、声と外見のせいで全ての行動がふざけて見えるのであった。
それでもこの外見を続けているのは、気に入っているからだろう。

「まぁしゃあないね。じゃ、感想戦」

思考を切り替え話を戻す。
思い切りが良いのか身勝手なのか。

「結論から言えば、私の負けだ」

どんぶりから立ち昇る湯気の奥、それを受けて困惑顔となった女神の顔があった。

「何故なら無数の私は私の攻撃で滅び去っている。故に私の負けなのだ」

女神は更に困惑した。
しかし福笑いにでも使えそうな、眼も口も大きな顔は至って真面目な様子で告げている。
だが当然のように、女神としては納得がいかなかった。
自分たちの攻撃は一切のダメージを与えられれず、顕現させた鋼の勇者たちの猛攻でも刃の先端を掛けさせるに留めていた。
実力差が想像も出来ず、ゲーム的な数値化すら出来そうにない。
かなり強引に例えるとすれば、自分たちの総戦力をナイアガラの滝の大瀑布とすれ

ば、あちらは宇宙開闢のビッグバンとでもなるだろうか。
自然現象に例えたらそうなるのかなと女神は想った。
「私の頭の中で眠る貴女が見た仮想現実とはいえ、あれらは全て本物で厳然たる事実。
ならば無数の私は負けるべきじゃなかった」
デフォルメされた女神の姿の化身にて、魔神は悔しさを吐露していた。
勝利しておきながら一方で悔しがる。
理解しがたい思考である。
しかしやはり、納得がいかない。
少し怒ったような表情となる女神。
こちらもまた自分の力の至らなさについて何かを思っているのだろう。
「別に気に病むことないよ」
自分の事を棚に上げ、化身の姿で魔神は言う。
口調は外見に左右されるが、意思は元と変わらない。

「何よりこの姿と力は貴女や魔法少女の力から生まれたものだ。そのお陰で私はそれまでの私を超えられた。だから貴方方は負けたんじゃない」

可愛くもふざけた外見ながら、化身は更に真面目な表情となった。

「勝ったんだ」

魔神は言い切った。

それは嘗て自分が受けた言葉でもあった。

「これを言うのは二度目だね☆」

更に続ける。

少し遅れ、女神が二度三度と頷いた。

吹っ切れたのか、相手の不可思議さに可笑しくなったのか、表情には少女らしい綻びが見えた。

「まぁ今は、アルティメットラーメンが伸びる前に…食べようか」

妙に厳かな口調で究極を冠する女神の化身は言う。
スープの色からして化身は味噌味、本当の女神はしょうゆ味であるらしい。
両手を合わせ、「いただきます」と言ってから両者は麺を啜り始めた。

共に勝者であり敗者、敗者であり勝者の結末。
此処に至り、漸く決着は着いた。
どちらが勝者であるかは当事者よりも、この戦闘を見ていた者の方が判断しやすそうであった。
後日、今回の模擬戦が円環の理内でやんわりとした論争を起こし、平和な日常に幾らかの刺激を加えたのはまた別の話である。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの

アタシは都ひなの。
南凪自由学園３年生。
花も恥じらう１８歳のうら若き乙女…だった。
いや、そうなんだけど、そうじゃないっていうか…まぁいいか。
理系らしく率直に言えば、アタシはもう死んでる。
いや、導かれたって感じか。
そして今はこの世の因果から外れた場所、『円環の理』にいる。
何があってここに来る羽目になったとかは今はいい。よくはねぇけどな。
魔法少女としての戦いも終わって、友達とか家族とはもう会えないけど、この楽園で別の世界の自分を眺めたり気ままに生活したりしてる。
魔法少女の天国にいるってカンジかな。
理系のアタシが天国を認めるなんて非科学的な、ってのはよく生意気な後輩に言われる。
ああ、あいつもいるんだよな…これも複雑な気分だけど、独りぼっちじゃないっての

は心強い。
まぁなんだかんだで、ここの世界はストレスとは無縁だ。
といっても退屈するわけでもない。
色々と好きなことが出来るし試せる。
なるほどな、大した理想郷だ。
この世界を創ったのは魔法少女の宿命を嘆いた女神様で、時々やってきては魔法少女の様子を見たり一緒に遊んだりしてる。
なんだかんだで、女神さまも子供って感じらしい。
全ては良かった。
順風満帆で時の概念も無いから自分が老けたとか、永劫の時に圧し潰されそうになって虚無感に浸るとかも無い。
ただ。
ただ一つだけ、気にかかる事がある。

円環の女神様が行った『模擬戦』。気分的には二日前くらいだけど、この世界は時の概念がほんっとに曖昧だからな…実質無意味か。
模擬戦はこれまでも何度か行われたけど、アタシが参加したのは初めてだ。

実体じゃなくてアバター的な感じだったけどな。
痛みも苦痛も無い、それでいて恐怖感もそんなにない。
ああ、そうだ。
それが問題なんだ。
あれを危険と思わない、というか安心感さえある。
これが洗脳じゃないってのは、間違いない。
この考えはアタシのもので、アタシの心と魂がそう認識してる。
だからこそ、アタシは自分の心で以て、あの存在について考えている。

マジンガーＺＥＲＯ。

白と黒の装甲、超合金Ｚって名前の未知の金属で身を固めたロボット、というか本人が言うにはスーパーロボットか。
王冠みたいな兜に騎士の面みたいな口元、それが牙みたいに開いて生き物みたいな形

にもなる。
神が慄き、悪魔が泣いて命乞いをしそうな怖すぎる見た目の機械の神。
ああ、神様なんだよな。
正確には『魔神』か。マジンガーってのはそこから来てるんだろう。ガーってのは何だか分からないけど。
時の概念が無いというか曖昧とはいえ、そいつはアタシがここに来た後にこの世界に姿を顕した。
その間のコトは全く覚えてない。
記録としては残ってて閲覧可能らしいけど、今は見る気が起きねぇな。
でもとにかくヤバい事が起きて、色々とヤバくなって、その果てにアレが来たらしい。
そしてその後もここにいる。
ああ…あん時は色々あったな。
まぁそれは今度だ。
で、今に話を戻すか。
この前やった模擬戦。アタシはそれを記録映像で繰り返し確認した。
その結果、あの存在に関しては何も分からない事が分かった。
なんだよアレ。

あらゆる法則を無視してるじゃねぇか。
ロボットなんだろ？科学の力で生み出されたんだろ？
なのに何でその自分自身が科学の法則に当て嵌まらないんだ？
そもそもエネルギーが無尽蔵で使用に制約が無し、そして全身を構築する超合金Ｚは破壊不能？
なんだよそれ。
それが標準装備？
アタシの理解、どころか誰も理解できねぇよあんなの。
聞いた話だと、自己進化を繰り返していってああなった…のもあるけど無限のエネルギーと破壊不能の特性は元からしい。
元はマジンガーＺって言うらしいな。
顔写真を見せて貰ったけど、仏様みたいに優しそうな感じだったな。
外見は似てるけど、まるで仏と修羅だぞ。別物だ。
まるでアタシら魔法少女と魔女みたいな。
また少し脱線したな。
それでもって、装備した兵器の破壊力は……いや、あれは破壊のレベルなのか？
あれを表現するには新しい言葉とか概念が必要なんじゃねえのか。

魔神。
魔神か。
そうだよな、神なんだよな。
なんでもアリか。
アタシはそこに、危機感を覚えてる。
今、あの存在は円環の理の側の存在として立っている。
味方も味方で、守護神とさえ言っていい。
この宇宙の外には得体の知れない連中がウジャウジャいて、そいつらからこの世界を守ってる。
そういえば本人もそんな世界から来たらしいな。
つまりは同類か。
そうだ、同類だ。
だから、もしも、もしも敵に回ったらと思うとゾッとする。
あれは円環の理の総戦力、そして女神様に召集された無数の自分自身さえも撃破した。
本人曰く、自分の負けだってコトらしいが、アタシはこちらの負けだと思ってる。
その勝ち方についてのコメントは控える。

あの姿に関してはまだ心の整理がつかねぇ。
いや、整理しちゃというか納得しちゃダメなような……。
と　に　か　く　だ！
あの結果を鑑みて、アタシは決めたんだ。
アタシは創る。
あの存在を、マジンガーＺＥＲＯを超えたスーパーロボットを建造する！
そして、来てほしくないけどもしもの時に備える！
外の世界の敵からこの愛しい世界、円環の理を守る力を創り出す！
それがアタシ、元南凪自由学園化学部部長、都ひなのの使命だ!!
そして今日も、時の概念とか無いけど今日もその製作に勤しむ。
となれば、助手を呼び出すとするか。
色々と思う事はあるが、優秀な助手を。
いや、ちと優秀すぎるし色々とモヤっとするけど、アタシの力には限界がある。
だから、どうしても必要なんだ。
少しの間葛藤してから、あたしは息を吸い込んだ。
言い忘れてたけど、アタシの目の前にはデカいプールがある。
そしてその近くには工房を兼ねたアタシのラボがある。

絵で簡略化した山みたいな、二つの突起を頂点にしてなだらかな弓を描いてる八の字型の姿って感じか。
その奥に聳える大山脈、富士山そっくりな形だ。真っ白な色も雪みたいだしな。
ああそうそう、円環の理の中には色々なものがある。
あの山みたいにな。全く凄い世界だよ、守りがいがありまくりだ。
そしてアタシは叫んだ。
ちょっと恥ずかしい気もするけど、そこはアレだ。
魔法少女らしく技名を叫ぶみたいに声高々に叫んださ。

「マジーーーーーーーーーーーーン!!ゴーーーーーーーーーッ!!!!!!!!」

プールの水が二つに割れて、二つの滝みたく下っていくその中から、見上げるほどの巨体がせり上がってくる。
超合金で身を固めた、筋肉質って感じの逞しい胴体。
デカすぎる刃が二枚も付いた太い腕、さっきも言った恐ろしい顔。
その背中には、数字のゼロと無限とＺを示すデカくて赤い翼を背負ってる。

奇しくも円環って感じがする形だな。
いや、そもそも誕生経緯からして別の意味での円環なんだっけかな。
全長６０メートル。
どこに入ってたんだって感じのデカすぎる翼を含めればその倍の１２０メートルくらいはありそうだ。
見上げてるアタシの前に、光で出来た文字が浮かぶ。

都ひなの
私ガ出来ルコトナドタカガ知レテイルガ
可能な限リ協力ショウ

アタシのアシスタントなのか、それともアタシの師匠なのか。
多分どっちでもあるんだろうな。

円環の理にいるもう一体の神、マジンガーＺＥＲＯにアタシは感謝を示す頷きを返した。

…すっげぇ複雑な気分で、罪悪感も湧いてくる。

にしてもこの人……っていうか魔神か。

自分を倒す存在を作ろうってヤツに、なんでこんなに協力的なんだ？

神様の考えってのは分からんね。ホントに。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの②

『円環大投票』。
後にそう呼ばれるようになったイベント…でいいのかな…があった。
投票内容は……機械神、マジンガーＺＥＲＯの処遇についてだ。
投票する項目は二つ。
円環の理に迎え入れるか、完全破壊・ないしは永久封印。
円環の理に訪れたっていう『異変』の後に開催された。
今でも覚えてるな。
円環の理の中は恐怖とは無縁だってのに、自然と手が震えちまった。
無理もねぇだろう。
神も仏も信じて無かったアタシでさえ（女神様は別だ）、あの存在は神だって事が否応なしに分かっちまう外見と存在感を出してやがるんだから。
それでだ。
あの行事について補足がある。
マジンガーＺＥＲＯ…長いな、ＺＥＲＯでいこう。本人もそれでいいって言ってる

し、衣美里に至っては「ぜろぜろ様」とか呼んでやがる。
あいつの胆力はやべぇな。流石に許可されると思ってなかったみたいで、最初に使った時は変な空気が漂ったんだが。
結果は快諾。そっちも予想外だっての。
ああ、それで補足だったな。
投票の前、アタシらはずらっと並んで椅子に座った。
パイプ椅子だったり革張りの良い感じのだったり、生きてた頃の勉強椅子だったりと様々だ。
思い思いの順番や場所に座って、ポップコーンとコーラ片手に鑑賞会をやった。
…ああ、そうだよ。
気付いたらそうなってたんだ。
その場のテンションっていうのかな。娯楽に飢えてたんだろうな。
でもあの時はもう少し考えとくべきだった気がする。
円環の女神様が全長６０メートルの機械神に乗ってるのとか、座席の端っこに黒シャツとジーパンを穿いた１６～７くらいのイケメンな男子がいた事とかな。
それと顔を黒い布で隠した、超絶ナイスバディでセクシーなボディスーツっぽいのを着たチャンネーが映写機を回し出したり、その合間にポップコーン作って配膳してたり

とか。

黒い布で見えなかったけど、この人がイケメンに向けた憎悪の眼差しったら無かったな。

それを受ける男…まぁ、ＺＥＲＯの化身、アバターは準備とかに感謝してるのか軽く頷いてた。見てるこっちが怖かったな。

あの外見のモチーフは『兜甲児』っていうらしい。それを知ったのも直後だった。

テレッテー
テレッテー
テテッテッテッテテレテレテテッテー

って感じの軽妙な音楽の後に、

『真マジンガーＺＥＲＯ』

と、デカいタイトルが画面いっぱいに広がった。

今でも鮮明に思い出すなぁ。

なんていうか、あの時は生きてた時のことを思い出してた気がする。
化学の実演実験で目を輝かせてた時みたいなな。
期待してたんだろうなぁ。こういうのは久々だし。

アタシは理系だ。
だから結論から言う。

あれは、地獄だった。
アタシらの今いる円環の理。
これもとある魔法少女が苛酷な時間遡行の末に誕生のきっかけを作ったらしい。
辛いよな、何度も何度も人が死んで世界が滅ぶのは。
そうだよな。

それが数千回も繰り返されるなんてな。

思い返しただけで頭が重くなる。
自分があの世界の登場人物だったなら、って思っちまう。
キッツい表現多かったな…確か年少者とか希望者には修正とか描写のカットが入ったらしい。
妙に凝ってやがるな。
まぁ、詳細はハブく。
最近愛蔵版が発売してるらしいし、電子書籍版もあるからそっちで確認しとくれ。
でもまぁ…悲劇に次ぐ悲劇と破滅に次ぐ破滅の果てに、漸く世界は救われた。
巨大…ってレベルを超えた超巨大で超強力な敵と、それを操る超絶ド外道を粉砕したマジンガーZと主人公の兜甲児が雲の切れ間から光と共に舞い降りて大勢の仲間に迎えられた時は……ああ、泣いちまったよ、アタシ。

『真マジンガーZERO　vs　暗黒大将軍』

ここからが本当の地獄だった。
平和になった世界が…生き残った人々が……いや、言葉にならない。
そして、遂に顕現した……マジンガーＺＥＲＯ。
これが…こいつがやらかした事は……。
必死の賭けの果てに誕生した超性能のロボットすら、因果を紡いで破壊しやがった。
因果を紡ぐ。
なんだこれ。
ほんとなんなんだ、こいつ……。

で、そんな破壊行為すら、おまけ程度に思えてしまうコトをやらかしやがった。
いや……あのさ……なんて言えばいいんだ、これ。
理解を超えてやがる。
今までのアレやそれが、全部仕組まれてた？
それすらも無意味になった？
時間や空間、全並行世界を手中に収めたから先も後も関係ない…と。

あー……マジでワケ分からねぇ。
ロボットって何だよ……。

それで、ロボットといえばだな。
閉塞した世界を打ち破った切っ掛けは……。

うん、分かった。
決めた。って感じでアタシは投票した。

結果は明らかだったな。
大多数が完全破壊・永久封印に投票した。
受け入れを支持した奴は、少なくはなかったけど多くはなかった。
大体がフランスやイタリアの連中だった気がする。
サヴァ…とか言ってる王妃様やその娘らはなんとなく分かるけど、聖女様も支持側に回ってたのは驚いたな。

それでだ。
投票権は、あたしらだけに与えられたものじゃなかった。
女神様は決定権しか持ってない。
足音が響いた。地面が揺れた。
そんな気がした。
全長６０メートル、背中の翼を入れれば１００メートルを超える巨体が歩けばそうなるだろうさ。
そいつは…話の渦中にいるマジンガーＺＥＲＯは器用に体を屈めて、ゴツくてデカすぎる手で器用に小さな投票用紙に○を書いて投票箱に入れた。
さっきまで残虐非道の限りを尽くしてた悪の中の悪、邪悪オブ邪悪のやる事かよって、多分みんなが思ってただろうさ。
紙が投票箱に入れられた。
さっきまであの地獄絵図を映してた画面に表示された投票結果が、紙を入れた瞬間にピコンと動いた。
票が増えた。
完全破壊・永久封印の方に。

え……あの……あのさぁ。

困惑してるアタシらの前に、光の文字が浮かんだ。

客観的ニ見テミルト

私ハ結構邪悪ダナ

結構どころじゃないんだ。

投票ニ従オウ

抗議を言うでもなく、異界の神様はそう言った。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの③

『魔神パワー』。
マジンガーＺＥＲＯ、いや、その前身に当るマジンガーＺにも搭載された七つの機能。
こいつについてちょっと考えてみようと思う。
第一。
『自己再生』
まぁ、文字通りって感じだよな。
記録映像も同然のアニメ映画（むしろマジンガーＺＥＲＯって存在の自伝に近いか？）ではズダボロの状態から一瞬で再生してたな。
そのあたりはアタシらもそんな感じだったから、ちょっと親近感が湧いたな。
…でもよ。元々が破壊不能の存在にそんな機能ってこの時点で無敵じゃね？
チートだろチート。
それでも追い詰められてたどころか気休めな感じだったってんだから、あの超超超デカい機械獣、「ゴードンヘル」ってヤツぁ化け物だったな…。
それでだ。

第二。
『吸収』
敵の、というかあらゆるエネルギーを取り込む……ヤバいな。
これが二つ目ってのが、つまりは弱い方ってのがホントヤバい。
弱いってのはまた別解釈だろうけど、これだけで早くもお腹一杯だ。
吸収って、魔女でもたまーにいたけどさ…洒落にならねぇぞ。
まぁそういうのは、吸収の上限が合ってそれ以上を喰らうと自滅するってのがセオリーだよな。
普通なら。

第三。
『強化』
文字通りだな。
魔神『パワー』ってんならこれがシンプルで一番分かりやすいや。
それでだ、上の吸収にこれを合わせりゃ機体の機能が向上するから吸収可能なエネルギーの上限も増えるって寸法だ。

…あのよ、これがまだあと四つもあるんだよな。
まだ折り返し地点の手前なんだよな？

第四。
『高次予測』
搭載された戦略シュミレーターを極限まで発達させて未来を予測する。
その精度は未来予知に匹敵……ってオイオイ……。
未来予知と来たよ。
もうなんでもアリだな。
未来予知ってぇと、魔法少女でも滅多にいねぇぞ？
しかも限定的だったり莫大なエネルギーを喰ったり無用に乱発したり…。
美国のお嬢さん曰くまともに使えた事はあまりなくて、かなり使い勝手が悪いってんだが…それでも強力なんだけどよ。
それを本人が無限のエネルギーを持つからって事で使い放題…というかエネルギー消費の概念があるのか？このロボ。
しかも見えるのは未来だけじゃなくて…ああ、もう次だ！次!!

第五。

『変態』

いや、別に変な意味じゃねえぞ。

よくアニメとかでキャラクターの外見が変貌したりするだろ？

あれは厳密には変態だ。蝶を例にすればいい。

芋虫から蛹を経て蝶に到るのは完全に形が変わる完全変態だ。

ZやZEROの場合も外見を変化させたり武装を追加したりする。

Zの場合はアイアンカッターに強力ロケットパンチ、サザンクロスナイフにドリルミサイルの追加だったな。

真っ当に思えるけど、一度造られた存在が自分で姿を変貌させるとかやべぇなほんと……。

変な意味に捉えられてもアレだからな。

ここは真面目にいくさ。

……でもなぁ。

この間の模擬戦でやったアレは……いや、言うまい。

第六

『因果律兵器』

来たよ。

大問題なのが。

えーっと……高次予測の範囲を並行世界観測まで広げて、予測した未来を今自分のいる世界に顕現させる……だっけか。

兵器って、なんなんだろな。

やべぇ、思わず気絶しそうになった。

あぁうん。

ロボットって言うか、なんか滅茶苦茶すぎてアタシらに近いよな。

魔法使いって感じか。

そして最後。

第七

『魔神化』

無限に自己進化を続ける『終焉の魔神』に変貌する力……つまり、ＺがＺＥＲＯになるって事だな。

さっきアタシらに近いって言ったけど、本当にそうなのかもな。

Ｚがアタシらで例えれば魔法少女でＺＥＲＯが魔女って言うかさ。

でもな…その変貌ぶりは異常すぎる。

Ｚの時点でも世界中の軍隊が束になっても敵わない（しかもかなり弱いレベルの完成度の時点で、だ）ってのに、ＺＥＲＯになっちまったら全能力が桁違いどころか別次元レベルにまで上がりやがる。

ここでもアタシらを例えに出すと、魔法少女から魔女どころか一気に女神様にまで至る感じか。

映画だとルストハリケーン…口から発射する強酸の大嵐…のハズだけど富士山を根元から巻き上げて空高くまで舞い上がらせて、地球全土に天変地異を引き起こしてた。

峩々たる山々を砂山を崩すみたいに破壊して、海上に無数の竜巻を発生させて海底を露出させたりとなんかおかしい。

この現象で似てるのは正位置になったワルプルギスの夜の全力疾走だろうが…ＺＥＲＯの場合はせいぜい吐息か溜息程度だ。

別の世界って言っても物理法則は変わらねぇし、そもそもあっちも地球だってのに理

不尽過ぎて理解に苦しむぞ。
いや、おかしいのはＺＥＲＯだけなのは分かるんだけどさ…。

ああ、頭痛くなってきたな。

それでだ。
なんでコレを話したかって言うとだな。

円環大投票の結果、『マジンガーＺＥＲＯの完全破壊・永久封印』が施工された。
上の魔神パワー、既に魔神化しちまってるからそれは仕方ないとして、他の力を行使しない状態であらゆるマギアの総攻撃を喰らわせてみた。
あれは凄かったな。
魔法同士が重なり合って増幅して、一つの宇宙を粉砕する威力を叩き出したらしい。

全く効果が無かった。
あらゆる状態異常やデバフの一切が確認できず、装甲に原子サイズの傷も入らなかっ

た。

それどころか、温度すら伝わってなかった。

本人は受け身を取った訳でなく、全部が直撃したってのにな…いや、そういう問題でもねぇか。

そして次いで封印が執行された。

包帯状の封印結界が無数に重ねられて、まるで木乃伊さながらの外見になった。

意思の疎通や発露も不可能な完全拘束状態。

その時に

「苦しみますか……鉄（くろがね）の神よ」

と尋ねた声があった。

聖女様だな。

その背後には金髪赤ドレスの姫様や青服メイドに黒服暗殺者。

それならまだしも王妃様とその娘らと従者までが立ち並んで心配そうにしてやがった。

あんたら円環の理に来てもギスついてたってのに……これが信仰の力ってヤツか？

快適ダ　不自由ハナイ

コノママ時ノ果テマデ過ゴスノモ悪クナイ

ハイ、失敗。

あの時はデスヨネーって雰囲気が漂ったな。円環全体に。

この封印にはアタシも関与したからな……結構ショックだったぜ。

たしかうおおおおおんっ!!って叫んでたはずだ。

でもまぁ、この結果には嬉しさもあったんだ。

なんでかって？

そりゃ、アタシの投票と同じになったからな。

アタシはこの存在を「円環の理に受け入れる」として投票したんだからさ。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの④

「がああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

アタシは叫ぶ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!!!!!」

叫ぶ。

「ごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!」

叫び続ける。

頭を抱えてゴロゴロと転がり回りながらアタシは叫ぶ。

自分の中の整理を付ける為にあの存在、マジンガーＺＥＲＯについて考えてたけどやっぱ駄目だ！マジで分からねぇ!!

『光子力研究所』…ＺＥＲＯというかＺの故郷らしい（とはいえそれも怪しいもんだな）施設を完コピしたラボの作業室内でアタシは転がり続ける。
室内の広さは無限だから、やろうと思えば何処までも行ける。
そんでもってどこからでも瞬時に好きな場所へ行ける。
オーケー。現実逃避は終了だ。作業に戻ろう。
そう思ったら、もうその場所に出れた。
周囲だと忙しなく、機材やら装置やらを抱えて作業に勤しむ作業ロボット達がいた。
ロボットって言っても、外見は茫洋とした光だな。
その輪郭がロボットっぽいって感じだ。
一つ目のカメラ・アイに剥き出しのフレーム、充電中の奴は卵型（ドラゴン・エッグっていうらしい）の中に入ってバッテリー・コードを背中に接続して…ってなんか妙に・が多いな。作風なのか？
まぁいいや。そんな身長２メートルくらいのメカな光が作業したり分析してたりする。
名前は…戸田亜（トダー）とか言ったか。
何処かの世界の米軍のメカなんだとさ。
スペックはパンチ力が３ｔで手足は三倍まで伸長可能、走れば時速１００キロで…っ

てオイオイ……仮面ライダーかよ。
何なんだこれ。
少なくとも格闘漫画とかにはいなそうだな。
いくら何でも強過ぎる。
今は性能が底上げされてて、パンチ力が９０ｔで走れば０．１秒で音速に達するらしい。
ついでに充電はこいつらの趣味みたいなもので行動時間に制約はなし。
…なんだこれ。
こんなのが見える限りで５０体はいる。
当然って言ったらちょっと癪だけど、アタシが創ったものじゃない。
こいつらは…いや、今は作業だ作業。
この連中は超優秀で、アバウトな命令でも理解して完璧に仕事をしてくれる。
アタシらの世界でも一家に一台あったら超便利だったろうな。

さて、アタシの目的はマジンガーＺＥＲＯを超えるスーパーロボットの建造だ。
今のアタシは女神様への不遜になるかもだけどオカルトな存在だ。
でも科学者の端くれだし理系女子だ。

だから挑みたくなるものってのがある。
それも科学の最高峰、別の世界から来た機械の神が相手だってんなら俄然と燃えてきちまうってのの。
その点、今の現状は便利だな。
時が無限なら、その間ずっと研究に費やせる。
生命が有限だった人間の頃だったら、それこそループものの主人公でもない限り無理だったろな。
そういえば元々のマジンガーＺもそんな感じに造られたんだったな。
過去に情報を送って研究を濃縮か…凄ぇこと考えやがるもんだな。
でもま、他人に出来たってんならアタシにだって出来るハズだ！
アタシは魔法少女！奇跡も魔法も、そして化学の力があるんだ！
不可能なんてない！もう何も怖くねぇ！
よっしゃ！いくぞトダー達！
最強のロボットを造ろうじゃねえか!!
アタシは魔力のタイプ的に木属性ってヤツらしいがそんなの関係ねぇ！
燃え盛る炎のような意欲とやる気で、研究に打ち込んで打ち込んで打ち込みまくってやる！

いっくぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!

「があああああああああああああああああぁ!!!!」

アタシは叫ぶ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!!」

叫ぶ。

「ごおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!」

叫び続ける。

頭を抱えてゴロゴロと転がり回りながらアタシは叫ぶ。

さっきもやってたな。
というかもう何度目か分からねぇ。
研究に行き詰まりを感じる度にこうやってゴロゴロ転がってる。
不意に何かを閃いたりしては失敗し、また失敗に失敗し続けた先に成功があったりする。
それをもう何度も何度も繰り返してる。
確かに着実な進歩は感じられる。
提供されたデータを元に試作機的な二足歩行型のロボットの幾つかは造った。
古代ミケーネで使役されてたっていう巨石巨人に近いものが完成した。
アタシの魔法で生み出した化学薬品で発生させた雷撃を珪素の巨石に打ち込んで、電子基板化させてそれを組み合わせて電算機能を与えて集積回路化させる。
それを巨人の形に組み上げた。
元ネタに敬意を表して可能な限りに似せてみた。
そこそこに筋肉ムキムキで、尚且つ今風のイケメン的且つ古代の戦士風な感じだな。
男の子の好みが反映されてるのは、まぁしゃーない。
ちゃんと二足歩行出来て、命令すれば想ったとおりに動く。

ロボットなのに獣みたいなしなやかな動き。
正に機械獣だ。

って、それじゃ駄目だろうがよえーーーーーーーーーーーーっ!!
いや、駄目じゃねえよ。
十分凄いわ。
いや、それじゃ足りないんだ。
確かにアタシが生きてた頃にこれを造ってたんなら、化学史に輝かしい1ページが加えられて、テクノロジーも大きく進歩してたろうさ。
でもな。
ここまで来るだけでかなりの時間が経過してるんだ。
最高の設備と資材があって、大体５０年ってトコか。
我ながら凄いことをしたってのは分かる。
分かるけど……まだまだなんだ。
多分、今のままだとあの面白い外見したズングリムックリなロボット…っていうかボロットか。

『ボスボロット』にも負ける。
まずはボロットを超えるロボットをだな……にしてもあのロボットも謎テクノロジーだな。
演出とかでもなしに顔が変わるし明らかにスクラップから造られたって性能を超えてるしよ……ほんと凄いっスね、ロボットがいる世界は。

しかし、そこでアタシはふと考えた。
今更ながら、アタシに出来るコトなのか？
あと一歩どころか、一歩すら踏み出せてるのか？
そもそも時間さえあれば到達出来る試みなのか？
例えるなら…そうだ。
あの野蛮で戦争大好きな血みどろ戦闘民族のフランス・イタリア勢に時間を与えて化学のイロハを伝えたからと言って、現代科学を理解できるものなのか？

失礼だが、あの連中の古風なたたずまいを見てるとこう思う。

できるわけがない!!!!!!!

何を。
何を言ってるんだアタシは!!
何、敗北宣言しちまってるんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!
アタシは!!
アタシは栄えある南瓜自由学園化学部部長、都ひなのだぞおおおおおおおお!!!!

声にならない叫びを上げて、無様に這いずってのたうち回る。
周囲ではトダー達が心配そうにこっちを見てやがる。
表情は変わらないってのに、なんて寂寥感漂う雰囲気を出してやがるんだ。
人生の悲哀を感じちまうじゃねえか。

「大分お疲れのようだな、都ひなの。休憩でもしようか?」
声がしたから横を見ると、ひとりの女が立っていた。

赤い髪の女。
黒いリボンで束ねた長いポニテで、黒い長シャツと青いジーンズを着て運動靴を履いた女が。
真っ赤な眼の奥には光そのものとしか思えない輝きが宿ってて、全くの瞬きをしやがらない。
年齢的には２０代の半ばくらいか。
何処かの世界線だと会ったらしいけど、まだ会った事はねぇ奴だな。
導かれてるんだかまだなんだか。数も多いから把握しきれねぇ。
名前は『佐倉杏子』。
円環の女神様とも面識がある存在らしい。
いや、それは正確じゃねえな。
こいつはその姿を模して外見を成長させた存在だ。
なるほど。
魔神パワーの応用か。
「…ああ、そうしよう。ＺＥＲＯ」

この神、ほんと好き勝手し過ぎだろ…。

…まぁ、人に迷惑をかけて無いからいいか。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの⑤

「……」

アタシは考えていた。

どうすればこの現状を打破できるのかなと。

実質的な時間経過は皆無、というか定義が無意味とは言え感覚的には５０年が過ぎた。

その結果出来たのは…ああ、ここは分かりやすく（でいいのか？）あの映画、『真マジンガーＺＥＲＯ』及び『ＶＳ暗黒大将軍』基準で行こう。

古代ミケーネ帝国で使役されてた、それ自体が集積回路でもある石巨人程度の巨大メカ。

二足歩行が可能とは言えまだ重機的な動作しか出来ない、初期の初期の代物。

機械獣どころか（一体で一国を侵略できるとか作中で言われてたな。多分三体くらいいればワルプルギスでも倒せそうだ、ヤバくね？）、ボスボロットに蹴られても崩壊するだろう。

５０年。生きてた頃のアタシは１８だったからその時から開発を開始したとして、単純計算で６８歳。

人間なら孫が生まれてそうな歳だな。意中のオトコを掴めたかどうかは…いや、やめとこう。

とにかくそれだけの時間を費やして完成したのがこの程度だ。

常に進歩する最新の機材、優秀なアドバイザーに助手を付けてこの有様だ。

比較対象とするなら現代から一万年前にタイムスリップした（あのラストからこうなるなんて誰が予測できんだよ…）Ｄｒ．ヘルだけど、あれは肉体がアストラル化して実作業が不可能且つ現地の科学の黎明も黎明の学者たちを使ってたからな。

本人もマジックハンドで作業してるみたいで歯がゆいとか叫んでたし。

それでも３５００年を掛けて戦闘獣（機械獣の発展型というか元祖というか、ややこしいな）プラントを建造してた。

…あのくす玉やらテープカットは演出なのか？

「祝工場完成」、なんて垂れ幕下がってたし市民達が万歳三唱に拍手の嵐までやってたな。

なんだあの場面、今思い出しても変な雰囲気が漂ってたぞ。

あの映画というか記録映像、本編はシリアスだってのにたまにああいうワケの分から

ないシーンが入るんだよな…。
何時の間にか現状打破の構想からＺＥＲＯ本編の回想になってるな。
あの作品、ていうか世界は色々と衝撃的過ぎる。

「ううむ」

衝撃的って言えばだな…。

「日本防衛に精を出し過ぎ、留年する兜甲児…差異次元の侵略者チップカモイ…やはりあの世界は興味深い」

アタシの前に座るこの存在は好き放題し過ぎだな。
いや、別に誰にも迷惑を掛けてないんだけどさ。
現状説明といくか。
今はアタシのラボの中にあるレストランの中にいる。
中にあるってのとは少し違うか。
空間が湾曲してるっていうか何処にでも出られる場所があるっていうか。

まぁそもそも円環の理自体がそんな場所なんだけどな。
落ち着いた店内、格式はあるけど嫌味はない洋風の内装。
店内を漂うのは焦がした小麦の良い香り。
時間の概念は例によってないけど、昼時なのか食事に来てる連中が多い。
此処にいる時は飯を食わなくてもいいし生き物としての機能も別に要らないけど、やっぱり生きてた時と同じ行動してた方が楽しいからな。
普通の学生みたいに笑い合って会話してら。
で、アタシの前にも人がいる。
長い赤髪に黒いシャツに青ジーンズ。
顕現するときは基本的にこの格好だからすぐ分かる。
佐倉杏子って魔法少女を二十代半ばくらいに成長させた姿を良くとってるな。
前の座席に座って漫画を読んでる。漫画って言っても、世界線の記録が書物の形をとったやつか。
たしかその宇宙の開闢から終焉までが乗ってたはずだ。
終焉…ねぇ。
まぁいい。済んだ事だ。
他人と一緒の時に、ってのにとは思わない。

アタシも大机の前に資料をずらっと並べてる。
イカンな。これじゃ休憩にならねぇ。
休むとしよう。
そう思うと資料は消えた。
ロボットの図面やらエネルギーの構造式が描かれた紙がパッと消えて、机の上にスペースが出来る。
その上にずらっと料理が並べられた。
顔に黒布を掛けたボディスーツみたいなのを着たナイスバディなお姉ちゃんが、テキパキとアタシらの前に飲み物や料理を並べてく。

「ミネルバＸ、いつも感謝する」

何時の間にか漫画をどっかにしまって、佐倉杏子って奴の外見をコピった異界の神、マジンガーＺＥＲＯは頭を下げた。
特にリアクションをしないで、ミネルバＸはスタスタと席を後にしていった。
にしてもいいケツしてんな、羨ましいわ。
あと嫌われてるのがすんげー分かる。

そりゃ、そうだと思うけどさ…見てるだけでもあれは辛いな…。

「研究は順調か、都ひなの。私にできる事なら言ってもらえば可能な限り応えよう」

名物のオムライスを食べながら、魔神がアタシに尋ねた。

自分を倒す兵器の開発だってこと、分かってるのかね。

「いや。今のところはねぇかな。強いて言えば、採掘作業で人員が足りないってところか」

「了解した。では量産機を二体ほど派遣しよう」

量産機…てぇと、アレだよなぁ。

最近女神様の護衛でもしてるんだか、その上空を旋回してるウナギみてぇな顔をしたやつら。

背負った羽根は鳩に似てて天使みたいだけど、外見は…うん。

妙に人間らしい生々しさがあってだな……ああ、そもそも人造人間だったっけか。

というか神というか。

「あの大剣はスコップとしても使えそうだから、採掘に役立つだろう。それと連中は複雑なコマンドはどうも苦手だが、単純作業では右に出る者はいない」

それは褒めてるんだろうかな。褒めてるんだろうな。

「ハァ」

アタシは溜息を吐いた。

「どうした、都ひなの。私でよければ話を聞こう」

どうすっかなとアタシは思った。直ぐ決めた。

「なんか、虚しくなってきた」

「ほう」

「どんだけ頑張っても、アンタに、マジンガーＺＥＲＯに届かない」

分かってたさ。最初から。
戦いを挑むどころか越えようなんて。
最初から無理。
無謀。
不可能。
言語道断。
目的を為す為のどんな努力も徒労に終わる。
達成の可能性はそれこそ…ゼロだ。

「それはどうかな」

事も無げにこの神様は言う。
挑発にでも使えそうなセリフだけど、力の差があり過ぎるせいか不快には感じない。
そのせいか、この存在は最初はとっつきにくいけど話せば色々話せるもんなんだよな。
過去の所業やら元の性格はどうしようもない…どころか邪悪の中の邪悪、この世の全

ての悪を無限に濃縮したブラックホールだろうが、それはそれだ。
「…なんでそう思うのさ」
「簡単な道ではない、というのは私が保証する。だが」
言葉の途中で、ズシリと来た。
振動はない、けどそう感じたんだ。
その感覚はレストランの…ウォールナッツの窓の外から来た。
みんながそっちに眼をやった。
アタシも見た。
眼が見開かれるのを感じた。
「一つの形が、既に出来ている」
焼き林檎を齧りながら、化身の姿になったＺＥＲＯは言った。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　都ひなの⑥

「何だ…あれ」

アタシは茫然と呟いていた。

「何だ、アレ」

再び呟く。

ウォールナッツ円環の理店とでも言うべき場所も騒然と…。

「先輩！見てみて！アレ凄いの！」

「あーもう分かってるカラ。今インスピレーション湧いてきて、メモったりしてるんだから少し落ち着いてヨネ」

「あの連中、最近見ないと思てタラあんなコトしてたとは驚きネ」

「僕もずっと手合わせしたかったんだよねぇ。暇が出来たんならコンタクト取ってみよ

うかな」

慣れ過ぎだろ。

なんだこいつら？

アタシがおかしのか？

「都ひなの。デザートを注文するが、そちらは何か希望はあるか？」

「プリン三個」

佐倉杏子って奴を二十代にさせたアバターになった魔神にアタシはそう返した。

アタシも大概だな。

「それにしても、いやはや壮観だ」

注文を取りに来た給仕さん、ミネルバＸに注文を言いながらＺＥＲＯは言った。

ミネルバはその顔を見もしない。

まぁそもそも、未亡人みたいに顔を黒布で覆ってるから見えないんだけど、いや、きっ

ついな…この態度。
ま、それはいい。
今は眼の前の光景だ。
窓の外に広がるのは、富士山の周辺を模した環境の風景。
あの日本最大の山の麓にはアタシのラボがある。
よーく見ると、白色の富士山を模したような施設が見える。

その近くに、青空の彼方からゆっくりと何かが降りてくる。
それが地面に着いた。
衝撃はないけど、確かに衝撃と激震を感じた。
それは……足。
足だ。
まるで純白の甲冑に覆われた、中世の騎士みたいな。
ただし、その大きさが異常すぎる。
尖がった足の先端。
それだけで富士山と大して変わらないデカさだ。
脚じゃなくて、足でこれだ。

当然、その足は更にデカい脚に繋がる。
色は雪みたいな純白。形は甲冑の滑らかさ。
なんだ…これ。
いや、でもアレだ。
見覚えがあるぞ。
こいつは……たしか。

「そうだ。あれこそが円環の理防衛用超絶ド級機械獣」
「ゴードンヘル……だと」

見てる内に、デカすぎる全容が明らかになった。
鋭い脚とくびれた腰、その上の菱形みたいな胴体、そこから伸びるのは……巨大な龍みたいな腕。
胴体の頂点には甲冑で覆われた顔。
全体的な大きさは……１００キロ以上はあるんじゃないのか…？
って、それは元のゴードンヘルの１０倍近いぞ!?
それと形は…浄火のドッペルに似てるか。

となると、アレは…。

「御明察。あれを製作したのは中世ヨーロッパの面々だ」

オウ……。
マジかよ。
おいおいおいおい…。

アタシ、消えて無いか？
なんか、意識的に存在が希薄化してる気がすんだけど。
アタシの存在意義、消えてない？

「これまで長かったのもだ」

幸いというか残念というか、アタシは消滅していないらしい。
永遠の存在という訳か。

気分を強引に切り替えて、アタシは魔神の話を聞くことにした。
聞いた方が良さそうだ。
「彼女たちはまず故郷の石を切り出し、それを元に無数の形を造っては壊しを繰り返した」
ううむ…。
「幾度も幾度も、試行錯誤を繰り返した。そしてミケーネの石巨人に相当するものを製作するまで、約５００年」
…え？
「機械獣ガラダＫ７、ダブラスＭ２に至るまで更に１５００年」
いや…ちょ…。

「量産にこぎつけ、生産プラントを完成させるまで１５０００年。くす玉を割り、テープカットをした瞬間が懐かしい。その役は最年長という事で王妃が務め、工場長も兼任した」

……絶句ってな、こういうコトを言うのか？

「その後、方向性の違いにより戦争状態に突入。巻き添えで機械獣生産プラントは崩壊」

「……根っからの戦闘民族だな」

「その戦争では機械獣が用いられたのも戦火の拡大を促した。この戦争の中で合体機械獣ガラダブラＭＫ０１が完成し、青き鎚鉾使いの従者と烏面の長女が乗り込み操縦した」

どんな組み合わせだよ。

陣営のメンツが気になるな。

「王妃と聖女の側も対抗し妖機械獣を開発し、戦火の中で更に技術は発展した。王妃・聖女対長女・暗殺者陣営の戦争は２０００年に及んだ」

戦争ってな、カンフル剤なんだな。って、やりすぎだろうがよぇーーーー！

「その後も和睦と対立、工場の破壊と新工場完成と落成式を繰り返し…ああ、あくまで開発における議論の対峙のようなものだから、彼女らの人間関係は良好だ。安心してくれ」

「…おう」

…最強最悪の魔神って呼ばれてた自覚はあんのかね、この神は。

「その果て、開発開始から７５０００年を経て完成したのがアレだ」

「ななまん…ごせんねん…だと」

落ち着け。

整理しよう。

何もおかしい事じゃない。

闇の帝王が戦闘獣プラントを造るのに掛った時間は３５００年と１０００年のハズ

だ。
それを考えれば、連中が万年単位の時間を掛けたのも……。
いや、そういう問題じゃない。
連中はその時間を一つの事に打ち込み、そして成果を出した。
それが…ていうかそこに……アタシは嫉妬しちまってるのか。
そうか。そうだな。
時間は無限にあるんだ。
たったの５０年がなんだ。
時はアタシの味方だ。
あの連中でもあんなのが出来たんだ。
なら、アタシに出来ないワケがない！
逃避的な感情だろうけど、俄然やる気が出てきた！

…と、思ったのは良いんだが。
あれは……ヨーロッパマギカ製のゴードンヘルは何のために来たんだ？
見た限り、戦闘態勢な感じなんだけどさ…。

「アレだ」

何時の間にか届いていたプリンを食べながらＺＥＲＯは言う。
こいつ食欲旺盛だな。
そういや原作でもマジンガーＺを実質無限体は喰ってたか。

「アレを倒す為に、彼女らは出撃しているのだ」

空いている左手の人差し指を伸ばす、佐倉杏子の姿のＺＥＲＯ。
細い指の彼方は青空。
その一点に浮かぶのは、真紅の大輪……って、おいおいおいおいおい。

「私だ。マジンガーＺＥＲＯだ」

そう言うのもＺＥＲＯなんだが……いや、深く考えるのはよそう。
同時に一切の矛盾なく偏在できる事ぐらいはやるだろうさ。
その実例を今やってるだけだ。

これも基本性能、というかそれ以下の機能ですらないものなんだろうな。

「今回も模擬戦だが、私も相応の気構えで戦う筈だ。その結果は私にも予測できない」
「楽しそうだな」
「楽しいに決まっている」

裸眼でも簡単に見える筈なのに、何処からか取り出した望遠鏡で彼方を見ている。
…望遠鏡の淵がマーブルチョコのリングみたいになってるのは仕様なのか？

「相応の気構えって言うと、相当に強いんだな」
「かなりな」
「同じ事二回言うみたいだけど、自分が滅びるかもしれないってのに随分楽しそうだね」
「だからこそ面白い」

破滅を望んでる訳でもなく、負ける気も無い。
それでいて相手を侮ってもいない。神様ってな……ワケが分からねぇな。

「なら…楽しみを増やしてやるさ」

視線の彼方で対峙する魔神と円環製の地獄の王を見つめながら、アタシは笑った。

「あと一万年で、アタシも成果を出してやる」

アタシの宣言にも、ＺＥＲＯが満足そうに頷いた。

そして空の彼方で、戦いが始まった。

真マジンガーＺＥＲＯ　対　ジャンヌ・タルト　プロローグ

「聖女よ。遂にこの時が来たか」
「はい、誠に長い時が経ちました……鉄（くろがね）の神よ」

傍らに立つ、赤い髪の女性の姿をした存在へと私は声を掛けました。
魔法少女の一人の姿を模して、本来の年齢から十年ほど歳を重ねさせた外見ですが、然してその実態は異界の神。
ああ、なんと素晴らしい事でしょう。
我らが女神に加え、神たる存在が更にお一方増えるとは。
この円環の理という世界が、いかに祝福に満ちた存在であるという事かの照明であると思えます。

「さて、私はそろそろ行くとしよう。心より健闘を期待する」
「畏まりました。失礼の無きよう…魔を滅ぼす気持ちで臨ませていただきます」

胸に手を置き、その心が本物であると伝えます。
甲冑越しだと云うのに、体内の胸の高鳴りが確かに感じられました。
「それは何より。それに私は言うまでも無く魔なる者。その意気である」
私の言葉に、神は微笑んでおられました。
そして軽く手を振って、姿を消し去られました。
私は隣から、正面へと視線を動かします。
一面の青空の下には、連なる山々が見えました。
私達が生きていた頃には無かった単位、メートルで表せば百から千メートル単位の雄大な山々ですが、今の視点からは道端の草と変わらないサイズに思えます。
それよりはるか上の空、私の、私達の視線の先にそのお姿が顕現されておりました。
私達の時代で戦場を駆けた騎士の方々とも似た、更に重厚さを増した甲冑のような姿。
白と黒の装甲と真紅の放熱板、邪悪を打ち砕かんとする恐ろしくも雄々しく美しき尊顔。

背後に背負われているのは永遠を象徴するような円の字の翼。
大きさは山々よりも遥かに小さいながら、その存在感はまるで一つの世界のよう。
対峙しているという現状に思わず足が竦み、身が砕けそうな想いが去来します。
しかしながら、私達は退きません。
この広い空間の中、私の背後に立つのは同じ時代を生きた魔法少女達。
敵と味方に別れた者達が、今一つの目的の為に手を取り合って共に進んでいるのです。
我らが神に挑むという、無謀で不遜な、されど明確な意思を込めた想いの元に。
白銀の剣を抜き放ち、私は叫びました。

「我らが神…終焉と原初を司る神よ!」

空に聳える鉄の城塞の如く玉体に剣の切っ先を突き付け、私は言葉を紡ぎます。
身体の内側で燃え上がるのは、恐怖なのか闘志なのか、修行の足りない私には判別がつきませんでした。

「我らが力、存分にご堪能あれ!!」

私の叫びと呼応して、背後で一斉に金属音が鳴りました。
鞭に弓、鎚矛に短刀、火砲に剣、そして槍。
魔法少女達が自身の武装を抜き放った音でした。
戦意は十分。その様子に一瞬でも疑いが無かったとは言えません。
私自身が怯えていたのですから。
しかし、今は内心に向き合うよりも外側に力を注ぐ時でした。
異界より訪れた魔なる神に。
そんな私達に向け、光が文字となって輝きました。
私達の母語でしたが、円環の理内で広く用いられる言語である日本語で示せば、それはこんな言葉でありました。

失礼ナキヨウ　私モ本気を出サセテイタダク

よき戦イトナレバ幸イデアル

その神の言葉と期待に適うべく、私達は各々の力を解放しました。
私達が造り上げたこの存在を、魔法少女の力が包み込んでいきます。
戦いが始まる寸前、私に触れた魔力が、そこに乗せられた記憶が私の中に流れ込みました。
恐らく、他の方々にも同じ事が起こっているのでしょう。
魔力が駆け巡るその一瞬のうちに、私達はこれまでの経緯を思い出していきました。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達①

抜けるような青い空。
清々しい風。
熱くも無く寒くも無く、快適な気温が世界を包んでいます。
一面に広がる青々とした草原の中を、一人の女の子が歩いています。
桃色の長い髪、煌びやかな白い衣装。
黄金の瞳は慈愛の眼差しを帯びて、世界を優しく見守っています。
このお方こそ真の女神。
世界を包んだ絶望を払う願いを身に宿し、一つの物語を完結へと誘った聖なる女神様なのでありました。
究極の名を冠した女神様は、日々忙しくも充実した毎日を送り、今日は久々のお休みをたまには一人でのピクニックにて過ごそうと草原をてくてくと歩いていたのでありました。
空を見上げると、大空の彼方に鳩のような姿が飛んでいるのが見えました。
光り輝く輪郭を持ち、平和の象徴である鳩を彷彿とさせる形の翼を生やしたものが、

きちんとしか間隔を以て大きな円を描いて空をくるくると旋回しておりました。
それはまるで、女神様を祝福しているかのよう。
良い一日になりますように。
女神様はそうささやかな想いを抱き、草原を歩いていったのでした。
綺麗な小川、歳を重ねた木の根元、荒々しい岩肌を見せた渓谷。
どこを眺めようか、一日でどのくらい回れるのだろうと思いを馳せながら、女神様は歩きます。
美しい自然の風景を眺めていると、丁度いい木陰を見つけました。
少しお休みしようかなと思い、女神様は微笑みながら一歩を踏み出しました。

その瞬間、地面も空も、周囲の景色も色を喪いました。
広がるのは一面の闇。
瞬間、女神様は宙に身を躍らせました。
海面から跳ねた魚影のように、美しく輝きながら宙を舞います。
闇の中ですら輝くのは、女神様自身が光を放っているからです。

輝く女神様の真下を、巨大な何かが通り過ぎました。
女神様の光によって照らされたそれは、びっしりと小さな毛が生えた鞭の様な何かでした。
距離を取って着地した女神様は、美しい手の中に小さな光の球を作り出し、それを弾けさせました。
桃色の光が拡散し、闇の世界を光で照らします。
光と闇の斑模様になった世界の中で、蠢く影が見えました。
いえ、それは影というには大きすぎました。
山。
そう例えるのが相応しいでしょう。
地面から縦に、５０メートルはある巨影。
無数の光点が光り、女神様を見ていました。
光が照らしたそれらは、全身にびっしりと鋭く短い毛を生やした蜘蛛でした。
八本の脚を蠢かせて、口から涎を垂らしながら牙をぎちぎちと鳴らします。
ただでさえ悍ましい光景でしたが、更に悍ましい事に、それらは部分部分に人間の形を備えていたのでした。
例えば口元が人の口であったり、八本の脚が美しい少女のものであったり、蜘蛛の腹

の部分から襤褸を纏った骸骨の上半身が生えていたり。
美しい女神様に挑むような、醜悪な姿でした。
正体は考えるまでもありません。
『魔獣』です。
世界を改変した代償か、生まれ出てしまった新たな災厄。
それらが群れを成し、女神様の御前へと現れたのでした。
しかし女神様は怯まず、冷静に数を数えます。
数学はそれほど得意ではありませんでしたが、女神様は頑張って数を数えました。
その結果、山の様な大きさのそれらは、１２０体にも上ることが分かりました。
身長１５２センチ程度の女神様からすると圧倒的どころではない身長差。
そんな女神様に向けて、異形達は一斉に襲い掛かりました。
長く醜い脚を振り上げ、牙を開いて女神様を引き裂こうとします。
対する女神様はその場所から動きませんでした。
自分の運命を悟っていたからではありません。
女神様の眼は、天空から降り注ぐを白き光を見ていました。
先陣を切った異形達。
その頭の中では、美しい女神様を爪の生えた手で串刺しにして引き千切り、顔や手足

を噛み砕く光景が映っているに違いありません。
そんな穢れた思考を思い描く頭部と、その破壊を為す為に振るわれる筈だった腕や爪、そして牙が切り裂かれていきました。
両断されて吹き飛ぶ蜘蛛の顔にびっしりと拡がる無数の複眼は、曖昧な輪郭の白い姿を映していました。
それは翼を広げた、天使の姿。
そんな形に見える、光子の輝き。
両手で握られた大剣が振り切られ、それによって自分が斬首されたのだと知りました。
直後に視界は光に包まれました。
光で出来た舌が首を包み、輝く歯によって咥えられたと知った直後、異形は噛み砕かれて咀嚼され、天使の喉を通って体内に収まってしまったのでした。
至る所で、そんな光景が広がりました。
振るわれる大剣、飛び散る異形の手足に首。
体験を軽々と振り回せる剛力はそれだけで武器になっていて、蜘蛛の節足は根元から引き千切られて黒々とした体液を撒き散らしました。
そして千切った肉を、輝く天使たちは口に運び、美味しそうにもぐもぐとよく噛んで

からお行儀よく飲み込みます。
異形達は後退し、怯えを示すように竦み上がりました。
また一体、また一体と逃げ遅れた巨大な蜘蛛たちが斬り伏せられ、引き千切られ、踏み潰されて肉塊へと変えられます。
呻く蜘蛛を完全に踏み潰し、光の天使は大剣の切っ先を異形達へと向けました。
女神様を中心に円を組み、聖なる者を邪悪から守る防壁であり剣となる天使達。
翼を折り畳んだその姿の数は９体。大きさは約４０メートル。
人間の姿にとてもよく似た、女神様を守護する天使達が並び立ちます。
その中央から、女神様が翼を広げて飛び立ちました。
守護されるだけの立場ではなく、天使達と共に戦う道を女神様は選ばれたのでありました。
女神様は輝く指矢を番え、異形の群れへと放ちました。
光は複数の異形を貫き、その醜い姿を美しい光へと変えました。
それが合図となり、天使達は一斉に異形達へと襲い掛かりました。
頭部は蛇か鰻を思わせる異形ながらに、女神様の祝福を受けた福音の戦天使（EVANGELION）たちの振う刃が異形達の身体を刻み、その肉を無慈悲に貪り喰らうのでありました。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達②

大剣が唸り、蜘蛛の歩脚が風を切って振られます。
激突して発生するのは喧しすぎる金属音。
莫大な予算をかけて建造された大剣は、魔獣の脚を切り裂いて体液を悲鳴を上げさせました。
追撃に移る白き守護天使へと、魔獣は牙だらけの口を開きました。
天使が身構えるよりも早く、醜い口からは黒い液体が吐き出されました。
それは液体ではありませんでした。
超高密度の呪い。人々の悪意や負の意識の集合体、瘴気と呼ばれる気体でありました。
触れればすべてを溶かし、汚染し、精神を腐らせる汚濁。
白き守護天使の胸に直撃し、鰻か蛇を思わせる頭部も黒で覆われました。
その様子に魔獣は牙を蠢かせて嗤います。

『ざまぁみろ』

そう言っているかのようでした。
しかし魔獣は、その笑顔のままで硬直しました。
黒い靄の奥で、光り輝く天使の笑顔を見たからでした。
魅惑的な唇と良いに過ぎる歯並びが鰻顔に浮かんでいる光景が、魔獣が視認出来た最後の光景となりました。
無数の眼球が振り切られた大剣に切断されて叩き潰され、悲鳴を上げる貌に天使が飛び掛かって傷付いた顔に歯を立てて喰い千切りました。
人間の頭蓋骨に似た骨と脳味噌、そして脊髄が引き摺り出され、魔獣が死の痙攣をし始めます。
その肉体を更に大剣で切り刻み、肉を喰らって徹底的に破壊する守護天使。

『凄まじく打ち倒せ』

『悪が二度と』

『立ち上がらぬように』

天使たちの行動にはそんな意思が込められているかのようでした。
内臓を引き摺り出し、皮を引き剥がし、頭を踏み潰し、牙を口から捩ぎ離し、そして喰らう。
至る所で、そんな光景が繰り広げられました。
魔獣の攻撃は大剣で防がれ、それを越えても天使達が体表に張った障壁が攻撃を弾く。
更には障壁を抜けても、天文学的な予算にものを言わせて作り上げた体を覆う一万二千枚の特殊装甲が魔獣の攻撃から天使達を守ります。
天使達はたったの九体でありながら、百体を越える魔獣相手に対し優勢に立ち廻り、まるで麦穂を狩る鎌のように魔獣達を薙ぎ払っていくのでした。
円環の女神に従う守護天使達。
彼らの中には義憤と正義の心で満ちていました。
円環の理。
魔法少女の救済の為にその身を投げ出し、概念と化した女神が創り上げた天国であり女神そのもの。
しかし世界は魔法少女の安寧を良しとしないかのように、救済された筈の世界に於い

て彼女たちの敵を生み出した。
それが魔獣。
発生源は人間の負の感情であるが故に、駆逐することもまた実質不可能な存在。
それはまるでハッピーエンドを認めず、バッドエンドを望むかのような、それに至るまでの歯車の如く邪悪な舞台装置。
その存在に、女神様の守護天使達は怒りに震えていたのでした。
邪悪なものは許せないという正義の心、女神の救済に仇なすものへの義憤。
こんなのってないよ、と言わんばかりの理不尽への怒り。
美しい少年の疑似人格データが搭載された事で生じた自意識を、白き天使達は備えていました。
故に、彼らの矜持とも言える感情も芽生え、それによって一層の敵意を魔獣に抱いているのでした。
魔獣を喰らった際に受けた瘴気の浸食。
今は天使。
されどしかしてその実態はヒトの手で造られた人造神。
獣の攻撃で神が屈するかとの意地と、莫大な予算がつぎ込まれた高性能な内臓。
そして永久機関による無尽蔵の再生能力により、瘴気を黙らせて浸食を利用しての解

析。
受けた情報を迅速な報連相で共有し、それを以て天使達は魔獣の正体と存在の詳細を知ったのでした。
ハッピーエンドなど認めない。
魔法少女よ。
バッドエンドへと向かう歯車に組み込まれ、絶望の泥沼に沈め。
これに対して、先の通り天使達は敵対心を露わにしました。正義と義憤、そして理不尽への怒り。
しかし、それだけに非ず。
焦点となるのは『バッドエンド』という部分。
天使の一体が、魔獣の胴体に生えた虚無僧を思わせる禿頭を掴んで持ち上げ、頭を握力で締め上げ握り潰しました。
湯気を立てる内臓に喰らい付き、相手の苦痛を愉しみ更に増大させるべく咀嚼する。
頭だけは尋常なまま、首から下を徹底的に切り刻んで絶望と苦痛を与え続ける。
皮を引き剥がして、全身を痛覚に変えてからいたぶり続ける。
抉った肉を、その出処である魔獣本人の口に突っ込み強制的に肉を喰わせる。
引き千切った牙を礫のように投擲し、肉を弾けさせ苦悶の最中に突き落とす。

全身を満遍なく踏み潰し、生きた絨毯へと変える。
八本の脚を切断し、動けなくしてから内部を確かめるように丁寧に生きたまま解体する。

相手への敵意のままに、天使達は残忍かつ迅速かつ丁寧に魔獣を殺戮していくのでした。

『バッドエンド比べならこちらも負けない』

光の姿。可能性の光として呼び出される前の世界にて自分たちが為した事を、天使達は誇りとしていたのでした。
一つの物語を、破局として締めくくったその事象。
魔獣の存在はそれを為し得た自分達に対する挑戦であるとも受け止め、天使達は円環の理防衛の為の殺戮に身を浸しているのでありました。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達③

闇の中を疾駆する、巨大な蜘蛛の姿をした異形。黒く染まった大地を揺るがしながら走る巨大質量は、数にして五十体。

人の世の絶望に哀しみ、嫉妬に憎悪にと、あらゆる負の感情が形を成した存在である『魔獣』。

大木のように太い手足にはびっしりと長い針が生え、蜘蛛の胴体からは虚無僧を思わせる人型の上半身が生えている。

纏った襤褸の内側には、骸骨もかくやといったばかりにやせ細ろえた肉体があった。

骨と皮同然の姿であったが、禿げあがった骸骨の頭部にある二つの眼窩は悪意を凝縮したような黒い闇が渦巻いていた。

その闇を眼窩から零しながら、魔獣は八本の脚を忙しなく蠢かせて走っていた。

見れば全身からは、その身を構成する瘴気が吹き上がっている。

瘴気は魔獣の各部に穿たれた穴や線から漏れだしていた。

自ら付けたものでは無さそうだった。

例えば、そう、何かが弄んで付けたような。

傷としては軽くは無いが重くも無い。
ただ苦しめるだけに与えた傷。
サディスティックな願望というか性癖が垣間見える傷つけ方だった。
魔獣はそれから逃げているのだった。
悪意の化身たる存在が逃亡を選ぶ。
そんな相手とは、一体。

「ハァーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハァーーーーーーーーーーーーーー!!!!」

叫びが聞こえた。
風が吹いた。
激突の音は遠く聴こえた。
長く伸びた手足は別として、胴体の大きさだけで五十メートルは優に超え、体高も十メートル以上はある魔獣達が高々と宙に上げられていた。
空中にて、魔獣達は一斉に瘴気を噴き出した。
全ての個体が何かによって殴打され、程度の差はあれど負傷し、既に開いた傷から血

液代わりの瘴気を溢れさせた。
異形達を宙高く放逐したのは、黒い風だった。
魔獣達と正面から激突し、圧倒的な膂力と速度で以て蹴散らしたのだった。
滞空する魔獣達の何体かは、蜘蛛と人間の胴体を分断されていた。
断面は鏡のように滑らかであり、漆黒の闇の中に配置された醜い内臓が瑞々しい切り口を晒している。
それ以外にも、立てに真っ二つにされたものや手足を根元から全て寸断されたものもあった。
宙に浮かぶ異形達は、蜘蛛と同様に複数の眼を備えていた。
それが、闇の中を飛翔する何かを見た。
見た瞬間には、その眼球は切り裂かれていた。
落下するまでの数秒間、何かが魔獣達を切り刻み続けた。
絶叫を挙げる口も刻まれ、人型の喉が胴体と切り離される。
落下したとき、受け身を取れたのは半数程度であった。
残りの半分は手足を全て切り落とされた達磨状態。
または完全な戦闘不能となり、瘴気の霧へと還っていった。
ここに魔獣達は逃亡を止め、襲撃者へと身構えた。

無数の眼に睨まれた闇の先に、人型の物体が立っていた。
そこに向け、何かが飛翔していく。
異様な速さであり、そして空間を刻むような複雑な線を描いての飛翔だった。
人型は無造作に右手を伸ばした。
そして握り締める。金属音が鳴ると、その手に巨大な武具が握られていた。
それは大きく湾曲した、巨大で鋭い鎌だった。
人型はその柄を握り、石突に当る部分を側頭部へと差し込んだ。
ガチリという音が鳴り、頭部に鎌が完全に固定される。
異形である魔獣達をして、その存在の姿は異様に見えた。
形としては前述のとおり人型をベースとしている。
体格で言えば細身だろう。
だが全身を金属で構築されたそれは、ひ弱さとは無縁の精悍さを全身に滚らせていた。
手や足の全てが振るうだけで凶器となる、そんな姿だった。
そして極めて特徴的な要素はその頭部にあった。
前にあるように、その頭部には巨大な鎌が固定されている。
それは右側ではなく左にもあり、まるで巨大な耳か角のようである。

そしてそれらが生えた頭部の造形は、髑髏。
がっしりとした骨と顎と骨格を持った、黒味の強い銀色の髑髏の貌であった。

「アア…なんてすばらしい切れ味なんだ…」

頭部に鎌を備え、両手を左右に垂らして泰然と構える機械の巨人が声を発した。

「惚れ惚れするなァ……ほんとぅにぃ……」

魔獣達が目を凝らし、そして気付いた。
声の出処は、巨人の左肩。
胸を覆い、肩も保護するために左右に迫り出した紅い装甲の上に、それはいた。
白と黒の衣装を纏い、白くモコモコとした縁を持つ黒いフード付きの漆黒のマントを羽織った長身の女性。
大人びた声と姿であったが、少女から女へとなり掛けの年齢に見えた。
またこの存在も、外見の最たる特徴は顔に顕れていた。
目元と鼻を、黒い仮面が覆っていたのである。

鼻の部分は異様に長く前に伸び、色も相俟ってまるでカラスを彷彿とさせる姿であった。

「なぁ、そう思うだろぉ…？」

輪郭だけで美しい事が分かる顔が傾く。顔の両サイドから垂れ下がる銀の髪がふわりと揺れる。

仮面の奥で薄っすらと見える黒銀の瞳は、魔獣達を見ていなかった。

「なぁ」

すなわちその呼びかけや先程の問い掛けも、魔獣達を相手にしてのものではなかった。

「黒いのぉぉぉっ!!」

カラスの面の少女が叫ぶ。

異変は同時だった。
居並ぶ異形の一体が突如として破裂した。
苦痛の叫びが上がる間もなく、全身が引き裂け地面に墨をブチ撒けたように大量の瘴気が噴出する。
魔獣は「腹から」引き裂けていた。湧き上がる瘴気の中、四つの光点が灯る。
振り返った魔獣の人型部分に何かが絡みついた。それは複数体を巻き込み、次の瞬間には五体の魔獣が一まとめに縛り上げられた。
縄の役割を果たしているのは、無数の節で出来た巨大な蛇腹。
それは光と相反する影の様な漆黒の装甲で出来ていた。
そして蛇腹とは、比喩ではなかった。
圧壊寸前までに力が籠められて束ねられ、苦痛に呻く魔獣達の顔の近くにそれは浮かんでいた。
黒い蛇腹を長い首としているのは、蟷螂と蛇を合わせたような逆三角形の形状をした金属の貌だった。
「鞭（フルスタ）」

小さな呟き。
直後に魔獣達の姿が消えた。
生じるのは風切り音と破壊音。
噴き出した瘴気の奥に、僅かに漆黒の残像が見えていた。
次元が歪んだかのような光景が止むと、地面には無数の破片が散乱していた。
瘴気となって消えゆくそれらは、魔獣の姿を構築していた部品や中身である内臓の破片だった。
途方も無い破壊の力が暴れ狂い、魔獣達を原型も残さずに破壊していた。
一瞬にして更に半数程度に減った魔獣達。
その中で半分が髑髏の巨人とカラスの面の少女を見、残りは新しい脅威に眼を向けていた。
新たに出現したのは、蟷螂と蛇を合わせたような造形の鋼の巨人。
手も足も漆黒の分厚い装甲で覆われ、手の先は全てが鋭い爪であり足の指は三本の鉤爪であったりと人より獣に近い印象を受ける姿だった。
魔獣達を絡めとっていた首が、ゆっくりと長さを縮めて胴体へと戻っていく。
適切な長さになっても長い首は、伸ばされていたものも含めて二つあった。
二つの鎌と二つの首、要素は違えど共通点のある二体だった。

まるで対の存在であるかのように。
またその造詣は髑髏と蛇。
紛れも無い異形であり、人型をしていたがそれは限りなく獣に近い存在だった。
機械の獣。それ、即ちは。

「よぉ黒いの。随分と機械獣の扱いがお上手になったじゃないか」
「私は何もしていない。この子の、ダブラスの出来がいいだけ」
「ああそうかい。ならこっちも負けちゃいないぞ。なぁ、ガラダ」

魔獣達の群れを挟んで、二人の少女が言葉を投げ合う。
言葉の調子としては普通だったが、場に流れる空気は剣呑であった。
それは魔中に対する敵意ではなく、女同士の対抗心によって出来ていた。
ダブラスと呼ばれた機械の獣、機械獣の首の間の装甲の隙間には漆黒の衣装を纏った、黒く長い髪の少女がいた。
まるで馬にでもするように、二本の首の根元を軽く叩くとダブラスは長い首を曲げて彼女に顔を近付けた。
無機質な機械の眼で黒い少女を見て、直ぐに前へと向き直る。

命令を待つ従者、それも獰猛な獣の様な態度であった。
「それ」を命じられれば、即座にこの機械の獣は動くのだろう。
それは頭に鎌を備えた機械獣、ガラダも同様であった。
そして両者の主らもそれを理解し、下す命は同じであった。

「安全第一を旨とする鋼の神様は、私達の独断専行にとやかく云うだろうが…これは試運転の機会にはもってこいだ」

カラスの少女が楽しそうに笑いながら言う。
仮面の奥の眼には残忍な光が宿る。
処刑具か、或いは拷問具のような輝きの光だった。

「私達の安寧の場所である円環の理に弓引く者共。容赦しない」

気分を切り替え、一転して敵意の眼差しで魔獣達を見る。
二人の少女から立ち昇るのは、殺意と戦意。
それを纏う二体の機械獣もまた、鋼の身体に機械にあるまじき生々しい生気を携えて

主の命を待っていた。

「嬲り尽くせ!!ガラダ!!!」

「邪悪を滅せ!!ダブラス!!」

主の命が下った。

二人の少女達の叫びに、二体の機械の獣は世界が砕けたかのような機械の咆哮で応えた。

ガラダが頭部の鎌を左右の手で握り締め、ダブラスの顔の先端に光が燈る。

直後にガラダは両鎌を手に疾駆し、ダブラスの三角形の顔の先端からは破壊の光が放たれた。

切り刻まれる魔獣達の悲鳴が木霊し、二つの破壊光に貫かれる魔獣達の断末魔が闇の世界に鳴り響く。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達④

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!!!」
邪悪な音階を宿した少女の声が響き渡る。
声の背後には異形の悲鳴と絶叫、そして破壊音が遠く聴こえた。
音速を越えた速度で稼働する巨体が戦場を縦横無尽に動き、魔獣達に無慈悲な暴虐を振っていく。
声はその最中に発せられていた。
漆黒の暴風は、両手に大鎌を有した髑髏の機械の巨人。
機械にして、獣の如くどころかそれ以上に素早くしなやかに動く戦闘兵器。
かつてとある世界で、それを操る黒衣の怪人はこの存在をこう評した。
不死身の破壊者にして無敵の殺戮兵器、そして至高の芸術品。
機械の獣、機械獣。
カラスの面の少女を肩に乗せ、禍々しい黒風となって大鎌の乱舞を見舞う機体の名は、ガラダＫ７。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!」

興奮しきった声で叫びながら、少女は戦場を指差した。

「次はお前だぁぁぁ!!」

その先には無傷な魔獣が一体。
仮面の奥の眼が獰悪な輝きを放ち、巨大な機械の眼がそれを追う。
次の瞬間には、彼女の愛機たるガラダＫ７は主同様の漆黒の身体を宙に躍らせていた。
全長四十メートルとは思えないほどに軽やかな動きは、曲芸の神に愛された熟練の軽業師を思わせた。
魔獣達が即座に反応し、蜘蛛の身体の口から糸状の瘴気を放ち、虚無増の口から音で構成された瘴気を発射する。
糸は万物を融解させ、破壊の音は対象の分子結合を緩ませ確実に破壊する。
共に広範囲の攻撃であり、完全回避は不可能と判断したためだった。

糸がガラダの左腕を包み、破壊音が胴体を直撃した。
だが。
「効ぃくかそんなものおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」
糸が鎌で薙ぎ払われ、破壊音が装甲の上で砕け散る。
「でも装甲を汚しやがってぇぇぇ!!!」
急降下しながら叫ぶ少女。
続く攻撃も一切の効果はなく、装甲の表面で光となって弾けていく。
集中砲火を全くの無意味とし、着地の衝撃で複数の魔獣が砕け散る。
体液代わりの瘴気がブチ撒けられる。手足が吹き飛び、胴体が爆ぜ割れて臓物が吹き上がる。
「てめぇぇぇぇぇ!!!私のガラダを汚しやがったなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」

理不尽な叫びと共にガラダが両手の大鎌を振う。
魔獣達の悲鳴ごと肉体が攪拌され、魔獣の肉体が瘴気の飛沫となって飛散する。
その場で駒のように回転し、刃の大竜巻と化して魔獣達を蹂躙していく。
当初の標的と定められていた魔獣も既に切り刻まれ、他の魔獣の残骸や瘴気と混ぜ合わされている。

「ん？」

ガラダの回転が停止した。見れば、機械獣の背中と腹、そして胸に巨大な鋭角が突き立てられている。
鋭角は刃であり、それを握るのはガラダより二回りは大きな人型だった。
全身を白骨の様な白い装甲で覆った姿は三体。それらは中世の騎士を思わせる造形をしていた。
腕と脚、そして頭部の兜には蜘蛛の意匠が伺えた。
戦闘の最中、魔獣が自らの姿を変えて機械の獣へと対抗を図ったのだった。
騎士風の姿へと変異した魔獣の刃はガラダの装甲を貫けなかったものの、宿った膂力によって機械獣の動きを止めていた。

その上空から、同じ形状の個体が躍り掛かった。
手に持つ得物は槍に槌に刃に鞭。
兜の面に穿たれた眼には殺意と悪意。
振り注ぐ具現化した邪悪に対し、

「あはぁ……♡」

カラスの仮面の少女は恍惚とした声を上げた。

「嬉しいよ…そっちから向かってきてくれるなんてぇ……」

じっとりとした、粘液で濡れたような声であった。
直後、三体の騎士が撥ね飛ばされた。
停止していたガラダが動き、大鎌を振り下ろしたのであった。
それは魔獣達を掠めもせず、地面に深々と突き刺さった。
一瞬の困惑、続いての嘲弄。
無防備な背中を晒した機械の獣へと、魔獣の騎士達は各々の得物を向けて落下した。

これだけの数なら、と数を頼りに襲い掛かった騎士たちの無謀の貌に、次の瞬間に動揺が走った。
鎌が突き刺さった闇色の地面に、闇よりも濃い紋様が描かれた。
紋様はいわば魔道陣であり、それはガラダの力では無かった。
その肩に乗る少女が闇色に輝いている。
地面に突き刺された鎌に宿る力は、少女を由来としたものだった。
「La（死）Danse（の）Macabre（舞踏）」
魔道陣から光が炸裂する。
雷撃か、生物の血管を思わせる網目状の光だった。
毒の通った血のような光が集まり、形を形成する。
発生したのは、カタカタと笑い続ける髑髏の貌。
白いフード付きの黒いローブを纏った骸骨たちの眼窩の奥には、とぐろを巻いて渦巻く闇が溜まっていた。
その闇が弾けて拡散する。
弾けた闇はカラスの羽となり、魔獣達に殺到していく。

回避も撃墜も、そもそも空間を埋め尽くす勢いで発せられる羽によって回避する空間が埋め尽くされている。
全身に突き立つ黒羽。
接触の瞬間、魔獣達は空中で身を捩った。
受け身も取れずにガラダの周囲へと落下する。
立ち上がろうとするも、身を支えた腕が断裂する。
腕の断面からは筆舌に尽くしがたい腐敗臭が立ち込める。
身体は更に崩れ、膝も砕けて首が蕩けて垂れ下がる。
白い装甲も、羽の着弾点を中心として黒く変色している。
黒色部分は灰のようになり、何もせずとも剥落していく。
それでいて生命活動は止まらずに、苦痛だけが続く。
絶望の化身たる魔獣が、異形の叫びで泣き喚く。
死よりも辛い黒い死の病を受け、頼むから殺してくれという哀願を叫んでいる。
そこに降りる影。
影を形作るのは、大鎌を携えた機械の巨人。その肩に立ち、半月の口を描いてニヤニヤと笑っている。
崩れ落ちた魔獣達の中央に立つガラダと少女はまるで、彼らにとっての支配者であっ

た。

但し、その立場はサディスティックな暴君である。

「覚悟しろよぉ…我らが女神と鋼の神に抗う悪の化身共ぉぉぉ…」

両手の鎌をカチャカチャと鳴らし合わせながら、少女は言葉を紡ぐ。

「血に飢えた歌をくれてやる!!!!!イイ声で歌えぇぇぇぇぇ!!!!!」

少女の命が下った。

魔獣達へと大鎌が振り下ろされる。

それらは魔獣の急所を丁寧に避け、異形の細胞の一つ一つに甚大な苦痛を刻みながら弄ぶ。

安易な消滅を赦さず生まれた事を後悔する苦痛。

今も続く黒い死の魔法に次いで、鎌の斬撃と剛脚による踏みしだき、巨大な手による圧搾を用いて丁寧に、大事に大事にしながら魔獣を徹底的に壊していく。

「Ｗｅ　ａｌｌ　ｆａｌｌ　ｄｏｗｎ！」

残虐な蹂躙による瘴気がガラダの肩まで吹き上がる中、そこに立つカラス面の少女は花畑の乙女のように朗らかに歌い、花の様に可憐に踊り狂う。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達⑤

「相変わらず喧しいわね」

少女と機械の獣。

加害者二名による残忍な叫びと破壊音、断末魔を上げることを赦されない暴虐による異形の悲鳴が遠く響いている。

水平線の果てにその様子が見えるくらいの距離を隔てて、黒衣の少女は厭わし気に呟いた。

髪も衣装も黒で統一した少女の前に、巨大な二つの顔が迫った。

蟷螂と蛇に似た、鋼の貌。

「大丈夫。意見の相違で戦争はしても、昔みたいに喧嘩はしないわ」

忠犬のように擦り寄ってきた機械獣ダブラスＭ２の顔を、黒の少女は優しく撫でた。

手が触れた時に鳴った駆動音は、猫が発する喉鳴らしの代わりだろうか。

一撫でされると首は元の位置へと戻っていった。
左右の首は周囲を見渡す。何も無かった。
襲撃時には二十数体、その後の増援により数百体はいた魔獣達の姿が今は何処にも無かった。

「大丈夫よ。あなたたちはすべて処理したわ。自信を持ちなさい」

少女は励ますように言う。
これは戦闘を経たという証明であった。
だが周囲にその痕跡はない。
魔獣の破片の一片すらなく、周囲は静謐に満ちていた。
音と言えば、遠方から聞こえるサディスティック全開の叫びだが、それも感覚として喧しいと思える程度で音としては大したことが無い。
その時、巨体の足元でかすかな音が鳴った。
コップに注いだ水が、僅かな振動で揺れたような。
その発生源へと、二条の光が放たれた。地面に着弾した瞬間、一面の漆黒は光へと変わった。

光は着弾点を中心として広範囲に広がり、闇色の戦場を眩い光で照らし出す。
地面の中で、光に照らされて異様な影が浮かび上がった。
一体一体が蜘蛛に似た形状の巨大な影、中世の騎士に蜘蛛の要素を付与した異様な姿。
数にして二百体はくだらない、異形の影絵が光を宿した地面に浮かぶ。
身を捩り、無音の絶叫を挙げる異形達。
描かれたのは、地獄を描いたかのような異形の影絵だった。
影は原形を留めているものが大半だったが、それでも少なくない数が腕を千切られ胴体が切り離され、肉体の各部を潰されていた。
騎士風の腕が苦悶に悶え、指を痙攣させている。
肉片となっても死にきれず、安易な安息は与えられない。
光で照らされた地面は波のように揺れていた。
放たれた光の力が弱まり、地面が元の色彩へと戻っていく。
異形達の姿も闇に覆われ、見えなくなった。
闇色の地面、というか影色の地面は再び静寂を取り戻した、筈だった。

「ハァーッハッハッハッハッハァ!!」

その静寂を破る哄笑。
声の矛先は遥か高空。
機械獣と少女の、六つの視点が上を向く。
それの落下に合わせて下に落ちる。水平になった時点で少女は顔を固定した。

「待たせたなァ!!黒いの！長いの!!」
「待ってない」

巨大質量の落下音は、信じがたい事にほぼ無音。
羽毛が静かに地面に着いたかのようだった。
双頭の機械獣の傍らに、頭部から二つの大鎌を生やした髑髏の機械獣、ガラダＫ７が舞い降りていた。
漆黒の装甲には、べっとりと魔獣の瘴気が纏わりついている。
魔獣の拷問と虐殺を終え、機械獣も少女も満足そうだった。
並ぶ二体の機械の獣の肩に、種類は違えど黒衣を纏った少女達がそれぞれ立っている。

「相変わらず煩いわね、次女」
「素っ気ない呼び方するなよ、リズさんよぉぉ…知らない内に遠く行っちまって、私は寂しかったぜぇ…」

眼鏡のように仮面を外し、少女は相手の名前を告げる。
外れた面から覗くのは、残虐行為を行ったとは思えないほどに快活そうな、それでいて貴人の風格も備えた美少女の顔だった。
仮面を外された事で、額の少し上から伸びた特徴的なアホ毛が揺れた。
リズと呼ばれた少女が溜息を吐いた。
自分の名前を呼ばれた事で、自分も相手の名前を呼ぶことを強要されたと思ったのである。
「悪かった、とは言わないわ。あなたの魔法は怖すぎるのよ、コルボー」
長い髪をかき上げながらリズはそう言った。
その返事は、喉を仰け反らせ、両手で身を抱いて身を捩らせてての笑い声だった。

「それはお互い様じゃないかぁ。共に使う魔法は危険で陰惨で最高に嬲り嬲れる魔法だ」

ぐっと、リズは呻く。痛いところを突かれたのだ。

「でも示し合わせて連携を練習したし、もし罹患しても即座に治癒する魔法薬は神様が調合してくれたじゃないか。神の恩恵を無下にするのか？」

「それとこれとは別。私は直にあれを受けたのだから、苦しみは知ってるしその記憶は拭えない」

「あー、ビビってるのか。悪かったとは立場上謂わないけど、いい加減過去の事と割り切れよ」

「そう言う貴女は割り切れてるのかしら？」

「ああ？何にだ？」

「言葉通り。割るって意味よ」

ギシリ。

そんな音が両者の間に生じた、ような気がした。
空間が歪み、こすれて生じたかのような、断絶という言葉を音にしたような音。

「成程なぁ」

再び仮面を装着し、コルボーは歯を見せて嗤う。

「黒いの、お前まだ根に持ってるのか。どれだ？昨日のお茶会で好きな茶菓子を掠め取ったコトか？」
「分かってるのなら謝りなさい」
「ああ悪かったな。でもお前、その報復で私にあの事を言うとか、なんていうか、ちょっと言い方考えられねぇのかなぁ？」
「…加減、間違ってたかしら」
「ああ。同じ時代を生きた好で笑って赦してやるが、もう少し他人との接し方を考えた方がいいぞ」
「……貴女に、そう言われるとは」
「ハハハ！私もそれで痛い目を見たからなぁ」

巨体の肩に乗り、同じ時代を生きたと語る二人の魔法少女が語り合う。
二人の脳裏には、かつて時の流れの中にいた時の記憶が木霊しているのだろうか。

「それはそうと、見てみろよ」

白い手袋で覆われた右手の親指をクイっとさせてコルボーは言う。
その先をリズは見た。
視界の奥に、大群を成して移動する魔獣の群れが見えた。
その背後、上空には光り輝く九つの影が飛翔している。
人に酷似した姿に鳩の様な巨大な翼を生やした、光り輝く姿。
鰻か蛇に酷似した頭部には大きな口が開き、まるで微笑んでいるように見えた。
手に二又の長大な槍を持ち、着かず離れずの距離を保って魔獣達の背後を飛んでいる。

「天使達のお出ましか」
「天使『様』よ」

「あの連中もいい性格してるよなぁ…」
「『方々』と言いなさい」

プレッシャーが込められたリズの訂正要求を無視し、コルボーは感慨深げに語る。
自信がサディストであるが故に、天使達の思惑に気付いたのである。

「我らが女神様の親衛隊…ああ、否定はしないさ。でもな、あの、ええと…あの形は……」
「堕落の象徴である蛇。私はそう捉えているわ。聖邪も兼ね備え、闇と光を宿した神々しき姿……なんと素晴らしい」
「『蛇』…か。ああ、そうだな、うん。合ってる合ってる」

リズの様子をじっと見て、コルボーはそう言った。
仮面の奥にある彼女の眼差しは、妙に優しかった。
「純情だな」。コルボーはそう思っていた。

「ま、いいや。それより仕事の再開だ」
「ええ」

彼方の光景から目を離し、背後へと振り返る。
そこにいたのは、視界を埋め尽くす数の異形の群れ。
形状はこれまでと似ていたが、各部がより先鋭化し全身が凶器のような姿と化していた。
体格も格段に巨大化し、先程までの倍以上の体格…一体あたりの大きさは百メートルを超えていた。
体を持ち上げれば、機械獣の大きさの倍どころか三倍にも達するだろう。

「魔獣、かぁ。まったウジャウジャと湧いてくるなぁ。獣というより虫じゃないか」
「実際虫ね。蜘蛛だもの」
「知ってたか黒いの。蜘蛛ってのは虫に含まれないらしいぞ。私達が生きた後の時代でそう定義されたんだとさ」

忽然と湧いた大群を相手に、二人の魔法少女もそして機械獣も一切の怯えを見せなかった。
それよりも、寧ろ。

「さあて、御誂え向きに沢山揃ったなぁ」
「ええ、これなら存分に試せそうよ」

コルボーは口角を歪めて嗤い、リズは冷ややかな炎のような眼差しを異形達に向けた。
彼女らが操る二体の機械獣も、体内の駆動音を鳴らして応えた。
闘争への歓喜と、そして、また別の喜びを示す音だった。
機械の装甲の内側で、複雑に組み合わされたメカニズムが密かに稼働を開始する。

「やるぞ、リズ」
「ええ、コルボー」

並び立つ二体の機械獣。ガラダの左肩にはコルボーが。
ダブラスの右肩にはリズが立つ。
その相手に向けて、コルボーは左手を、リズは右手を突き出した。
距離を隔てて向き合わされた掌から、二つの黒い光が放たれた。

コルボーが発したのは、生命を腐らせ物体を融解させる破壊の魔法。
リズが放ったのは、全てを包み込み取り込む影の魔法。
その二つの闇色の光が合わさり、二人の魔法少女と二体の機械獣の巨体を包み込む。
発生したのは、それらを中心として発生した大竜巻であった。
彼女らの周囲に展開していた魔獣達がその勢いに竦み、歩脚を蠢かせて後退する。
闇色の大渦の直径は三百メートルにも及び、天高く伸びた渦の果ては見えない。
そして渦巻く闇は影でもあった。
その中に取り込んだものを包み込む影。
その中で破壊の力が本来とは異なる用途に用いられる。
丁寧に形を壊し、蕩かし、繋ぎ合わせる。
二つのものが一つになっていく。

「目覚めよ」

闇の中で声がした。
リズの声だった。声の奥で、コルボーが愉快そうに喉を鳴らす音が聞こえた。

「目覚めよ、英雄」

大渦を貫き、中から何かが姿を見せた。
それは鋭く巨大な切っ先を見せた爪であり、それを伸ばす指であり手であった。
その手の位置は異形達の頭部よりも遥かに上であった。
見上げる異形の眼には驚愕と、恐怖。

「目覚めよ！勇者!!」

叫びと共に巨大な爪を持つ手が左右に振られた。
自らを包んでいた闇を破壊し、それは姿を顕した。
破壊された影が、その全身に纏わりついている。
顕現したそれを、魔獣達は茫然と見つめた。
二つのものが、完全なる一つの個体となっていた。
それは、リズ曰くの『英雄』であり『勇者』の姿であった。
魔獣達が威嚇の為に体を立て武具を振り翳すも、百メートルを優に超える体格を以てしても全くとして足りていない。

蟷螂の斧という言葉を、魔獣達は知っているのだろうか。
現れたそれの上部で、巨大な二対の影が見えた。影の先端には、蛇と蟷螂を合わせた貌があった。
その根元には、巨大な鎌を生やした髑髏の貌。
そしてそのすぐ下にある巨大な肩の根元に、二人の少女が立っている。
少女の内の一人、カラスの面を被った魔法少女であるコルボーが右手を突き出した。
繊手を握り込んで拳を作る。親指が上を向いて突き上げられていた。

「好きに遊べ」

白い歯を見せて笑いながら、コルボーは拳を反転させた。親指の先端が地面へと向けられる。

「地獄に堕ちよ」

その動きに秘められた意思を、リズが言葉として発する。
そして、殺戮が始まった。

異形達の絶望の声を聞きながら、二人は同じ事を思っていた。

『こっちの方がまだよかったろうに』

その思いは、異形の天使達に追い遣られる魔獣達に向けられていた。

今虐殺をされている者達と同族の存在へ、この二人は憐憫の感情を抱いていたのであった。

果たして、天使達が魔獣達を導いた先に待つものとは、一体。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達⑥

魔獣達は逃げていた。
蜘蛛の胴体から虚無僧の上半身を生やした異形が、無数の群れとなって逃げていく。
大きさは一体一体が百メートルを超える体長を有し、それぞれが山に等しいサイズであったが、それでも戦闘ではなく逃亡を選んでいた。
魔獣の最後尾には、上空を飛行する光の天使たちの姿があった。
時折、手に持った二又の槍を投擲し、魔獣達の身体を貫き地に縫い留めた魔獣を集団で襲い掛かって貪り喰っていた。
今も何体かの天使は魔獣の残骸を手に加え、鰻の様な顔に開いた巨大な口に並んだ臼歯で噛み潰しながら美味そうに食べている。
魔獣達を楽しそうに追い立てる姿は、狩人ではなく牧羊犬、いや、単なる虐殺者にしか見えなかった。
鰻顔の天使達は、不意に反転しそれまでとは逆方向へと飛翔していった。
用済みとばかりに、喰い掛けの魔獣の残骸が投げ捨てられる。
食べ物に対する感謝も微塵も無い、ただゴミを捨てたのと同じだった。天使の認識も

そうだろう。
方向を翻した天使達は、鳩を模した巨大な翼を翻して高速でその場から去っていった。
その動きには、必死ささえ感じられた。
まるで何かから逃げているような。
追い立てていたものが逃亡者になる様は滑稽ですらあった。
だが魔獣達は既に天使達の事を忘却していた。
理由は、今まさに天使達を逃亡させたものが、自分達に立ち塞がっていたからだ。
魔獣達の前に姿を顕したのは、七体の光。
人型を模したそれらの大きさは、形状の差異はあれど五十メートルから七十メートル。
概ね人型をベースとした姿をしていたが、一体だけ、とりわけ巨大なものは古代の海に生息した甲殻類のような姿をしていた。
突如として出現してたそれらに、魔獣達は猛然と襲い掛かった。
闘争本能ではなく、追い立てられた屈辱を他者に与えたいという救いがたい欲望からである。
そんな感情を湛え、瘴気の刃と光に非ずの闇の波濤を放った魔獣達の前で、それらは

光を輝かせた。
光は文字の形をしていた。

風、水、火、月、地、山、雷。

瞬間、その文字に等しい力が解き放たれた。
風は巨大な暴風を示し、共に放たれた火と水は対消滅の力となり、月は名の如く輝く極大な閃光を放ち、地は地面を轟々と揺るがした。
多様な破壊に晒される魔獣達の上空からは、峩々たる霊峰をそのまま振り落としたかのような弾幕が降り注ぎ、そして最後にそれら全ての破壊を覆い尽くすような巨大に過ぎる雷撃が魔獣達を覆った。
破壊の種類は多岐にわたり、それらが互いに力を増幅し、魔獣の頑強な肉体も瘴気の障壁も無意味となっていた。
破壊が吹き荒れる中、魔獣達はそれでも前に進んだ。
前のものは破壊されていくが、数ではこちらが有利。
押し切るしかないと踏んだのだろう。
しかしその進撃は急に停止した。

攻撃が止んだのである。
正確には攻撃は続いていた。
矛先が変わっていたのだった。
世界を埋め尽くす破壊の力は、七体の存在の上空に向けられていた。
魔獣に与えられたものよりも激しい攻撃には、それらの者達からの憎悪が感じられた。
思わず上空を見上げた魔獣達は、その姿を見た瞬間に消滅した。
それは七体の光も同様だった。
七体の存在と魔獣達の遥か上空で生じた天の文字。
輝くその文字を見せた者が放った、冥府が開いたかのような地獄の光がその場の全てを蹂躙し尽くし、飲み込んだのであった。

また別の場所でも、地獄が繰り広げられていた。
追い立てられた魔獣達の先で、巨大な姿が屹立していた。
それも人に似た姿だった。
直角の、見ようによっては積み木で構成された太く長い手足を持った巨人。

頭部からは触角の様なものが生えているのが見えた。
逞しい姿ではあるが、どこか玩具じみた姿。
そして大きいと言っても魔獣と同サイズ程度。
しかも数は一体。
天使達から逃げながらも、魔獣はそれを獲物として見た。
この時、天使達は空の彼方にいた。脇目も振らず、全速力で後退していた。
巨人が動いた。
巨体に相応しい、緩やかで重々しい動きだった。
傍らに手を伸ばし、何かを掴んで前に向ける。
それは巨大な砲だった。
構うものかと魔獣は進んだ。
巨人の顔が輝いた。
バイザーを降ろしたような眼の部分で光が流れた。
そして光が放たれた。
巨大な光の渦だと、認識できたものはいなかった。
その場の何もかもが一瞬にして消し飛ばされたからだ。
一片の破片も無く、全ては因果の彼方に連れ去られていった。

光り輝く天使がいた。
天使は細身の肉体を鎧で覆い、人に酷似した頭部から翼を生やしていた。
背中からも猛禽類の様な翼が生えている。
銀の光で覆われた姿は神々しく、天使というよりも神そのものに見えた。
その傍らにも、もう一体の神がいた。
古代の文明の守護神の様な姿をした、輝く姿が立っていた。
自らを見上げる魔獣の群れに向け、二体の神は同時に動いた。
銀色の神の背で、翼が巨大化し羽搏く。
古代の神は泰然と構え、胸の装甲を開き三つの円錐を露わとした。
そして、光で出来た口が開いた。
万物を照らす眩い光が、輝く三つの輪の連なりが放たれた。
それは、神々の歌だった。
調律と神の声が奏でる歌が世界に満ちる。
壮麗にして冷酷な光が、魔獣達に災厄となって降り注ぐ。

魔獣達は眼を開いた。
眼とは蜘蛛を模した胴体の複眼であり、騎士を模した姿の面貌の内側の眼であった。
幾度となく破壊され、殺戮された魔獣達であったが、意識は連続していた。
故にこれまでの災厄と苦痛の全ては記憶されていた。
全ての魔獣が疑問を抱いた。
魔獣は不滅ではあるが、再生が早すぎる。
しかしながら時間の経過が分からない。
一瞬前、自分たちは無数の光に飲まれた。
筆舌に尽くしがたい苦痛の後に、ここにいた。
何もかもが分からない。
あの光の者達も、想像を絶した破壊の力も何もかも。
闇で覆われた世界に蠢く無数の魔獣達。
その上空で光が生じた。
全ての魔獣が空を見た。
そして憎悪の叫びを上げた。
そこにいたのは、上空で円を描いて旋回する九体の天使。

手に槍を携え、悠然と飛行している。
それらに向け、魔獣達は叫び続ける。
この連中によって自分たちは女神に触れられず、追い立てられ、光の戦士たちによって地獄を見せられた。
ならば自分たちの報復には正当性がある。
受けた苦痛を倍どころか億倍兆倍にして返してやる。
天使を引き裂き、女神を蹂躙しこの世界を手中に収め、魔法少女達を無限の地獄へと堕としてやる。
救済など認めず、魔法少女には絶望以外のものを与えたりなどしない。
世界が生んだ憎悪の塊は、理性に非ずの本能にて自らの欲望を叫んでいた。
そんな魔獣達に対し、天使達は鰻顔を歪めて嗤っていた。
女神に抗う愚か者、という侮蔑だろうか。
天使達の動きが変化した。
旋回する内の一体が、円環を描いて回る軌道から外れて輪の中央へと移動した。
外見上は他の存在と違いはない。
ただ一点、光で構築された姿の中、首の根元あたりに特徴があった。
数字の１３が刻まれていたのである。

そこに向け、天使達は旋回を続けながら一体ずつ向かい、１３の数字を刻まれた天使へと吸い込まれていった。
それが次々と続いた。
一体、また一体と天使達は一つになっていく。
最後の一体を吸収した時、天使は巨大な球の形となっていた。
卵のような外見だった。
異常な状況に、魔獣達は硬直していた。
やがて卵に変化が生じる。
輝く表面が割れて弾ける。
内部から光が液体のように溢れ出し、巨大な滝となって滴り落ちる。
その中から、光り輝く人型がぬらりと姿を顕した。
形状としては、天使の外見に似ていた。
だがしかし、その体に翼はなく、顔の造形も変化していた。
鰻顔の原型は消え失せ、装甲で覆われた兜の形となっていた。
武者か鬼を思わせる外見と化した１３番目の存在は、呆けたように硬直する魔獣のど真ん中へと降り立った。
着地の前には、それが立つ場所が開いていた。

本能的な恐怖により、魔獣達は身を退けていたのだった。
その存在は、二本の槍を掴んでいた。
二又の巨大な槍に添えられている手は四本。
肩から伸びたものと、脇腹から生えたもの。
それらで槍を掴み、手を伸ばし切った姿勢で泰然として構えていた。
そこで魔獣の恐怖が限界に達した。
何が起きるのかを予測し、それより酷い事になると予想が去来した。
恐怖に突き動かされ、魔獣達は一斉に襲い掛かった。
その中で１３の機体は手を翻し、槍の切っ先を地面に向けた。そして黒い地面に向け、二本の槍を突き刺した。
瞬間、世界は動きを止めた。
魔獣達は宙に躍りかかった状態で動きを止め、相手を引き裂くための爪も静止した。
全てが止まった中で、１３の機体は動き続けた。
突き刺した槍を、更に深々と地面に刺していく。
地を貫いた槍の切っ先からは、光が溢れていった。
それが動かぬ魔獣達の身体を染め上げ、そして炸裂した。
魔獣を構成する瘴気が分子単位で分解され、闇が光に変えられていく。

自らの存在を全否定する光の中、魔獣達の憎悪と恐怖も、無の世界へと誘われていった。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達⑦

温かな光で満たされた広い空間の中は、喧騒に満ちていた。
とはいえ、音はない。
しかしながら動き回る者達の激しい駆動音は、幻聴となって聴くものに届いていた。
幻の音の発生源は、光で構築された複数の車両であった。
光で出来たダンプカーにショベルカー。
そしてクレーン車やホイールローダーにブルドーザーである
それらの重機によって、ダンプの荷台には山のように醜悪な物体の残骸が積み上げられていた。魔獣の残骸である。
光で出来た鋼の勇者たちの猛攻により、残骸は殆どが消滅していたが、それ以外の破壊では切り刻まれた手足の一部が残っていた。
その破壊を為した機械の獣を操る中世の者達は、今頃湯浴みの最中だろう。
後片付けはこの連中にお任せというわけである。
魔獣の残骸撤去に加え、戦場となった空間の地面に生じた裂け目には、重機たちの仲間と思しきミキサー車が光のセメントを流し込んでいた。

光の重機たちの大きさは実物と大して変わらないが、それよりも遥かに速度が速く、そして積載量や耐荷重も上だった。
重機以外にも複数の光が行き交っている。
魔獣の残骸を抱え、所定の場所に廃棄している。
奇妙なのは、抱えてからの廃棄を終えると形を変えて残骸のある場所へ移動しているということだった。
それはスポーツカーやトラックであったり、果ては戦車やＳＬ、更には戦闘機や宇宙船にしか見えない形のものもいた。
形状は様々だが、それらには共通点があった。
人型の胸や肩に、鉄仮面のような紋章を飾っているところだった。
無音だが喧騒に満ちた、鉄仮面の紋章を持つ軍勢の中心には銀色の光を放つ人型が立っていた。
曖昧な輪郭ながら、装甲で覆われた逞しい身体。
右腕には巨大な砲台が接続されている。
その砲台を指示器のように用いながら、銀色の指揮官は軍勢に指示を出していた。
重機ないしは兵器から変容する者達は指示に従い的確に動く。
その中で一体、奇妙な行動を取る者がいた。

人型の状態で魔獣の残骸を運んでいたかと思うと、突如として地面に叩き付けた。
地面に激突した魔獣の頭部は弾け飛び、複眼を千々と散らした。
そのままそれは飛び上がるや戦闘機となって飛翔。指揮官の近くで人型となり、両手を前に突き出した。
戦闘機の機銃が肩から生えており、手を突き出した事でその先端が指揮官の頭部に向けられる。
どうやら仕事が不服による異議申し立て、からの下剋上らしい。
二連の砲が向けられた時には、指揮官は右腕の大砲を放っていた。
光の一閃が戦闘機から変わった者を彼方まで吹き飛ばす。
その間、軍勢は全く動きを止めずに誰も止めず、加勢もしなかった。
恐るべき統率力と、戦闘機の個体の人望の無さである。
誰も反応すらしないところを鑑みて、これがこの軍団の日常なのだろう。

その作業風景から離れた場所で、九本の光の柱が並んでいた。
柱は十字の形を描いていた。十字架である。正確には、十字架のように突っ立っている天使達だった。
眼の無い鰻の様な顔は揃いも揃って項垂れていた。

『６０点』

天使達の脳裏にだみ声が響く。
思い出しているのであった。

『６号機と９号機は警戒心が足りない』

記憶の中の光景では、天使達は正座させられていた。
その前には、身長１５２センチ程度の少女の姿があった。
桃色の無限長の髪、白いドレス。
外見で見れば美しい。
が、どこか妙だった。
美しいが、デフォルメされた姿だった。
背中には真紅の巨大な円。
零と無限とＺを示す円環の翼が浮かんでいる。

『7、8、11号機は食事に夢中になり過ぎ』

機体名を呼ばれた個体が肩を震わせる。

少女大の存在相手に、嘗て大体同じくらいの身長の少女に想像を絶する地獄を見せた天使たちが委縮していた。

対する女神、のようなものは何故か目にサングラスをかけ、手に持ったクリップボードに挟んだ紙にペンを走らせている。

採点表なのだろう。世知辛いものである。

『5と10と12号機は大剣の扱いが雑。もっと丁寧にね』

言い方は柔らかいが、身に覚えのある点を指摘されてそれらの機体が反応する。

身長四十メートルもある巨体が、座っている事を加味しても半分程度に縮こまっているように見えた。

『で、13号機は特に言う事無し…なんだけど君、というか君らそんなこと出来たの？初耳というか初見なんだけど？ていうかこの前第13号機出たよね？あれなんだったの

？』

捲し立てる女神に似た何か。
天使達は黙ったままだった。
それ以降も女神の話は続いた。
要はダメ押しである。
そして

『私は偏屈老人のハンドメイドで、お前達は莫大な予算を掛けて国家が力の全てを掛けて建造したのだぞ？』

この一言が天使達の精神を虚無らせたのだった。
無論、反発というか突っ込みの想いはあった。
その偏屈老人は超が三つ重なるくらいの大天才であり、予算も当然と言うか潤沢であり、更にはループを利用しての建造だったので実質開発期間は無限大だったりと突っ込みどころ満載の指摘なのである。
そもそも結果的にはこの存在は、超性能の人工頭脳ではなく別の…と考えたあたりで

九体の天使は考えることをやめた。
そして嘗て行ったように、楽な体勢を取ろうとした結果が今の十字架である。
最初はその場で十字架になったが、邪魔だったので移動させられたのだった。
今作業に勤しんでいる六体の重機たち（buildron）が合体して巨人兵（devastar）となり、面倒そうに運搬し遠くに移動したのだ。
そのまま時は流れた。作業も佳境となり、軍勢は撤収準備を進めている。
叛逆を企てた愚か者は、その準備の最中にも同じような行動を起こし指揮官の徒手空拳で撃破されていた。
立ち上がろうとしたところを、強烈な踏み付けをされてノックダウンとなる。
相変わらず誰も反応しないが、指揮官の背後に立つ副官らしき存在が何かを告げていた。
右肩に砲台らしきものを備えたその個体は、曲げた左腕に猛禽類の様な光を乗せ、周囲には小型の人型二体と大型の食肉目らしき姿を従わせていた。
副官の言葉に上空を見上げると、光り輝く姿が天より舞い降りる姿があった。
美しい姿のそれは、労働に勤しむ軍勢に頭を下げた。
対する機械の軍勢の面々も同じように返した。
ここでも反抗心を露わにする愚か者は、指揮官が火砲を顔面に突き付けて無理矢理お

辞儀をさせた。底無しの愚か者なのだろう。
無限長の桃色の髪に白いドレス、広げた手の様な神々しい翼。
少女の姿をした女神は、十字架の近くに降臨していた。
認識の瞬間、天使達は十字架から平伏へと変わっていた。
身を曲げて地に伏せた者達の頭を、女神は静かに、そして丁寧に一体ずつ撫でていった。
機械の兵たちはその様子を眺めていた。
神話のような光景に、破壊と戦闘を生きる目的とする欺瞞(deceptiicons)の者達が見入っていた。
砲を退けられ、自由となった愚か者は指揮官の背後で何やら告げていた。
例によって音は無いが、恐らくは

『あの女神の統率力というか人心把握の手管は大したもんですなぁ。やっぱり老いぼれのあんたより、時代はあのように若く先見性のあるリーダーを求めてるのでしょう。どうです？あの女神にも劣らない人望と有能さを併せ持つこの俺様にニューリーダーの座を明け渡し、あんたはさっさと引退したらいかがです？』

とでも言っているのだろう。当然、即座に指揮官(megatron)の裏拳が飛来し愚か者(star scream)の顔面を

撃ち抜いた。
吹き飛ぶ前に喉が掴まれ、一本背負いの要領で地面に叩き付けられる。当然だろう。
それが現実に戻る切っ掛けとなった。
後の事は召喚者である女神に任せるとして、軍勢達は作業終了の最終チェックをし始めた。
戻ればまた対抗する勢力との戦闘が待っている。

その時、何の前触れも無く無音の世界に音が鳴り響いた。それは、全てを嘲笑うかのような哄笑だった。

番外編　聖なる女神と福音の守護天使達⑧

――――――はははははははははははははははは！

哄笑が響く。
発生源は四方八方、そして上下。
空間自体が発しているかのような声だった。
声の主は女であり、異様なほどに艶やかで、淫靡ささえ含んだ声であった。
しかしそれ以上に色濃くその声を彩っているのは、嘲りの色。
万物を蔑視し、軽視し、愚弄しきっているような声。
声が発せられた瞬間、無数の機械の兵達は動いていた。
その身に携えた火器を手に、声の発生源へと銃口を合わせていた。
前述のとおり、音は全方位から聞こえる。
しかしながら、確たる方向が分かっていた。
声を発する者の悪意。
それもブラックホールの様な、底も果ても伺えぬ深く深い悪意が、筆舌しがたい悪臭

や全てを汚染する放射性物質のように狂気的な存在感を放っているのであった。
微塵も躊躇い無く引き金が引かれ、無数の火砲が放たれた。
その瞬間だった。
軍勢の全てが、忽然と消え失せたのは。
なんの前触れも無く、発射された光の弾丸は虚空で消え失せた。
熱量も光の残滓も、全くとして残っていない。
最初から何も無かったかのようだった。

「戦争好きの機械人間どもには、故郷にお帰り頂いた」

美しい女の声が鳴る。
哄笑を構築していたものと同じ声。
声の一語一語、どころか呼吸の一つ一つが猛毒で出来ているかのような声だった。

「あの連中も面白い。変容する者を名乗ってはいるが、その実連中は何も変わらず変われない。同族同士で、思想の違いから終わりなき戦いを続けるだけだ」

光で満ちていた空間は、何時の間にか闇へと変わっていた。
空間を塗り潰した闇の中、自らが光である女神と、彼女の周囲に展開された守護天使達だけが輝いている。
光の向かい側には、形を持った闇がいた。
声はそこから発せられている。
混沌とした、流動性を持った闇が流れている。
その闇が描く輪郭は、人間に似た形をしていた。
大きさは女神よりも頭一つは大きい。
炎のように揺らめく闇であったが、輪郭の形状は人間の女のそれだった。
複数の鳥の翼を重ねたような髪型、豊満な胸の前を開いた衣装。
曖昧な形ではあったが、美しい女の姿をしていた。
美しい造形の顔は微笑み、細身の身体を前傾させた。主人に従う従者のように、丁寧な一礼を行う。

「これはこれは女神様。如何でしたかな?今回の演目は」

従者の態度で、しかし声には嘲弄が満ちている。

「魔神が並行世界より捕獲し、僕が育てた魔獣達。それを用いての魔獣狩りはいかがだったかな？」

美しい顔の鮮血色の唇が開き、その中の白い歯が見えた。

宝石のように美しく、蛆虫のように忌まわしく見える歯であった。

「あの魔神は案外に心配性だ。世界の外の存在からこの世界を守れても、世界の内側の存在には警戒を怠らない」

言葉の終わりには哄笑が放たれた。

天使達は油断せず、巨大な槍の切っ先を闇へと向けている。

「自分が一度、それで敗北したためだろうと思うと、奴の臆病さが伺えるようだ」

笑いながら闇は語り続ける。

「世界の内側から魔獣共に侵略され、この世界が崩壊する。そんな危機感を抱いているのだろう。臆病者め」

天使達の脳裏に戦慄。

あの存在を奴と呼び、挙句に愚弄できるものの存在が信じられないのだった。

「何も準備せずに唯々諾々と侵略されるよりはいいのだろうが、それにしても過剰戦力に過ぎる。一体どこへ向かっているのだろうな、この世界は」

嘲弄のままに吐き捨て、闇の女は右手を振う。

振るわれた後、闇色の繊手の先端で小さな闇の塊が浮かんだ。

虚無僧の様な姿と蜘蛛の融合体。

十数センチ程度の大きさとなった魔獣が、女の指先に浮かんでいる。

「まぁしかしながら、奴と僕には共通点が無い事も無い」

嘲弄の声色に、忌々しさが付与された。

よほど嫌っているのだろう。

「それは、この連中が嫌いだという事だ」

忌々しく、そして愛おし気な視線で女は魔獣を見つめる。
魔獣は虚無僧の貌の口を、引き裂けんばかりに開いて叫んだ。
分かるのだろう。
自らが邪悪である為に、この女の邪悪さが。
負の感情の集合体である魔獣でさえも、到底及ばない桁違いに過ぎる真の邪悪。

「なぜなら僕は君たちが、魔法少女が大好きだからだ」

艶然と、朗らかに、慈母のように、毒花の様に微笑みを湛えて混沌の闇の女が言う。

「願いという名の欲望で生まれ、戦い、傷付き、哀しみ、狂い、生きて、死んでいく君たちが大好きだ」

声には喜悦が滲んでいた。

「互いに殺し合い、憎み合い、手を取り合い、慰め合う。そして日常の何気ないストレスや悩み事、生きる為に必ず訪れる障害の一つ一つで蹴躓き、やがて磨り潰されていく」

女の口角が吊り上がる。

嘲笑の形に歪んでいく。

「そんな愚かで素晴らしい、道化で愚者な君たちが好きだ。そして君たちが延々と飽きもせずに人間ごっこを続けるこのお遊戯の世界が、僕は大好きだ」

嘲笑と慈愛が混じった表情と声で女は語る。

相反する感情と顔の造形が、全くの矛盾なく同一に存在していた。

複数の、例えるなら千の貌を持っているかのように。

「しかし、こいつらは別だ」

それが一変、或いはそのままに混沌の女は魔獣を見つめる。

「この連中がいるせいで、魔法少女の絶望はどうにも中途半端だ。興が削がれる」

小型化させた魔獣の顔に美しい顔を寄せながら女は言う。

「魔法少女と魔法少女、魔女と魔法少女。これらが殺し合うのは実に良い。その様子を見るのは実に心が躍り、安らぎ、そして笑える。だがお前達は違う」

この魔獣は、女曰くの『魔獣狩り』に用いられた魔獣の意識の集合体である。

光の戦士達に葬られ、千々と千切れた精神が回収されてより集められた存在だった。

その魔獣は、女の発する言葉が全くとして理解できていなかった。

「お前達が存在している為に、彼女らは明確な敵を得た。故に互いで殺し合う頻度は減った。戦いと、生きる目的を得てしまった」

女は嘆く。

それは子を喪った母の様な、深い悲しみに満ちていた。
理解しがたい言葉が続く。
「お前達さえいなければ、魔法少女達は救いようのない戦いの地獄の中で死に、この天国のような地獄へ導かれる」
義憤さえ感じさせる口調であった。
そしてこの世界への冒涜的な評も紡れる。
「魔法少女は戦いの中と、そしてただ生きているだけで消耗し、勝手に踊り狂って愚者としての遊戯を演じて死ぬのが最高なのに」
女は魔獣を睨む。
美しい顔が変化していた。
顔は黒々と染まり、燃え上がる炎のような三つの目と、亀裂のような形の口が開く。
「だから僕はお前達が嫌いだ。魔法少女の真の絶望を妨げ、戦いという安寧を与えるお

前達が大嫌いだ」

理不尽にして理解不能。

義憤と愛憎が入り混じる冒涜的な言葉を、混沌の闇で出来た女が吐き出し続ける。

間近でその狂気に晒される魔獣は、既に正気を失っているようだった。

絶え間なく湧き上がる魔法少女への邪な欲望さえも消え失せ、恐怖と狂気の虜と化している。

女神を守護する天使達は槍を構え続けていたが、神殺しの槍の先端が震えていた。

対峙しているこの相手が何か、天使達は理解しているのだろう。

恐らくは槍自体も。

何故なら、天使達と女神と対峙し、邪悪な言葉を吐き続けるこの存在は…。

「ふーん」

間延びしただみ声が生じた。それは女神の口から発せられていた。

悍ましい形状へと変じていた女の貌が掻き消え、元の美しい貌へと変わる。

秀麗な額には、厭わし気な渓谷が刻まれていた。
声の発生源を見た時、その姿は変わっていた。
桃色の髪に白いドレスを纏った女神ではなく、そこにはジーパンに黒シャツという、ラフな格好をした一人の女がいた。
腰まで伸びた長い髪を、頭頂で結われた黒いリボンが束ねている。
外見的な年齢は、二十代半ばといったところか。

「各々が何を思うが勝手とは思うが、相変わらず面倒な趣味というか拗らせ方をしているな。それが邪神の流儀というか生態なのか？」
「其方の趣味もあまり良いとは言えないな。それに姿を頻繁に変容させる行為は、僕を参考にでもしたのかな。そのあたりはどうなのだい？魔神よ」

女の姿をした者達が、距離を隔てて向かい合う。
闇と光。
永劫に相容れない存在同士の対峙であった。

特別編　世の果ての宴①

音と光、騒音に談笑。

グラスが合わせられ、液体が飲み干される。

大きなテーブルの上には大皿が並び、その上には色とりどりの料理が乗せられ、芳醇な香りを惜しみなく空気に漂わせる。

居並ぶのは輝く瑞々しさを湛えた果物にも劣らない、色鮮やかな衣装を纏った少女達。

ここは円環の理。

魔法少女が行き着く安寧の地であり、ここでは今、地平線の果てまで続く一大パーティーが繰り広げられていた。

「てぇなわけでなァ…私の機械獣…ガラダの強さったらよォ……」

所狭しと並ぶ白いテーブルの一つで、黒いフードを被った銀髪の少女が座席に座りつつくだを巻いていた。

普段のカラス然とした仮面は外され、テーブルの上に置かれている。
その周囲には空になった酒瓶が並び、或いは倒れてテーブルクロスの上に葡萄色の滴りを付けている。
イングランド出身の王族魔法少女の一人、コルボーである。
今彼女の周囲には誰もおらず、彼女の謎話を聞くものは誰もいない。
椅子の並びやソースが付いた皿などの配置から、数分前にはいたのだろうが隙を見て逃げたものと思われる。
よく見れば遠くで彼女の姉妹や従者、そして母親らしき連中が何やら騒いでいる様子が見えた。

「ふふっ、ま、愉しめばいいさぁ…」

その様子を特に不満にも思わず、魔法少女一家の長女は酒杯を傾けた。
芳醇な葡萄の香りと強いアルコールが嚥下され、胃が燃えるように熱くなる。
そして酩酊感が意識に漂う。
肉体的には毒物でもあるアルコールに対する不快感は殆どない。
あったとしても任意で消したり感じたりできる。

魔法少女は元々肉体という枷から外れた存在であったが、魂になって導かれてからは更に便利になっていた。

「おぉぉうい、そこのウェイターさん？お代わりをくれよぉぉ…」

コルボーの視線は上に向いていた。
上昇は首が直角近くになるまで続いた。
ウェイターと彼女は言った。
彼女の視線の先にいるのは、光り輝く巨体。
ええと、これなんて言ったっけ。
アルコールで酔った脳でコルボーは知識を漁った。
多分違うだろなと思いつつ、近い例を一つ挙げた。

「ドラゴン」
「ティラノサウルスだ」
「おぉっ!?」

思わず仰け反り、変な声を上げるコルボー。
その隣の席では、黒いシャツに青いジーンズを履いた、彼女よりも幾らか年上に見える一人の赤い髪の女が座っていた。
外見のモチーフは佐倉杏子。
然してその実態は。

「驚かすなよぉお…ヒトが悪いねぇえ、神サマァァァ…」
「魔神であるからな、偶には悪い事もするのだ。ああ、待たせて済まない」

アバター姿となっている魔神も上を見上げた。
ティラノサウルスと魔神は言った。
その通りの存在がそこにいた。
光り輝く曖昧な輪郭ではあったが、頑強な顎と強靭な胴体と尾。
直立歩行をしていたが、太古の地球の覇者に相応しい威風堂々とした姿であった。
ただ、その太い首から爪を生やした足までに至るまでの前面を、エプロンらしきもので覆って首にはネクタイが巻かれているところが奇妙だった。
奇妙だったが、妙に似合っていた。

だからコルボーもこの存在をウェイターと認識できたのだった。
全体的な巨大さに似合わない、愛くるしいとさえ思える小さな腕と手の上には、酒瓶を並べたお盆が乗せられている。
巨体に相応しいサイズのお盆の上には当然、多数の酒瓶が乗っている。
少し迷って、

「それら一式をいただこう」

と魔神は告げた。
光で出来たティラノサウルスは口を開いて牙を見せ、数度口を開閉させた。

「相変わらず好感の持てる態度である」

何を言っているのか、魔神には分かっているようだ。
音としても聞こえているに違いない。

「神サマ、通訳希望」

早速新しい酒を口に含んでコルボーは尋ねる。
神を相手に不遜な言い方をするのに、酒の力が欲しくなったのだった。

「名乗りの後に、『おれ、おさけおく。めがみさまのおたんじょうびかい、そのおまつりてつだえるのたのしい』」
「随分と可愛らしい言葉遣いだなァ」
「しかし彼は強いぞ。客観的な視点だが、数体の機械獣相手でも互角以上に立ち回れる」
「へぇ…いつかお手合わせ願いたいもんだ」

ウェイターに励む機械のティラノサウルスの背を見てコルボーは言った。
眼には闘志の炎が揺らめいたがすぐ消えた。酒や飲料水が虚空から出現して即座に補充され、彼はまた別の場所へと歩いていった。
ユーモラスな様子にコルボーの闘志も和らぎ、

「頑張りなァ」

というエールを自然に口が紡いでいた。
甘くなったもんだと思いながら新しい酒を飲む。
飲みながら周囲を確認する。
飲食をしつつ歓談する魔法少女達に混じって、光で出来た者達が会場の給仕を行っていた。
大体は等身大であり、先程のティラノサウルスは例外だった。
数でみると、トダーと呼ばれる存在がかなりの数を占めている。
説明は何度か聞いたが、どうにも不可解な存在に思えてならない光の存在だった。
その中、トダーとは異なる数体にコルボーの眼が吸い付いた。

「ありゃなんだい？神サマ」
「ああ、あれらか」

イングランド魔法少女の視線の先には、四体の光があった。
蛇のような胴体をしたもの、横長の口らしきものをもったもの、逆に縦長のもの、その二つを合わせたような造形のもの。
それらが如何にもメカっぽい形の手を用いて料理や飲み物の補充をしている。

よく観察してみると、この連中もまた周囲の魔法少女の様子を見ているようだった。

「見て、触れて、探し、集める。それが彼らの役目だ。新しい外見と新しい言葉をもっと知りたいのだろう」

「勤勉なこった。どこから来たやつらだい？」

「深淵、アビスと呼ばれる大穴だ」

「ああ、あの地獄か」

呟いたコルボーは僅かに首筋を伸ばした。

聞いていた話を思い出し、微かだが怖気を覚えたのだ。

深淵、または地獄を意味するその場所は、魔法少女をして異常な環境としか思えなかった。

そこでふと疑問を感じた。

「そういえば、そこから来てるって言うのが一体いたな。あの可愛らしいのは来てないのか？」

「彼は性能が高すぎて、これだけの数の魔法少女を見ると刺激に耐えられないのだ」

「なるほどねぇ。そいつにとっては、ここは天国過ぎて地獄になるのか」

ケラケラと笑いながら早速一本の酒瓶を空にし、コルボーは二本目を探した。

「注ごう」

その前に酒瓶が向けられていた。

コルボーの呼吸が途絶する。

心臓が高鳴る。

こんな高揚は、戦場でも中々味わったことが無い。

「神が」

ごく短い言葉を、彼女はかなりの時間を掛けて呟いた。

唇は震えていた。

「私に、酒を、注ぐと」

「うむ」

魔神の口調は平然としている。

畏敬か畏怖か、硬直しているコルボーを他所に魔神は彼女が握る杯を酒で満たした。

「まだまだ宴は終わらず、先は長い。我らが神の生誕を祝おうではないか」

魔神はそう言い、手に持った酒杯をコルボーのそれと合わせてかちんと鳴らせた。

世の果てで繰り広げられる生誕の宴は、魔神が告げた通り終わりの兆しをまだ微塵も見せてはいない。

特別編　世の果ての宴②

無数の魔法少女が談笑し合い、飲食を共にする広大な宴会場には音楽も満ちていた。
厳かなクラシック音楽と、それと相反する激しい熱量を持ったロックな曲。
相反する二つの曲調であったが、音同士は互いに曲の邪魔をせずに場には調和がもたらされていた。
だがその反面、二つの音はどこか争っているような雰囲気があった。
それらの発生源は光り輝く物体だった。
例によって曖昧な輪郭だが、共にラジオカセットの形をしていた。
音が流れる会場を横切る影。
その影もまた光であった。
数は三つ。
魔法少女達がいない場所を選んで着地したのは、三機の戦闘機。
形状は同じだが光の濃淡が異なっており、それによって見分けが付いていた。
三機は滑らかな動きで形を変えた。
機首が前に畳まれ、機種の断面から兜を被った人間のような頭部が顕れ、機尾が脚へ

と変形する。
三機の戦闘機は三体の巨人の姿へと瞬く間に形を変えていた。
三体の内の一体は他二体よりも前に出ていた。指揮官ということなのだろう。
背後の二機は黒と青であり、指揮官に相当する存在は白い光で出来ていた。
戦闘機の翼を背にした巨人は手に大きな銀盆を乗せていた。
嗅覚に鋭い魔法少女の何人かは、そこに乗せられているのが焼きたてのクッキーであると気付いていただろう。

「何故だ」

その様子を酒を飲みながら、離れた卓に座るコルボーは疑問を呟いた。当然だろう。
しかし彼女の考えに反して、巨人たちは身を屈めて魔法少女達が席を囲むテーブルへとクッキーが満載された皿を置いた。
白い個体は妙にフレンドリーな様子で、黒の個体はその様子を訝しんでいる様子を見せ、青の個体は淡々としていた。地味とも言う。

「なァ神様ァ…あの連中は何度か見てるけど、なんて連中だっけ？」

「ジェットロン達だ。白いのがスタスク、黒いのがスカワ、青がサンクラという」

略称だな、とコルボーは思った。

観察していると、どうやらスタスクと呼ばれた個体が演説らしきものをしているように見えた。

音は聞こえないが、何かを熱心に語っている。

「神サマ。通訳頼めるかい？」

「『あの老いぼれのメガトロンは口先ばっかで何もしねぇが、俺様はこうやって焼き菓子も作れるんだぜ！こうしてこのお嬢さんらに俺様の優秀さをアピールすりゃあ、あの魔神の覚えもいいってもんだ！そして準備が整ったらこの俺様がニューリーダーになってやるのさ！ハーッハッハッハッハッハ！』」

「造反を企ててるのは分かるが…それを大声で言うって愚か者にも程があるんじゃねえかなァ」

「私もそう思う」

コルボーは呆れ、魔神も同意した。

そういえばスタスクとは愚か者を意味する言葉でもあると、以前何処かで聞いた覚えがあった。
酒杯を傾けて飲み干し、再び見ると演説を続けるスタスクの背後の一体、スカワと呼ばれた存在が消えていた。サンクラは相変わらず特に無関心そうに立っている。
何処に行ったと軽く見渡す。巨体故にすぐ見つかった。
その状況にコルボーは思わず首を傾げた。
優雅なクラシック音楽を流す光のカセットプレイヤー、そこの近くにスカワが立っているのである。
よく見ればカセットプレイヤーに話し掛けているように見える。
一体何が、と思っていると異変が生じた。
カセットプレイヤーもまた変形し、人型へと変容したのだった。
元の大きさは人間が手で持ち運べる大きさだったが、一気に他の個体と変わらないサイズに巨大化していた。

「大きさの概念が捨て去られてるな」
「全くだ。物理法則もあったものではない」
「あんたが言うなよォ」

突っ込みつつコルボーはプレイヤーが変形した個体を観察した。
重装甲風の外見で、元はカセットの収納場所を担当していた胸部には鉄仮面のような紋章が見えた。
その形はどことなく、この存在の顔に似ている。モチーフとしたのかもしれない。

「偉そうだな」
「実際偉い。彼の役職は情報参謀だ」
「情報は大事だからなァ。私達が戦争してた時も、もっと活用しときゃよかったよ」

感慨深げにごちるコルボー。
視線の先では、報告を終えたスカワの姿が霞んでいた。
そして次の瞬間にはスタスクの背後に移動していた。

「瞬間移動、要はワープが彼の特技だ」
「なんとなく元の名前が分かったなァ。で、サンクラってのの特技は？」

コルボーはスタスクの事を聞かなかった。愚か者というのが特技だと思っているようだ。

「腕からの火炎放射、また音響兵器を備えている」

「地味だな」

「それが個性だ」

魔神とコルボがーがやり取りをする中、情報参謀とされた存在は左腕を上げて自身の右肩を人差し指で突いた。そこにスイッチがあったらしく、胸部装甲が前に向けて傾き開いた。

「『コンドル、射出（イジェークト）』」

コンドルとは即ち猛禽類である。

胸から射出されたのは元がカセットプレイヤーであるように、当然の如くカセットテープだった。

それが空中で変形。

雄々しい翼と鋭利な嘴（レーザービーク）を備えたコンドルへと姿を変えた。
大きさは主の腕に乗るぐらいであり、決して大きくはない。人間とさほど変わらないサイズである。
だがコルボーはその存在を侮る気にはならなかった。

「あれは……強いな」
「流石、慧眼である」

コルボーは呻き、魔神は彼女の勘の鋭さに敬意を表した。
主からの命を受け、コンドルと呼ばれた存在は飛翔した。
相も変わらずスタスクは演説を続けている。
話術は巧みなのか、周囲の魔法少女達へのウケは良かった。
いつも人形然としていて、何を考えているか分からない銀髪魔法少女も、ボディスーツ風の衣装を纏った相棒を隣にしつつ話に聞き入っている。スタスクのファンなのだろうか。

『カガミとか言ったな！少しは人生をエンジョイしてるか？俺様は向上心の塊だから

な、何事も一番じゃねえと気が済まねぇのさ！だから退屈だってんならいつでも呼びな。この俺様の人生観をご教授してやるぜ！』

魔神の通訳はそれであったが、言われた本人はスタスクの言葉が理解できているらしく小さく頷いていた。

滅茶苦茶な言い様であったが、案外少女としてはこの存在の生き方を参考にしようとしているのかもしれない。確かに刺激のある人生を送れそうだなと。

スタスクの性格は問題だらけだが、自分のファンは大事にするのだろう。

と、このあたりで背後にコンドルが到着していた。

次の事態を察し、魔法少女達は後退し始めた。

便利な事に、椅子やテーブルも無振動で安全圏へと下がっていく。

スタスクが振り返った瞬間、コンドルの眼が輝いた。照射された光が胴体に着弾し、光の巨人が転倒。

仰向けに倒れて動かなくなったスタスクの足を両脚の爪で掴み、コンドルは飛翔していった。

その後を追うように、三体の機械の巨人たちが飛んでいく。

人型でも問題なく飛行が可能らしい。

その様子を魔法少女達が手を振って見送っていた。
巨人たちも振り返って手を振っていた。サービス精神に溢れた連中である。
恐らくまたこいつが反乱を企てていると、自分達を束ねる長の元へと連れて行くのだろう。
記憶を辿ると、トップの役職は『破壊大帝』であると思い出せた。
実に強そうだと、コルボーはその役職名を気に入った。

「そういやぁ、なんであの連中はクッキー持ってきたんだ？」

コルボーは尤もな事を口にした。

「スタスクは日常的に反乱を起こすが、何故処刑されないのかについて『こいつが作るクッキーがとても美味しいから』という冗談があってな」
「うん。突っ込みどころしかねぇ」
「それを本人に言ったら何かに火が付いたらしく菓子作りに夢中になってしまった。元は科学者だから、そういうのも得意なのだろう」
「ふぅん」

気のない返事であったが、言い終えるとコルボーは一気に酒を煽った。
頭の中の情報を整理することを諦め、アルコールの酩酊感で打ち消そうとしたのだった。
結果は、この非現実じみた現実のカオスさの勝利となった。
そして彼女は揺れる視界の中、更に奇妙なものを見た。

特別編　世の果ての宴③

酒による酩酊感で揺れる視界。
円環の理の中で繰り広げられる光景が変化し、コルボーの周囲の景色が一変していく。
瞬く間に、彼女の周囲には闇の帳が降りていた。
そこは広大な空間だった。
そしてそのあちこちに、建造物に等しいサイズの物体が並んでいる。
それは金属の台であり、様々な調度品を収めた棚であった。
広大な空間は、物語に出てくる巨人が住まう家の内部に思えた。
だが、並ぶ品々は生活のためのものでは無い事が一目で分かった。
高い天井から垂れた鎖は禍々しい棘で覆われ、末端には鉤爪が付いている。
鎖付きの鉤爪は何十本も垂れ下がり、爪には何かの破片がこびり付き、鎖の棘は得体のしれない粘液のような光沢で濡れている。
壁には巨大な鋸や釘にハンマーが立て掛けられ、これらも破片や粘液を付着させていた。何に使われたのか、コルボーには察しが付いた。

「拷問か」

彼女が言い終えた時、不愉快な音が彼女の耳朶を打った。
巨大な台の上には、これも巨大な存在、生物のような何かが横たわっている。

『では質問を再開だ。これを見ろ』

闇の奥から、その声は響いた。
物静かで落ち着いた、男性然とした声。コルボーはその言葉をそう認識した。
その瞬間、彼女の背に怖気が奔った。
その声は、数多の次元から円環の理に導かれて人格を統合された、百戦錬磨の狂戦士さえも怯えさせたのだった。
声の主は、闇の奥から台の元へゆっくりと近付いて来た。

「こ」

コルボーは声を絞り出した。

「こいつは……」

無限に等しい戦闘経験と人間の悪意と殺意、憎悪に身を浸してきたコルボーでさえ、その存在を異常と感じた。

それは、彼女らの生きていた時代の存在を例えにすれば城塞や塔を思わせる高さの身長を持った、光で形成された巨人だった。

メートルに直せば、十メートルを超えているだろう。

確かに大きいが、これよりも巨大な存在は幾らでもいる。

例えば機械獣ならば三十メートルが基本サイズであるし、女神の護衛の天使達は四十メートル以上の体躯がある。

この世界に住まう終焉の魔神に至っては、大きさの概念が無意味と化すほどに巨大化できる。

コルボーが言葉を喪ったのは、光で形成された巨人から異様な気配を感じたからである。

『ふむ、このままでは億劫だな』

光の巨人が台の上へと顔を覗き込んだ。兜で覆われたような頭部には、人間の顔に似た造形が伺えた。

長く通った鼻筋と厚めの唇の形が光によって曖昧ではあるが形作られている。

カリグラ、という古の皇帝の名前がコルボーの脳裏に浮かぶ。

その彫像の顔が、どこか似ていると思ったのだった。

『これでよし』

伸ばされた巨大な手が台の上の存在を掴み、引き上げた。

それは、襤褸を纏った骸骨を思わせる異形。

救済された筈の世界に救う世界の歪みである、『魔獣』と呼ばれる存在だった。

その異形を、この巨人は軽々しく扱っていた。

魔獣は抵抗しない。出来なかったからである。

その魔獣の手足は根元からもぎ取られ、ほぼ全ての「肉」に当る部分が削げ落されていたからだ。

残るは皮と骨と、弱弱しく鼓動を続ける臓器のみである。
その魔獣へ、巨人は一枚の絵を見せた。
巨人のサイズなので、それもまた小屋の床のように広い。
その一面には、並んで立つ二体の人型が映っていた。

『では質問。どちらがスタースクリームだ?そしてどちらがサンダークラッカーでスカイワープだ?或いはアシッドストームでホットリンクかビットストームか?』

巨人が魔獣に尋ねた。
理不尽な問い掛けであった。何故ならそこに移った二体は、寸分たがわず同じ外見をしているからだ。

『五秒待つ、述べよ』

魔獣は動けない。舌や声帯に当る器官は既に千切り取られている。
取り出されたり抉り出された部分は、台の空いた部分や地面に雑に積み上げられている。

その数は膨大であり、一体二体分では無かった。つまりこれは、夥しい数の魔獣に対して行われていたということになる。

『時間切れだ。では罰ゲームといこう』

時間切れと言ったが、この言葉は述べよといった直後のものだ。最初から答えなど聞く気はないのだろう。

『因みに答えだが、俺も知らないしどうでもいい』

本人も実際にそう告げたことからして、先の質問は単なる悪ふざけである。

『よく見ておくといい』

巨人がそう言った。だがそれは、コルボーに対してのものではない。

巨人は彼女を認識しておらず、今のコルボーは空間で繰り広げられる状況を観測する、いわば読者のような立場に過ぎなかった。

『獣という割には人型だが、この魔獣という存在の内部構造や性質は面白い』

光の手が魔獣の臓物を撫でる。異形ながら生き物らしく脈打ち、触れられた事への苦痛と恐怖に震えていた。

『この形状は大別したパターンＦの１２５分類に当る。ああ、細かい数字は気にしなくていい。これは俺の趣味と』

巨人はそこで言葉を区切った。言いにくそうだった。

『あの魔神からの依頼だ』

苦々しく、巨人は言う。

言いながらも手は動き、魔獣の臓物を指先で摘む。

巨人の指先、というより人間でいう指の腹からは鋭角が飛び出ていた。

それは針であり、ドリルであった。当然、魔獣の内臓はそれに突き刺され、体液であ

る瘴気が漏れ出した。
全く気にせず、巨人は手を左右に引いた。内臓が弾け、正気の血飛沫が飛ぶ。
巨人はそれを避けようともしなかった。
そして飛散したそれを、銀の盾が弾いた。台の上に、盾を構えた人影があった。
縦長の盾は人の身長よりも大きく、人間の眼の位置には隙間があった。
その隙間から、盾を構えた者は作業を見ている。
緑髪をした、軽装ではあるが鎧を模した衣装を纏った少女であった。
盾を構えながら、背もたれに奇怪な形状の突起を幾つも生やした、奇怪な椅子に座っている。

『見学者がいるのだぞ。もっと気の利いた事は言えないのか?』

手を躍らせながら巨人は言う。針が内臓を貫き、ドリルが繊細な器官を無惨に破壊する。
魔獣の声にならない悲鳴を聞いて、巨人は溜息をついた。

『叫び声は退屈だな。もっと練習しろ』

言いながらも臓器をこね回し続ける。
言葉の通り、巨人は退屈そうだった。

『しかし貴女は良い趣味をしている。俺の趣味を理解し、技術を学んでくれるのならこれほどうれしい事も無い』

広げた五指で複数の内臓を掴み、握り潰しながら巨人は告げた。
魔獣に対する態度とは真逆に、声は穏やかだった。
それが、コルボーには恐ろしかった。
装甲を纏った外見に人間に酷似した姿、機械でありながら備わった思考。
円環の理でよく見かける，異世界の住人の一つ。
セイバートロン人、通称トランスフォーマーと呼ばれる連中の一体に違いなかった。
聞いた話では数百万年にも渡って同族同士で絶えず戦争を繰り返してきた種族の一体。
考えただけで頭がおかしくなりそうな時間であり、それは戦争を楽しんでいたコルボーとしても理解不能としか思えなかった。

そんな連中の中でも、この存在は異常に思えた。
凝り固まった殺意と嗜虐心の塊でありながら、その思考に囚われていない。
金属生命体であり、魂であるスパークは故郷の星の中枢から発生するセイバートロン人に性別は無意味だが、仮にこれを彼とするのならば彼が魔獣に加える拷問を見せる相手である彼女への態度は真摯な紳士であった。

『さて、では次はあの連中の見学だったな。行き方は空か陸か、どちらがいい？』

魔獣の肉体、既に胴体も顔も丸められ、肉団子然とされた物体を捏ね回しながら巨人が尋ねる。
死なせずに苦痛を引き出し続けるやり方を熟知しているようで、魔獣は死ぬに死ねずに苦しみ続ける。
盾の隙間からの視線は下へと動いた。良い選択だ、と巨人は返した。

『トランスフォーム』

言葉が告げられるのと、魔獣が放り投げられる事、そして言葉の意味である『変容』が

完了したのは完全に同時だった。
巨人の上半身と下半身が分離する。上は光の爆撃機、下は重戦車へと形を変えた。
放り投げられた魔獣が、何かに激突したのは、少女を乗せた戦車が爆撃機を引き攣れて彼方へと走り去った時だった。
そこには原型を留めぬほどに破壊され、拷問され尽くされた魔獣達の山が出来ていた。
山というのは比喩ではなく、文字通りの死山血河が形成されている。
今もそこに新たな一つが加わったに過ぎなかった。損壊されても死にきれない魔獣達からは黒々とした瘴気が湧き上がっている。
それは上へと昇り、そしてある一点へと漏斗状に向かい、どこかに吸い込まれていった。

特別編　世の果ての宴④

『あれを見たまえ』

光で出来た重戦車が意思の声を発する。
その声を、重戦車の操縦室に座す緑髪の魔法少女が聞いていた。
巨大な盾で前面を覆ってはいたが、盾の隙間からは緑色の眼が見えた。
その眼は、興味に輝いているように見えた。

『有機生命体と異なり数百万年…他種族から見れば実質無限に生きられる我々だが、正直その精神性は年齢に見合っていないと思っている』

声は嘆きを帯びているようだった。

『その一例があれだ。ホモサピエンスの言葉で言えば『ダメな大人』というのだろうな』

操縦席の画面が拡大され、言葉の対象が映し出される。
緑髪の少女の背後で、コルボーもそれを見ていた。
今の彼女は意識体であり、物理的な制約を受けずにいた。

「……あー……これは、また」

意識体のコルボーが声を出した。誰もそれを感知せず、これは彼女の独り言だった。
見た光景に付いて、一言言わなければ気が済まなかったのだ。

「ひっでぇなぁ……」

無数の世界線で陰惨な戦争を経験し、その全てを楽しんできたコルボーであったが、
映し出されている光景の感想は苦々しい響きとなっていた。
荒涼とした大地には、無数の手足が転がっている。
巨大だが、骨と皮だけで構成されたそれは考えるまでも無く魔獣のものである。
当の魔獣はといえば、率直に言えば酷い目に遭っていた。
例えば。

「…溶鉱炉に……破砕機か」

二体の巨大な人型が見えた。

小柄な個体でも三メートルはあるサイバートロン人の中でも、群を抜いてその二体は大きかった。

可能性の光として異世界から召喚されたその二体が備えている機能は、コルボーが告げた通りである。

それぞれが、胴体にそれを備えていた。

溶鉱炉と、破砕機。

液状化した何かが飛沫を上げる光のガラスの中で、何かが蠢く。

内側から外側へと逃げようとするが、ガラスによって阻まれる。それは、絶叫を上げる亡者の貌。魔獣である。

内部に閉じ込められた魔獣は一体や二体ではなく、一体の激突に続いて後から後から大量に続いた。

ガラスの一面は、絶叫を上げる魔獣の顔で埋め尽くされた。

手足を捩がれた魔獣は胴体で跳ねて、他者を押し退けて必死になって溶鉱炉の中から

の逃避を図る。
だが障壁はビクともせず、容赦ない熱が魔獣を襲う。
開いた口内の舌や歯、歯茎に唇、そして外皮が溶解していく。
魔獣に備わった再生能力が、喪失した部分を治していくがそれを高熱が打ち消し肉体を破壊する。
だがそのバランスは再生能力を破壊が僅かに上回る程度であった。
決して殺さないように、そして苦痛を出来るだけ長く苦しくさせるための火加減が保たれている。
それと並行し、溶鉱炉を胴体に持つその個体は繊細な作業を行っていた。
巨大な腕から伸びた巨大な手、それに備わった指は平均的なサイバートロン人の胴体ほどの太さがあった。
そんな太く巨大な指を用いて、その個体は魔獣の頭部を潰さないように外皮と骨を取り外して脳に当る部分を露出させ、柔らかい脳を壊さぬように親指と人差し指でそっと摘む。
神経を切らないように細心の注意を払って脳を引き摺り出すと、魔獣の口の中へと脳を押し込んだ。
殺さずにこの作業を完遂できたことに満足しつつ、溶鉱炉の個体は次の者へと取り掛

かった。
彼の足元には、上半身だけを残して破壊された、魔獣達が大量に転がっている。
その生産元は溶鉱炉に匹敵する巨体の持ち主、胴体に破砕機を持つ個体であった。
車輪が変形したと思しき逞しい肩からは、マジックハンド然とした腕が伸びている。
それが魔獣を捕獲し、胴体へと導いていく。
轟音を上げて回転する光の破砕機へと、魔獣の足が吸い込まれる。
上がる絶叫を意に介さずに、腰まで一気に押し込まれた。
破壊された部分は、巨体の背後から排出されて破片が放射状に飛び散っていく。
胸に入ったあたりで引き抜かれ、マジックハンドが開いて魔獣を投げ落とした。
地面を転がり、溶鉱炉の元へと辿り着く。
溶鉱炉はそれを新たな材料とし、また脳髄を抉り出して本人の口に押し込む残忍なオブジェを作っていく。
破砕機はと言えば、バツの字を描いた装飾が施された顔の下の口を開いて欠伸をしていた。
欠伸が終わり、投げ捨てられた魔獣は腰から下が、次の個体は膝から下が破壊されている。
観察をすれば、破壊作業中に行った欠伸の時点で破壊が中断されているのが分かるだ

ろう。
いい加減、というより飽きっぽい性格なのだろうか。
足だけを破壊された魔獣が、傷口を大地に擦り付け肉片と瘴気の血糊を垂らしながら逃げようとして地を這う。進んだ先に、細身の人型が立っていた。
体格は、先の二体が巨体であっただけに殊更に細身で小柄に見えた。
手の先端は鋭い爪となっており、頭部にも二本の角が。背中からは細長い柱が生え、天を向いて垂直に伸びている。
細身な体格や鋭い目つきと相俟って、全体的に刺々しい印象を与える個体だった。
倒れた魔獣の首根っこを掴んで引き上げ、直後に落とす。
膝が半ばから折れ、強制的に正座を強要される魔獣。
苦痛の叫びを上げるが、細身の個体は気にもせずに両手を己の顔に添えた。
眼のすぐ隣を人差し指が推すと、カチリという音が鳴った。
手を添えたままに手が前に動く。
仮面のように顔が外れた、と見えた時に

『我がァ』

そんな声をコルボーは聞いた。
覚えたての言葉を喋る幼子。そんな声に思えた。
「…全く…便利だなぁ……金属生命体って連中は……」
外れた顔が裏返しにされるのを見て、彼女は呟いた。
『我がァ、顔ヲ、被れェ』
外された顔の裏側には、無数の針が生えていた。
大小様々で、螺旋が描かれた針と棘。
たどたどしい発音が放たれた直後、それが魔獣の顔に押し付けられた。
顔の淵に沿って魔獣の体液である瘴気が噴き出し、当然のように魔獣は暴れた。
だが頭を掴まれて身じろぎしかできず、棘だらけの顔がぐりぐりと押し付けられる。
しばらくすると、魔獣は抵抗をやめた。
顔を外し、眼のあった位置に丸い窪みが出来ているだけの無貌の顔を傾げると、魔獣から棘付きの顔を外し魔獣を放り投げた。

魔獣の顔は、言うまでも無く原型を全く残さないほどに破壊されていた。
そしてすぐさま別の個体にも同じ処置を繰り返していく。

『連中は俺と同軍の懲罰部隊の連中だが、別の場所に来ても真面目に過ぎる』

魔獣への拷問を繰り返す三体を、魔法少女が乗る重戦車はそう評した。

『自分達を拾ってくれた女神と魔神へ忠誠心を示すためと恩義なのは分かるが、魔獣共の拷問はもっと楽しく健康的に、そして遊び心を持って創意工夫しながら行うべきだ。それが出来ないとは、仕事とプライベートを切り離せない憐れな連中だ』

声には憐れみさえあった。それを聞く緑髪少女の視線も寂寥感を帯びていた。
なんか違くね、とコルボーは思った。

『その最たる例があれだ。反面教師としてよく見ておくと今後の人生が豊かになれるかもしれない』

声が告げ、対象の映像を映す。
画面に映った瞬間、映像と共に音が拾われた。
それは美しい音に聞こえた。
神韻縹渺たる、美しい二つの笛の音に。

特別編　世の果ての宴⑤

交わした約束は忘れない、押し寄せる闇も恐れず未来へ進む。
残酷な運命に抗い、希望を求めて為すべき事を為すという強い意思を歌詞とした歌だった。
歌は声ではなく、笛による音で紡がれていた。

『美しい歌なのは確かで音色も見事だが、奏者が気に喰わないところが個人的には残念だ』

重戦車は淡々と語る。操縦席の緑髪少女は音色に聞き惚れている。
意識体のコルボーも聞き入っていたが、画面に映る光景の方が気になって仕方なかった。
そこには光で出来た人型がいた。
大きさは溶鉱炉と破砕機よりは小さいが、十二分に大柄な体躯をしていた。
刺々しい鉄仮面の貌。それは所属する陣営を模した造形であった。

美しい音色は、その禍々しい顔から発せられていた。
仮面の口に当てられているのは、横に二本が連ねられた笛に見えた。
そして事実として、音はそこから発せられているのだった。
二連の笛が仮面から離れた。音も止まる。
巨体は身を屈めた。画面もそこをズームする。
人間の感覚では小屋、この連中なら掌サイズと言った大きさの立方体が置かれていた。

「大分上達したのでございます！」
「うん！これなら演奏会にも間に合いそう！」
「ねー」
「ねー」

立方体からは光で作られた二人の少女が浮かび上がっていた。
可能性の光ではなく、遠距離通信用の立体映像である。
立方体は人間でいう携帯電話のようなものだろう。
双子と思しき二人の少女も笛を持っていた。となると、行われていたのは少女二人を

コーチとした笛の練習であったのか。
鉄仮面の個体は感謝を示すように頭を下げた。二人もまた「ごきげんようでございます」「ばいばーい」と言って手を振り、映像が消えた。
消えた後も、その鉄仮面はその体勢をしばし維持していた。別れを惜しんでいるようだった。
動いたとき、鉄仮面の視線はモニターに向けられていた。立ち上がって歩き出す。
数歩踏み出すと、地面の上で何かが潰れた。瘴気が上がり、次いで悲鳴が上がる。
潰れたのは魔獣の腹であり、逆流した臓物が口から溢れた。
次にはその口が潰れ、悲鳴が強制遮断させられた。そこも踏み潰されたのである。
一つの悲鳴は消えたが、それが絶えることは無かった。
鉄仮面が歩く先々で魔獣は転がっており、被害者に不足しなかったからだ。
それを見るコルボーは疑問を覚えた。魔獣達は四肢があり、目立った外傷も見当たらない。
だが魔獣達は揃って亡者の顔に苦悶浮かべ、口からは舌を出して苦しみ細い腕で身を抱き指で身体を掻き毟っている。

『毒か？』

コルボーは疑問を口にする。謎は解けないままに鉄仮面はモニターの前に迫っていた。

仮面に穿たれた二つの孔から覗く眼が、少女が乗る重戦車を見降ろしている。

『女神様は仰られた。「こんなの絶対おかしいよ」』

鉄仮面はそんな意思を発した。「は？」とコルボーは思った。

『ついに狂ったか、ターン』

『黙れオーバーロード。今のは貴様のような存在に対しての挨拶だ』

『ほう。その心は』

『貴様がこの世にいる事、それ自体が冗談だ』

『敬意を表してだとは思うが、有機生命体の幼年個体の発言を引用するのはどうかと思うのだが』

『残虐趣味に加えて差別主義者か。一言ごとに貴様を殺す理由が出てくるな』

会話になっていない会話を繰り広げる二体であった。
その間に盾持ちの少女は操縦席から抜け出していた。
モニターには『長くなりそうだから出ていた方がいい』と文字が綴られていた。
少女は頷き、側面に開いた扉から機外へと出た。何故か、今まで座っていた椅子を外して持ち出していた。

『トランスフォーム』

少女が機外に出て、十分に距離が取れた時に重戦車はそう言った。
上空に待機していた爆撃機が降下と共に変形し、重戦車も形を変える。
爆撃機が上半身、重戦車が脚部へと変形し鎧を纏ったような人型へと合体する。
複雑な工程が経られているのに、合体に要した時間は人間が瞬きをするのに生じる時間の更に数十分の一程度だった。

『何故態々言う？』
『その問い掛けはお前が孤独ということの証明だ。少しは他人の視線を意識しろ』
『分かりにくい』

『ファンサービスだ』

爆撃機と重戦車の合体個体、オーバーロードには返答せずに笛を吹いていた個体、ターンは脇を通って身を屈めた。

『ようこそＤＪＤへ！ゆっくり見学されていくといい』

盾持つ少女へと可能な限り目線を近付けてそう言った。

翳された手の先では、他の個体たちが魔獣に拷問を加え続けていた。

溶鉱炉には更に魔獣が投入され、魔獣達は溶かされながら泣き叫ぶ。

破砕機が纏めて数体の魔獣を飲み込み、首だけを残して砕かれる。

細身の個体が魔獣を殴り倒し、四肢を蹴り砕いてから顔を外し、外された顔の裏面に生え揃った棘を魔獣の顔に被せぐちゃぐちゃに破壊する。

空想の地獄ではなく、実体としての地獄が顕現していた。

緑の少女は盾の隙間からその様子を興味深く見つめている。カキカキという音がするのは、メモを取っているからだ。

その様子にターンは満足げに頷いた。

『それでこれは提案なのだが、我らＤＪＤは常に有能な人材を求めている。貴女さえよければ我々は歓迎するのだが』

『欠員が出ているからな』

ターンの提案に割り込む様に、オーバーロードが呟く。光で出来たモザイク然とした顔であったが、ニヤついていることがコルボーには分かった。

『なので連れてきたぞ』

相手が二の言葉を紡ぐ前に、オーバーロードは横に退けた。

その背後には、サイバートロン人が座れるサイズの椅子があった。

背もたれ等から禍々しい造形の、刺胞動物の触手のようなものが生えた椅子だった。

それは盾の少女が先程まで座っていたものだが、何時の間にか巨大化していた。

『……』

それを前にターンは硬直していた。何かを言おうとしているようだが、言葉が出ないらしい。

『ふむ。「座れ」と言っているようだな』

はっきりと分かるほどに笑いながらオーバーロードは言う。邪悪としかいいようのない、満面の笑みであった。

硬直し続けるターンを、拷問を続けながらも部下たちが見ていた。選択肢は一つしかなかった。

『……ケイオン……そろそろ許してくれるのか……？』

椅子に問い掛けるターン。

『妙な光景過ぎるだろ』

コルボーがそう言ったのも無理はない。次の瞬間、雷が炸裂した。

『ＡＲＲＲＲＲＲＧＨ!!!』

椅子全体が電気を帯び、ターンに強烈な電撃を浴びせていた。
光で出来た身体から白煙を上げながら、ターンは椅子から落下した。
一瞬で元に戻ったが、椅子の一部が脚となって蹴落としたようにも見えた。

『その様子だと無事に和解は済んだようだな。これは目出度い、すぐ祝杯を上げよう。そうと決まったら会場の設営やイベントの計画も始めねば』

オーバーロードは全くとして真面目に、そして祝福するように言っている。
そして実際に端末を取り出し、計画を入力し始めた。
幾つかの相手への連絡も行っている。こういったイベント運営に手腕を発揮する魔法少女への連絡だろう。

『悪魔』

コルボーは言った。
それは何を示した言葉だろうか。
連絡を終えたオーバーロードは魔獣の腹を裂いて内臓を取り出し、伸びた臓物を首に巻いて首吊りをさせて遊んでいる。

『この連中も窒息する。やり過ぎると破壊してしまうから丁寧に、相手を思い遣って行う事が大事だ』

首吊り状態にさせた魔獣を指に括り付け、てるてる坊主のように揺らしながら盾の少女に拷問法を丁寧に教えるオーバーロードか。

『女神様は仰られた。「ウェヒヒ」と』

謎の引用をした途端、周囲で転がる魔獣の身体が跳ねた。
すると腹部が破裂し、液状の瘴気となった内臓が爆裂した。
その様子にオーバーロードは不満顔となった。
前以て内臓を破壊された事で、それを使って遊べなくなったからだ。

『そしてこうも仰られた。『もう何も怖くない』と』
『間違ってるぞ』

指摘されるもターンは無視する。続いて魔獣達の手足が爆ぜた。
コルボーには、この破壊が何によって行われているかの察しがついた。

「相変わらず騒々しい連中だな」

それが何かを独り言として呟こうとした時、大人びた女の声が鳴った。
魔獣は沈黙し、光の巨人たちも動きを止めた。
その声を放った者への、恐怖と畏怖に依る為に。

特別編　世の果ての宴⑥

「相変わらず騒々しいなお前達は。少しは静かにできないのか？」

大人びた女の声が鳴る。黒い長袖のシャツと白いスラックスを穿いた、赤い長髪の女がいた。

『え？』

それを見ているコルボーの意識体は首を傾げた。この存在は今、実体としての自分の前にいるからだ。

『あ、気にしないでいいよ。私は何処にでもいるのだから』

コルボーの元へと意思が届いた。ならそうか、と彼女は思い返した。

この存在に不可能は無く、理不尽であることが通常であるからである。

「だから泣き叫ぶのを少しやめろと言っているだろう。言葉は分かる筈だが？」

光で出来た機械の巨人たちを尻目に、赤髪の女は魔獣達に話しかけていた。
四肢を切断され、肉体を破壊された魔獣達は抉られた喉を震わせて叫んでいた。
極限の恐怖が苦痛を消し去り、魔獣達を叫ばせていた。女は溜息を吐いた。

「ディセプティコンの諸君、これは少々やり過ぎではないか？」

『…魔神殿』

応じたのはターンであった。委縮しきっている部下たちに指揮官として示すものがあるのだろう。
その背を推したのはオーバーロードであり、当の本人は二歩ほど後退していた。
応じたはいいが、ターン本人も何を言っていいのか分からなかった。
危害を加えてこないというのは分かっているのだが、相手が相手だけに対応に苦慮しているのだった。

「という訳で、私にいい考えがある」

黙っていると、当の相手が話を進めてきた。

これ幸いとターンは黙った。

きっとロクでもないことになる、という共通認識だけがあった。

「たまには苦痛だけではなく、娯楽を与えようと思うのだ」

言った瞬間、女の掲げた右手には古めかしい四角のテレビが、左手にはレトロな雰囲気のゲーム機が乗せられていた。

無から有を生み出したというより、最初からその手にあったかのような自然さだった。

ゲーム機からは電線が伸びてテレビに接続されている。

それを見た瞬間、テレビから無数の触手が迸った。

それは一瞬にして、全ての魔獣の頭部を貫いた。

地面に散乱する魔獣に加え、こことはかなり離れた場所にある魔獣の拷問部屋の個体も同じ有様となっていた。

何事だと一同が見る中、女は「スイッチオン」と言った。テレビが点滅した、と思った直後にはドット絵で描かれた世界が画面の中に展開されていた。

峩々足る山脈に荒涼たる大地が広がるレトロ感あふれる世界には、横向きの人型がいた。

それは右へと向かって歩き、そして爆発四散した。

『え？』

コルボーが疑問の声を発した。

その直後、『デーレレレーレー、デン！』という軽妙な音楽が鳴った。

黒一面の背後の中に人型のがおり、その隣には『×８』という数字があった。残機と言う事らしい。

再び画面が切り替わったが、またも直後に人型は砕け散った。

その次も、その次も同様だった。

その度に頭部を管で貫かれた魔獣達は痙攣した。

そこで察しがついた。魔獣達は今、このゲームの世界に閉じ込められているのだと。

何時の間にか、一つだけだった筈のテレビは所狭しと並んでいた。

地平線の彼方まで、地面は各々の足場を除いてびっしりと。

『ふむ』

オーバーロードは顎に右手を添えて呟いた。

『確認出来た限りで、五十八億九百二十万三十七の端末が見える』

『空中のも足したか？』

ターンが続ける。テレビは地面だけでなく空一面にも広がっていた。

そして一つの画面の中にも無数に同じ光景が広がっている。

微細なドットの中にもゲームの画面があり、その中にも同じものがあった。

サイバートロン人達が倍率を上げていくと、百層に渡ってゲームが繰り広げられているのが認識できた。

認識できたのはそこだけであり、更に奥にも万華鏡や無限鏡のゲームの世界があることが察せられた。

「ようやく少し進め始めたな。学習は大事だ」

女は満足げに告げる。よく見れば、人型が爆散したのは前方から飛翔してきた戦闘機から放たれた弾丸であることが分かった。

弾丸は背景の色に同化している上に非常に小さく、いわゆる初見殺しというものだった。

そこを突破しても戦闘機の突撃によって人型は爆散する。

それもまた幾つも幾つも、無限に近い数で続いていく。

戦闘機は主人好機である人型の弾丸を受けると、今度は戦車へと形を変えて突撃。

激突した人型は粉砕された。

『今、気付いたのだが…』

『貴様もか…』

他者の死と苦痛を楽しむ残虐な精神を持つ二体のトランスフォーマーが、畏怖の声を出していた。

その原因とは。

『おいお前ら!!俺と同じデストロン軍団だろ!?頼むから助けてくれえええええええ!!!!』

意識を研ぎ澄ませると、画面からはそんな叫びが聞こえてくるのであった。

『…何をしているんだ、スタースクリーム』

ターンはテレビの一つを指先で摘まみ、画面内の人型を眺めながらそう言った。

人型にはドット絵で再現された翼があった。

「うむ、このゲームは素晴らしい」

赤髪の女が語る。画面の中では相変わらず、理不尽な難易度に晒されて爆散する自機…スタースクリームの様子が描かれていた。

「この愚か者はつい先ほど逮捕した。優木沙々と結託し、通算十一万四千五百十四回目

の叛逆行為を企てたからだ」
『魔神様！そいつは誤解でさぁ！俺はメガトロンを倒してニューリーダーになれれば十分なんだ！この世界は相棒の好きにして良いって言っただけで』
『判決。叛逆罪にて死刑』

冷たく告げたターンの指先でテレビが潰され、実体としてもスタスクは砕け散った。
凄まじい絶叫と共に、地面に転がっていた魔獣の一体の顔が弾け飛んだ。
後ろではオーバーロードが哄笑している。だが哄笑は不意に停止し、虚無の表情が浮かんだ。

『愉快だが、悍ましい世界だ』

視線の先では、ゲームの世界に閉じ込められているとされるスタスクが死に続ける光景が広がり続ける。
無限ループの回廊に取り込まれて何処にも行けなくなった者、海老のような謎のメカに接触し爆散するスタスク、見覚えのない球体と戦うスタスク、自軍のエンブレムと戦うスタスク…。

難易度に加えて、異常に過ぎる光景が続いていく。
ここは、死と苦痛に満ちたゲームの世界だった。
魔獣達は自機であるスタスクを通して、このゲームの世界に拘束されていた。
「これはとても素晴らしい。このゲームは遊戯としても優秀で、私もよく遊んでいる。女神も時折寝食を忘れて遊び続けているのだ」
その場の全員が絶句し、女を見る。
客観的に見て、このゲームは面白いとは思えないからだ。
「この神ゲーを遊ばせることで魔獣達の精神を癒し、加えて数多の世界を見てきた私でさえも度し難さを覚えるこの愚か者にも罰を与えられる」
満足そうに女は言う。演技ではなく、一辺の疑いも無く本心で言っているのであった。
「さぁ魔獣達!この愚者の遊戯で存分に遊んで英気を養うがいい!」

女が叫んだ瞬間、魔獣達は一斉に叫びを上げた。絶望を超えた絶望の叫びだった。
叫びを上げる口からは濛々とした瘴気が溢れた。

『うあああああああ!!!!メガトロン様ぁあああああ!!!助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!』

名前の如く、星の金切り声を上げてスタースクリームは叫んだ。